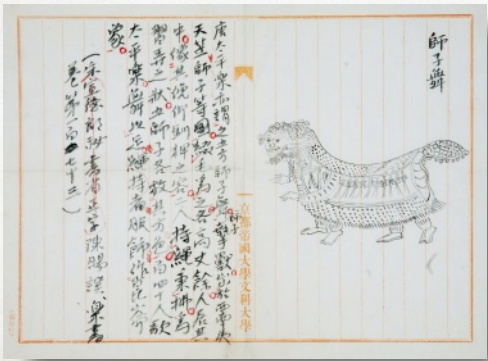


名古屋大学附属図書館 2007年秋季特別展

「遊心」の祝福

—中国文学者・青木正児^{まさる}の世界—

天遠為老農故御山園三畝鏡湖傍
嫩莎經雨如秋絲小蝶穿花似陶黃
斗酒逢逢人小
相逢但喜余
相達但喜余
相達但喜余



名古屋大学附属図書館 2007年秋季特別展

「遊心」の祝福

—中国文学者・青木正児^{まさる}の世界—

発行日 2007年10月1日
編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL : 052-789-3667 FAX : 052-789-3693
<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp>

©名古屋大学附属図書館
ISBN 978-4-903893-02-0

2007年10月1日月 ~ 10月19日金

名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

目 次

口絵	
「2007年秋季特別展開催にあたって」	1
「名古屋大学附属図書館秋季特別展によせて」	2
「終わりなき『江南春』の旅—その原資料が語るもの」	3
I 青木正児略歴・業績紹介	6
II 青木正児が見た中国	7
コラム（1）「青木正児と同時代中国」	
III 青木正児の交流関係	14
コラム（2）「青木正児博士と中国近現代の文学・思想」	
コラム（3）「梅蘭芳・届いた思い —日本人を熱狂させた梨園の名花」	
コラム（4）「傅芸子との交流・清く澄める白川の水 —書きつづりたる文の数々」	
コラム（5）「倉石武四郎との交流・新しき支那語学を目指して —中国語で漢文が読めるようになりたかった」	
IV 青木正児の名物学	52
コラム（6）「名物学に関して」	
V 青木正児の諸研究	57
コラム（7）「民謡、童謡、時代の息吹 —週刊『歌謡』は言葉の泉」	
コラム（8）「青木正児という原点—中国文学評論・批評史の視点から」	
コラム（9）「文人画とは詩情にあり—青木正児の世界デッサン」	
コラム（10）「河合絹吉氏の書簡・漢字、漢文の衰退を憂う —ミスター・二中、迷陽先生に気を吐く」	
VI 青木正児の自筆原稿・蔵書	76
コラム（11）「青木文庫所蔵珍本紹介—『新撰 古今雑歌 附歌詞』」	
青木正児博士年譜	90



〔1〕「瑶池寿を上る」図（『新春画冊』1）



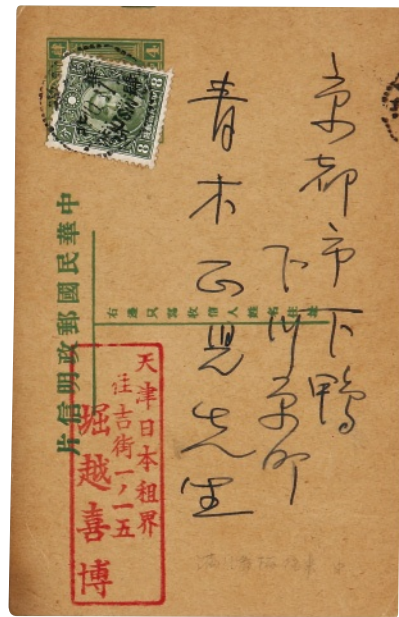
〔2〕『三国志演義』もの（『新春画冊』2）



〔3〕「天仙娘娘」(左)・「白衣送子観音」(右) (『神碼及娘・碼』)



〔4〕「漢鐘離と張果老」(左)・「呂洞賓と韓湘子」(右) (ともに八仙) (『祭礼紙様』)



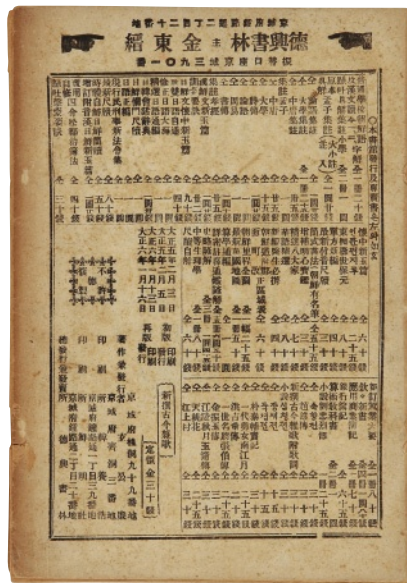
〔5〕『満洲看板往来』と青木宛ハガキ



〔6〕「消えゆく風景の記憶—店の看板」



〔7〕「俗謡の魅力」(『古今雜歌』表紙)



〔8〕「こんな本を出版しています」
(同裏表紙兼奥付)



〔9〕「漢字ハングル混じり文」(同裏表紙見返し)

2007年秋季特別展開催にあたって

名古屋大学附属図書館及び附属図書館研究開発室では、ハイブリッド図書館構築の一環として、附属図書館所蔵資料を中心に、関連資料も含めた調査・研究を進めるとともに、学内外の連携のもと、特別展や企画展等を通じてその成果を公開してまいりました。今回の2007年秋季特別展では、「遊心^{ゆうしん}の祝福」と題し、名古屋大学文学研究科との共催で、近代日本の代表的な国際派文人である青木正児^{まさる}が収集した漢籍や資料をとりあげます。

青木博士は、魯迅、羅振玉、王国維、胡適、川端康成、土岐善麿など、日中の錚々たる文人たちと交流しながら、「遊心」の境地で古典中国の広大な学的宇宙を自由自在に飛び回り、今日の中国学の基礎を築きあげました。さらに博士は、難解な中国古典をできるだけ多くの人々に紹介するために、分かりやすい現代語訳を工夫するなど、おおいに啓蒙と普及に尽力したことで知られております。博士のこのような高い学識による先見的業績、豊かな国際交流、学術文化の普及活動は、現代の私たちにとってもおおいに模範とすべき事例であり、今日、このような人物にもっと世の関心が向けられるべきだと思います。今回の特別展開催の理由も、まさにこの点にあります。

青木博士の没後、貴重な蔵書・資料は遺族により名古屋大学附属図書館に寄贈され、「青木文庫」として30有余年にわたり保管されてまいりました。資料の大半は、日常生活の中で得られたごくささやかなものがほとんどですが、青木博士の学術研究にとって大きな意味があったということが、文庫の調査研究によりしだいに明らかとなってまいりました。今回、私たち附属図書館は文学研究科と連携しながら、そうした青木博士の足跡や人間性を振り返る特別展を開催することとなりました。ぜひこの機会にご観覧いただき、青木正児の「遊心」の世界にふれていただければ幸いです。

最後になりましたが、文学研究科中国文学研究室をはじめ、特別展開催にご協力くださいました関係機関、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

2007年9月

名古屋大学附属図書館長
同研究開発室長
教授 伊藤義人

ご挨拶：「名古屋大学附属図書館秋季特別展によせて」

名古屋大学副総長 杉山寛行

平成19年度秋季特別展は、青木正児博士(1887-1964)に関わる展示がなされるという。

青木正児博士の業績の全容は、『青木正児全集』全10巻(春秋社)に収録されている。先駆的で精密きわまりのない中国戯曲史、中国文学思想史、評論史についての業績は言うに及ばず、博士が愛されてやまなかった『楚辞』『李白』の注解などが、そこには見出される。まとまった著書はないものの荘子や陶淵明への愛好などが色濃く示されることもある。また中国新文学運動の最初の紹介者であったこともそこからは知られる。

しかし同時に指摘されなければならないことは、博士が『金冬心之芸術』をはじめとする中国の多方面にわたる芸術の理解者であったことである。その理解は、生活に根ざした芸術の、単に趣味にとどまらない厳密な学問的考証に基づいており、必然的にその対象は広範な領域にわたっている。今「趣味にとどまらない」と記したが、実は緻密な考証に裏打ちされ、しかも自らもその世界の実践者たりうる博士の「趣味」の世界と記すのが正確であるかも知れない。

『随園食単』(「随園」は清の袁枚の号、「食単」には江戸文芸に造詣の深かった博士らしく「れうりメモ」とルビをふられている)は今日岩波文庫に収められているが、その仕事に取り掛かる経緯について、博士は「『随園食単』訳余贅語」(『同全集』第7巻)に記しておられる。そこでは、当初随園を好まず、むしろ清の顧清仲「養小録」の気取りのなさを好まれたこと、しかし該書が大部な叢書『学海類編』にのみ収められているので、京大の蔵本を借出して手抄した、とある。「私は学校の蔵書を借讀し、興味を覚えたものを手抄して「借讀鈔存」と題して數冊を得たが、是は其の第一冊であつた」。この數冊のノートは今回の展示の一つとしてあるはずである。「『食単』を通讀したのは、戦時中食糧難から食物の話に興味に向つて」ともある。渴望と学問的考証、それに基づく想像力のありようが窺われるようでもある。また中国との戦争の中、渴望はただ食糧にのみ及ぶのではないであらう、そんなことを感じさせるメモや切り抜きも存する。

今回の展示は、博士蔵の貴重書をはじめとして、上記のような博士の業績の裏側において、博士の生活と関わった展示もみられる。留学時代の観劇プログラム、書物・筆・墨・茶などの目録、中国の学者・芸術家との交流を示すもの、果てはさまざまな領収書の類まで。学者であると同時に文人であった博士の、生活と嗜好と学問研究とが一体となった姿の、その一面が垣間見られることを期待している。

前言：「終わりなき『江南春』の旅—その原資料が語るもの」

名古屋大学文学研究科教授 加藤 国安

わが名古屋大学附属図書館には、近代日本における中国文学の開拓者・青木正児（1887－1964）の蔵書・資料が、大切に保管されている。その数、「目録」の件数でいうと343点、個々の資料まで細かく数えると、およそ千数百点。その中から、今回とくに重要と思われるもの100点ほどを選び、展示することとした。

青木といえば、わが国の近代中国文学の草創期の大神人である。いわば第一世代の人物にあたる。彼の卓抜な着眼によって始まった中国学の研究領域は少なくない。「近世戯曲」「文学評論史」「書画論」「名物学」「酒茶論」などの重厚なまとまりを持った業績のほか、単発的な仕事として1) 日本最初の魯迅の発見、2) 文学革命の最初の紹介、3) 新文化運動—中国の童謡—の紹介、4) 漢文訓読体から漢文直読への転換の主張などもある。いずれも今日、青木のすぐれた先見性を示すものとして高く評価されている。

その後、日本の近代中国文学は、青木正児の弟子たち—第二世代の吉川幸次郎や小川環樹・入矢義高・中田勇次郎ら—により飛躍的な発展を遂げた。みな青木のまいた種から大木に成長し、豊かな実りをつけたのである。そして今日、わが国の中国文学界は年々それぞれのテーマにおいて、より豊かな学術成果をあげつつある。

このような時代状況のもと、今なぜ青木正児なのか、没後40余年を経て静かに語られつつある。「京都新聞」の二年間（03.9.11～05.7.28）におよぶ長期連載「陶然自楽—青木正児の世界」（計45回、文化報道部・永澄憲史記者、当時）も、その一つである。連載はいずれ近い将来、某出版社から刊行される話もあるという。青木正児という一学者の知られざる世界が、少しずつ人々の関心を引きつつあるようだ。

中国の豊潤な学芸文化—それは曇りのない純真な目をもつ者には、きらめく大星雲のごときに見える。ナショナリズムの猛威が吹き荒れていたあの時代、何ものにも汚されず凛とした姿勢で、この中国文化に向き合った青木の姿勢は見事というほかない。そんな彼だからこそ、日中の壁を越えて多くの知人がいた。一個の人間として、人類の豊かな文化的大星雲に深く感銘する彼の前には、どこまでいっても尽きぬ知的愉楽があるばかりだった。青木にとって、中国の学芸文化は「遊心」から生まれていると考えられた。したがって、それを受け入れる者もまた、無上の「遊心」を手に入れるのである。

こんなにも楽しい気韻に包まれる青木ワールド。その前提として、世俗の偏見から解放されていたことに加えて、自由人の発想で物の本質を見極める眼力があつた。ために、青木の洞察はしばしば中国本土の人の先を行つた。かの戯曲研究がそうである。当時、「崑曲」は高雅に過ぎるとして観客が離れ、より通俗的な京劇におされて衰退期にあつた。それを学術的な角度から高く再評価した青木の功績は、きわめて大きい。

中国の伝統戯曲「崑曲」は、2001年、ユネスコにより世界無形文化遺産に登録されたが、その意味で、青木正児はある意味、中国学にとってのブルーノ・タウトだったといえる。タウトとは、いうまでもなく日本の伝統美を見出し、『ニッポン』『日本美の再発見』などを著した、あの人物である。

大学を出たばかりの頃、それまで文献中心の研究をしていた青木は、まだ中国文化の実態をよくつかめてはいなかった。そこで江南の旅を思い立つのである。大正11年、36歳のことだった。青木の代表作『江南春』の一節にいう、

私は畫家で無い。併しかうやつてゐながら、頭の裡に幾枚かの圖を作つた。私は詩人で無い。併し何時と無く長篇の詩が頭の裡に出來た。そして兩者は渾一して無義無韻無形無色の藝術的要素が頭の中に渦巻いてゐる。

現地の青木が見たもの、それは新鮮な感動に襲われ通しの異文化体験だった。その時の強いインパクトは、彼をして「無義・無韻・無形・無色の藝術的要素」で充満せしめてしまふのである。以後、この濃密な体験が青木ワールドの貴重な資産となってゆく。

青木の最初の著『金冬心之芸術』（大正9年）の舞台となった揚州の虹橋を訪ねた時の感慨は、こうである。

王漁洋が揚州府の推官（判事）として來てゐた折、此の近くの法海寺のほとりに居を構へてゐて、日々名士と遊宴したと云ふ。我が冬心や板橋や高鳳翰なども定めし此の邊をあばれ廻はつた事であらう。

また彼の好きな崑曲劇が直営で行われた天寧寺付近も訪ねた。さらに西湖畔では唯一の劇場・鳳舞台に感激し、「舊劇の一齣を見る事によつて私の空想は復た聊か光彩を放つて來」るのである。こうした経験が、のちに『支那近世戲曲史』（昭和5年 弘文堂）に結実する。西湖の露店では、あの「夢にも忘れる事の出來ない冬心先生」に出会っている。無造作に重ねられた拓本をめくってみると、俗悪なものばかりで失望しかかったが、それでも「何か有りさうな氣がしてかき探してゐると、梅の圖が一枚出た。」それは一種独特の高い韻致が感じられた。それこそまさしく金冬心のものだったのである。この時の青木の心の動きがじつにいい。

私は夢中で其れを引ずり出した。之に景氣づいて猶ほもかき探してゐると、又冬心の華嶽碑の臨本が四枚揃つて出て來た。私は胸迫り、手先がわななく程喜んだ。

蘇州や南京も楽しかった。その思い出はまさに永遠なものだった。

大正14・15年、今度は東北大学の派遣で二度、中国入りする機会に恵まれた。この時、北京からかの「北京風俗図譜」（東北大学附属図書館蔵）を持ち帰っている。消えゆく伝統文化の保存に強い問題意識をもって取り組んだのも、青木だった。じつはほとんど知られていないけれども、青木文庫にも当時のありさまが描かれた版画コレクションが残されている。その中には、今やコミック版で人気の「封神演義」の図もある。中国滞在中、青木の好奇心はことのほか旺盛になった。

また再度の江南の旅にも出かけ、蘇州の崑曲などを中心に資料収集を行っている。王国維・胡適らとの交流も知的刺激に満ちたものだった。この時の成果がもとになって、後年の代表作『支那近世戲曲史』が完成、彼の名は中国・日本中に高まるようになる。これを機に、その後、内外の学者・文人との交流はますます活発化していった。それに伴い、青木の学問もさらに深みを増していったのである。

青木文庫を一点一点調査してみると、雑然とした資料が随分出てくる。ホテルの宿泊領収書や劇場のチケット・プログラムの広告・商品の商標や広告・書目等々。なぜこんなものを大切に疑問に感じたものだが、幾度も接しているうちある時、ふとそれが青木にとっての大切な宝物だったと得心するようになった。この書類を見ただけで、あの日の楽しかった旅がまざまざと目に浮かんで来るのだろう。つまり、青木の「江南春」の旅は、帰国後も終わっていなかったのである。いな、彼にとっては、永遠に終わらない夢のごときであって欲しかったのだろう。これらはいわばその夢のかけらなのだ。つまり、旅先で

の「胸迫り、わななく程」の好奇心を、いつまでも鮮明な状態で保存しておく媒体なのだと思います。これらの小品を見るたびに、彼はたちまち永遠の旅に出発することができた。かくして青木の「江南春」の魅惑の旅は、未決の芝居のごとく何度でも楽しめるのだった。加えて、中国文化を通して人類の普遍的真理に迫りたいという彼の強い情熱も、生涯消えることはなかったのである。

ひるがえって、現代の中国学はどうか。今や、中国文学も個々の領域ごとに細分化され、青木のようにば広くその全体を見渡す人は少なくなった。また中国文学の研究者はいても、中国風文人を体現する人もそうはいない。さらに大学の雑務が繁忙をきわめる空気の中、青木のように超然と構えて研究に専念できる人は、なおのこといない。青木の時代に比べて中国研究の基盤整備が格段に進んだ今、私たちの前途には何か魅力的な地平が残されているのだろうか。我々はどこへ向かおうとしているのか。また向かうべきなのか。しかし、我々の時代をとくに困難に満ちていると思うのは慎みたい。

いつの時代にも困難はあった。中国軽視の世相の中、青木には変人という冷たい視線が投げかけられた。しかし、青木はまったく動じなかった。淋しくないではなかった。けれども屈原や阮籍・嵇康・李白・八大山人や金冬心らに思いを寄せる青木は、彼らが「齷齪たる社会の一員としての小我を捨て、廣大無邊な大自然の中に逍遙遊し、万化と冥合する大我を見出」していることに胸を躍らせ、「然る時は如何して之を熱愛讚美せずして居られやうか」（「支那文芸に溢れたる高踏的気味」『支那文芸論藪』）と、熱く咆吼するのである。

この特別展を機にもう一度、青木正児のこの燃えるような中国文学研究の原点を見つめ直し、青木学から改めて何をくみ出し得るのかを再考する場になればと、そう切に願うものである。

特別展に向けての諸準備は、本学の文学研究科中国文学研究室が中心になって行った。『図録』の編集は、青木文庫の一冊一冊を念入りに調査し、その書き込みの意味まで考察し、現時点で知られるかぎりを報告することとした。ことに金城学院大学・張小鋼教授、本学文学研究科博士課程後期中塚亮君、京都新聞の永澄憲史丹南支局長らは、平生から青木文庫に親しみ、そこで得た知見のすべてを提供し、我々の作業を大いに助けてくれた。作業が進むにつれ、中塚君は『図録』の細部にわたる記述やまた展示室の設置など、万般にわたってフル稼働で貢献した。またその他の院生諸君の積極的な働きも忘れがたい。さらには塩村耕教授（文学研究科・日本文学）や他研究科の応援も得ることができた。中井政喜教授（国際言語文化研究科）、笠井直美准教授（国際開発研究科）には心より感謝申し上げる。この熱意を引き出したのも、ほかならぬ青木正児博士の魅力である。期間中は、永澄憲史氏と井上進教授（文学研究科・東洋史）の特別講演も行われる。ぜひ会場に足を運んでいただき、直接青木先生のお人柄や研究に触れていただければと願っている。

I 青木正児略歴・業績紹介

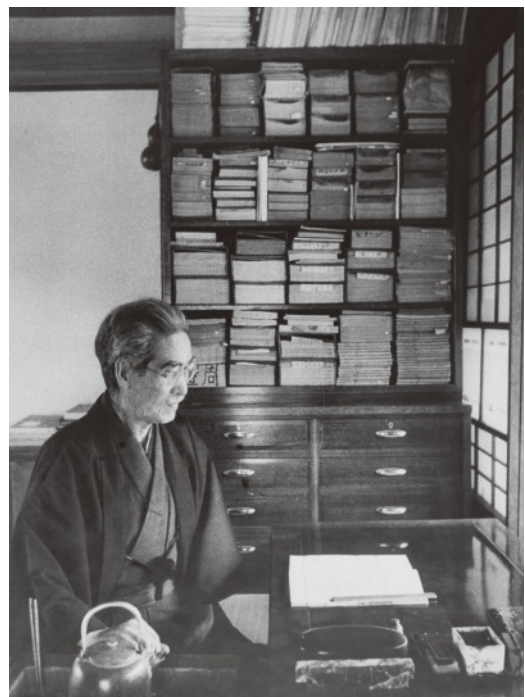
青木正児(1887-1964)、字は君雅、号は迷陽。東北帝国大学・京都帝国大学・山口大学教授。京都帝国大学で狩野直喜・鈴木虎雄らに師事。また一時期、幸田露伴に創作を学ぶ。青木の研究は広い範囲に及ぶが、いちばんの軸は戯曲研究にある。もともと浄瑠璃などを好んでいた青木は『西廂記』から戯曲に近づき、狩野直喜より「正式なる元曲読法」を学び、卒業論文『元曲の研究』を仕上げる。中でも末章の「燕楽二十八調考」は、西洋の音楽理論を導入して古典戯曲の音楽を論じた画期的なものであった。その後、青木は王国維の大著『宋元戯曲史』を継いで明・清の戯曲史を論じた『支那近世戯曲史』を書き上げる。戯曲を「読む戯曲」として論じた王国維に対し、その音楽性に対する顧慮や、二度の中国行きで実際の芝居を観た経験を取り込んで総合的に論じている点が、青木の戯曲研究の大きな特徴といえる。青木は同書で京都帝国大学より博士号を授与された。

青木がはじめて世に出した単行本は、清代の書画家・金農(号は冬心)について論じた『金冬心之芸術』であった。中国の文人は琴棋書画に通ずるのを旨とするが、青木にはまさしくその風があった。音楽については上に触れたが、一時期、画家をこころざしたこともあったようだ。ただし、「文人肌」の青木は同時に時代の先端を見きわめる鋭い目も持っていた。中国の新しい文学の動きにいち早く対応し、魯迅の最初期の紹介者という面も備えていることを忘れてはならない。

京都での下宿時代を振り返って青木は、「一つの楽しみは、矢張り酒を飲むことと、詩を読むことであつた。…最も愛誦した集は李白の集であつた。秋夜燈下に繙いてみると、生唾が出て飲みたくなる。飛び出して四號罎を買つて来て、番茶茶碗で傾けながら讀むと一層面白くなる」と述べている。後年、その嗜好は『中華飲酒詩選』や、亡くなる前日に書き了えた『李白』の訳注として結実する。また酒や酒の肴から食べ物へも関心が進んでいくが、これまた飲食に関する雑考・随筆を生んだ。該博な知識を背景にたんなるエッセーにならず、かといって無味乾燥な論証記事にもとどまらず、きちんと「生唾が出て飲みたく」させるのは、酒徒青木の筆の力であろう。

青木の飲食考証は、晩年、力を注いだ「名物学」の一つの成果といえる。名物学について青木は次のように定義する。「名物学は名物の訓詁に發し、名物の考證をもつて窮極の目的とする」。つまり、ある「名前」に対して、その「名前」が何を指しているのかを明らかにする事に始まり、すすんで文献などによって実証的に考察を加える学問である。その出発点は「支那文學の理會を助ける爲に、中華の風俗を知る必要を感じ」たことにあり、具体的には画論中に出て来た「籐墩」とは何かを明らかにすることにあった。

以上、羅列的な紹介になったけれども、その広範囲にわたる諸研究は、青木正児という一個の「遊心」を核として生まれてきた、相互に関連しあう学的生態系なのである。



青木正児肖像写真

II 青木正児が見た中国

[1] 『新春画冊』 1・2*

『新春画冊』2冊、『祭礼紙様』、『神碼及娘・碼』の4冊はそれぞれ各種の図像資料をまとめて冊子状に製本したものである。いずれも表紙に「大正十五年二月輯」とあり、青木が文部省の在外研究員として中国留学した大正14（1925）年から15年にかけての時期に収集したものと知れる。このうち『新春画冊』2冊は天津製の版画を取める。青木の「春聯から春燈まで」（『青木正児全集』第7巻）と題する文章に、「俗悪な天津製の石版畫をぶらへ吊して霽いでゐるのは所謂畫棚なるものである。瑞氣飄蕩たる「大いに新年を過ぐる」の圖、慾張屋の喜ぶ「財神門に叫ぶ」の圖、さても芽出度い「瑤池壽を上る」の圖、お家繁昌「親家を會する」の圖、少し雅な所では西湖風景の圖、四季花鳥の圖、誰も喜ぶ芝居繪……其等は皆市民の氣分を一新する爲に萬家新春の壁上に貼り付けられるのである。」との記述がある。下線を施した版画は青木文庫に所蔵する。このほか「芝居繪」も多く取めている。また「畫棚」の様子は、青木が同じ時期に画工に北京の風俗を描かせた『北京風俗図譜』に描かれている。
 (* 「年の瀬の絵草子の市」一-18 内田道夫解説 東洋文庫 昭和39年)



（「瑤池壽を上る」図）→カラー口絵〔1〕を参照



（『三国志演義』もの）→カラー口絵〔2〕を参照

[2] 『神碼及娘ゝ碼』

青木が収集した神像版画23枚を綴じたもの。関帝や趙元帥などの神、催生娘娘や送生娘娘などの女神からなる。『北京風俗図譜』「神前の器具」に付された内田道夫の解説に、「紙に各種の神仏像を描いた神馬が神前にはられる。……農村の寺廟でよく見受けられるものは、このような関帝廟のほかに母性をまつた娘娘廟、唐の名医孫子邈をまつた藥王廟などがある。娘娘廟の主神はがんらい碧霞元君と称せられる女神であるが、イエンクワンニヤンニヤン眼光娘娘は眼病をなおし、ツスニヤンニヤン子孫娘娘は子宝を授けるとされる。そのほか財神廟は金持ちにしてくれる福の神で、財神としては関帝の信仰も厚い。……仏教関係では観音菩薩廟が多く、白衣送子娘娘や、南海慈航大士の信仰が厚い」とある。下線を施した神仏の版画は、青木文庫に所蔵する。



(「天仙娘娘」(左)・「白衣送子観音」(右))
→カラー口絵〔3〕を参照

[3] 『祭礼紙様』

青木が収集した掛銭、門神・竈君・鍾馗の版画など23枚を綴じたもの。

「春聯から春燈まで」に、「私は一度正月を北京で過した。無論舊曆である。師走のあわたゞしさはいづこも同じである。暹達々々(ぶらぶら)組と呼ばれてゐた吾々閑人は、與へられたる名に背かず、歳も押詰つた東四牌樓の大街をぶら／＼しつ、町の景氣を傍觀して歩いた。……露店の敷物の上、こゝには月餅の頂に飾り立てらるべき剪り抜きの繪紙や、新春の窓障子を粧ふべき紋紙が落花のやうに散ばつてゐる。かしこには安物の俗謠本や曆に雑つて陸官圖(出世雙六)が廣げられてゐる。……門の扉にはシンジョウ ウツルイ神茶・鬱壘の門神の彩色木板繪が相對して貼られる。門上には掛銭數枚が七五三繩を張つたやうな形に貼つて下げられる。掛銭は赤緑紫等の色紙を、切り子燈籠の垂れ紙のやうな鹽梅に種々な網狀の紋様を刻み込み、中に「福」「四季平安」「五禧臨門」「天宜賜福」等の吉祥文字が刻み出されてある。……北京では今も除夕は「守歳」と稱して徹夜すると云ふことである。そして未明に神を祭り、爆竹を鳴らして新年を迎へる。……敬虔の念に滿てる善良なる都民は此時「天地三界十方萬靈眞宰」の神碼(おふだ)の前に香蠟を獻じ、南千張(御幣のやうに切つた紙)を垂れ、元寶(紙製の馬蹄銀)を供へ、温かい餃子(葉肉入り團子の湯煮したもの)を供へ、三拜九拜して接神の禮を行つてゐるのである」とある。下線を施したものが、青木文庫に所蔵される。

また、『北京風俗図譜』にも関連する絵が収められている。門神の貼られている様は『風俗図譜』「新年の門飾り」(一-1)に、鍾馗については菖蒲の節句を描いた「色ひもで虎のお守りをつける」(一-8)に、紙銭が飾られた様は「神前の器具」(五-7)にそれぞれ見て取れる。



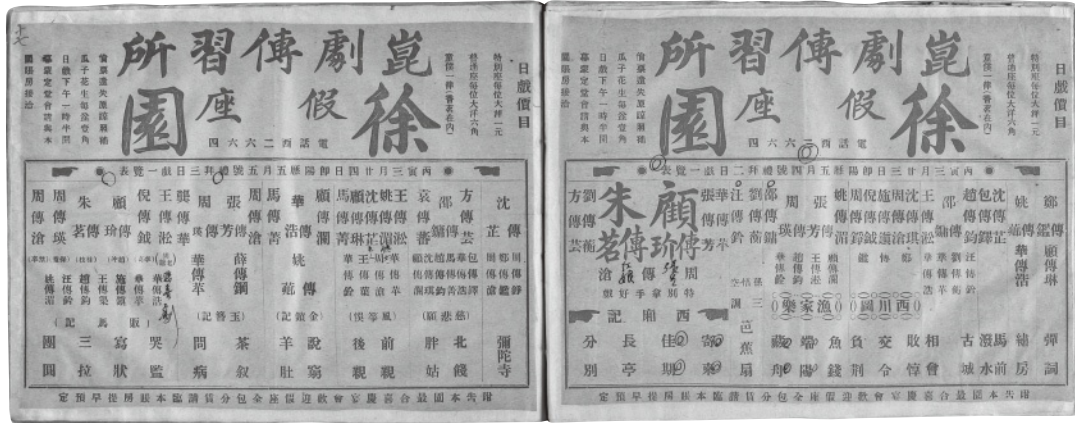
(「漢鐘離と張果老」(左)・「呂洞賓と韓湘子」(右)(ともに八仙))
→カラー口絵〔4〕を参照

[4] 『戲單』

戲單（中国の芝居のプログラム）29枚を綴じたもの。青木が在外研究員として中国に滞在した期間の大正14年（1925）4月12日（ただし表紙裏に「大正十四年四月起」「四月八日（戲單紛失）三慶園」云々との書き入れあり）から翌年6月7日までの28枚、及び韓世昌の1928年の京都市岡崎公会堂公演分1枚からなる。北京のものを中心とするが、上海・杭州・嘉興のものも含まれている。このうち崑劇伝習所のものについては赤松が紹介している。^{*1} また五・三〇運動への支援を目的とした「北京各校滬案後援會救濟罷工工人遊藝會」の戲單（1925.7.28）はその時代背景を物語る資料として注目に値する。^{*2}

*1 赤松紀彦「青木正兒先生與崑曲」（臺灣中央大學主辦「崑曲國際學術研討會」2005.4、口頭発表）

*2 杉山寛行・張小鋼「青木正兒博士とその資料（上）」（『名古屋大学文学部研究論集（文学）』46,2000）



崑劇伝習所のプログラム

[5] 『前台梁塵録』

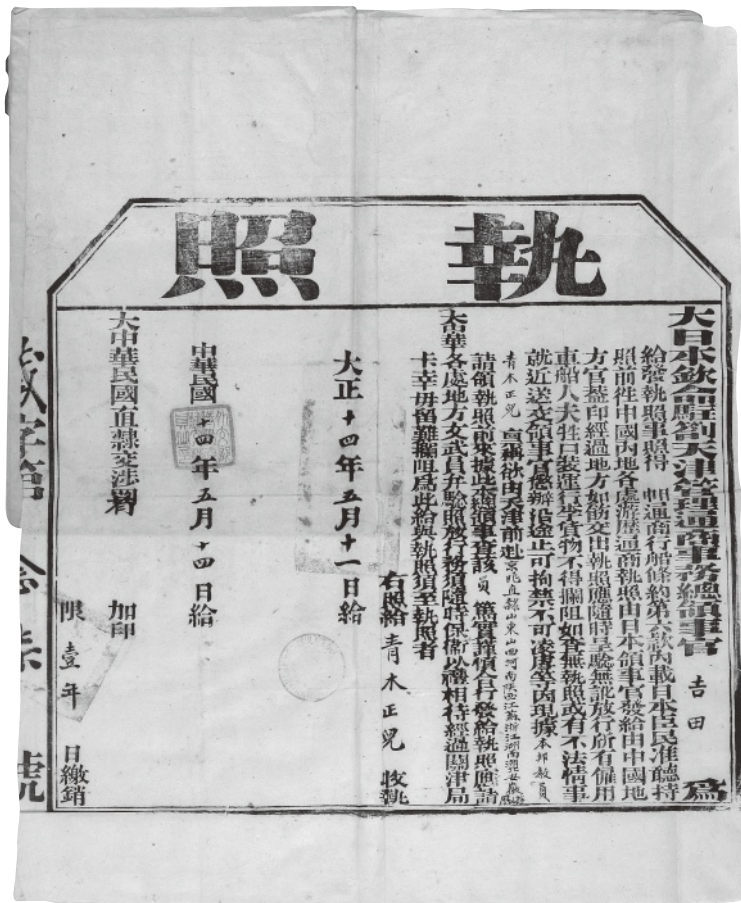
北京のタブロイド誌『群強報』所載の戯曲広告及び劇談記事の抜粋を一冊に綴じたもの。1925年陰暦の9月21日（陽暦の11月7日）から同10月12日（同11月25日）まで、青木が在外研究員として北京に滞在した期間のもの。広告45枚と記事22枚からなる。そのうち実際に見に行ったもの（朱で「看」との書き入れがある）は4枚で、いずれも戲單も残っている。



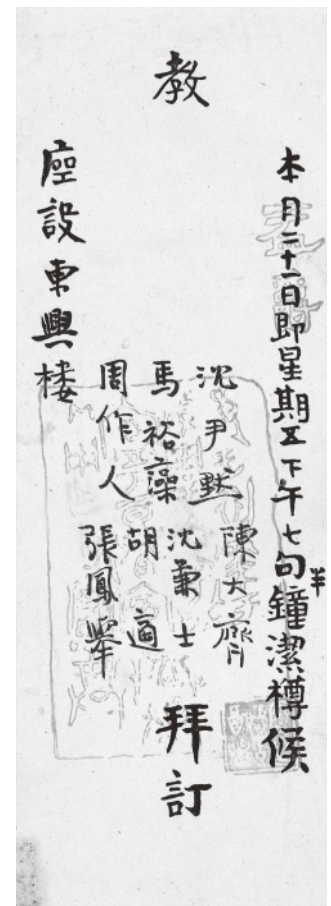
戯曲の広告



茶葉の包装紙



パスポート



周作人らの招待状

[7] 「江南の旅」

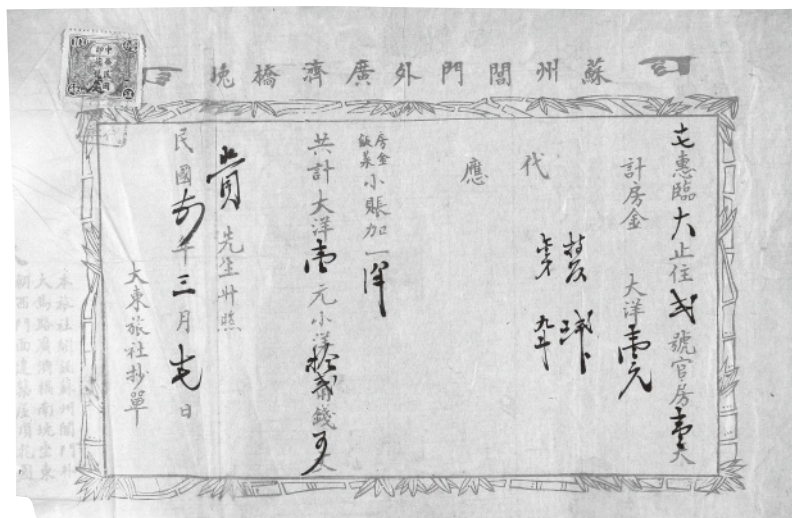
大正11年(1922)の春から夏にかけて、青木は中国の江南地方を周遊した。当時の青木は三十五歳、同志社大学の教員であった。この旅の手記は同年『支那学』に連載され、昭和16年(1941)に『江南春』という一冊の本として刊行された。次第に近代化する中国にあって、青木は古の風雅の名残を訪ねつつ、現地の人々と交流し、彼らの逞しさに瞠目する。その筆致からは、中国に対する尽きない好奇心、深い愛情を感じ取れる。青木は大正15年にも江南の旅を行っている。青木自編『雞肋』巻一には、その旅の記念として持ち帰った杭州・呉興・蘇州・寧波・紹興のホテルの領収書等が貼付されている。



寧波のホテルの領収書



杭州のホテルの領収書



蘇州のホテルの領収書

●コラム(1)：「青木正児と同時代中国」

西洋風の建物が増加しつつある西湖を嘆く声に対して、青木正児が次のように言っている。

「西湖を見て歸つた人の口から其の俗悪化されつゝあることの歎聲を數々吾々は聞き取つた。……御歎きはさる事ながら、ではお問ひませう、先生方は如何なる姿をして如何なる思想を持ち乍ら西湖を御見物なさいましたか。自分達の事は棚にして西洋風の建物をのみ咎めるのは、御聰明な方々にも不似合ひな御了簡でせう。……西湖は小數の物好きな日本遊覽客の爲に保存されてゐる骨董品で無い。西湖は生きてゐる、動いてゐる。……單に西湖を古典的な名勝としてのみ見る事は許されない。」

青木は西湖の西洋化が、「其れが時代の要求であるからには、觀者はむしろ一步譲つて論ず可きである」との見方を示す。

もっともそれは「議論は議論として」なのであって、自身の嗜好としては「今西湖に建つてゐる西洋館は賞賛出來」ず、「詩趣は私に古典的事物の前に額づく可く要求する」とも述べている。青木に於いて、「議論」と嗜好とはきちんと区別されていたということだろう。

だから、「支那青年諸君よ、此の老大國の病に少しでも效能の有りさうな藥は何でも服用してみる事だ。」とのエールは疑いもなくエールであるとしても、そこにつけ加えた「なんの西湖の一つや二つ臺無しにした所で構ふ事は無い」との声は、差し引いて考える必要がある。

わかりゆく中国はとどめられない。それならば、と青木は旧い姿を記録することを試みる。「私の氣づいたことは、北京には、まだまだ古い風俗が遺されてゐる、しかし其れも新しい洋風に化せられて、次第に失はれつつある、と云ふことである。今にして之を記録しておかなければ、遠からず湮滅してしまふであらう」。そこで青木は望子(看板)の写真を撮り、画工を雇つて街の様子を描かせた。その成果が「望子考」であり『北京風俗図譜』である。また同時にさまざまな版画を集め、広告、戯単(芝居のプログラム)といった普通捨てられてしまうものを集めた。同時代中国について記した文章が少ないのは残念だが、例えば旧正月の北京の様子を述べた「春聯から春燈まで」には青木が集めた版画のことや、『北京風俗図譜』に描かれた風景も描写されている。同様に、『北京風俗図譜』にも版画を売る画棚などが描かれている。文と図と収集した資料とをつなげて見ることで、私たちは青木が見た当時の中国の様子(それはやはりというか、残念ながらというか、青木の予想通りにおおかた「湮滅」してしまった)をうかがい知ることができる。

「北京へ遊學した初めの頃、私はよく獨りで隆福寺の縁日へ出かけた。それは書物の上では合點行きかねる支那人の生活縮圖が、極めて簡便に端的に展觀されて居るからだつた。……それは單に物珍しいと云ふばかりで無く、文字上の説明では手の届きかねる隅々までを一目瞭然と教へてくれる良師であつた。」と青木は述べる。その隆福寺も今はない。しかし、青木がのこしてくれた様々な資料は「良師」として私たちに多くのことを教えてくれるだろう。

*引用文は、

「杭州花信」(『江南春』『青木正児全集』第7卷所収)

「東洋文庫版『北京風俗図譜』序」(「雜纂」『同全集』第7卷所収)

「春聯から春燈まで」(『江南春』『同全集』第7卷所収)

「煙塩閑話」(『江南春』『同全集』第7卷所収)

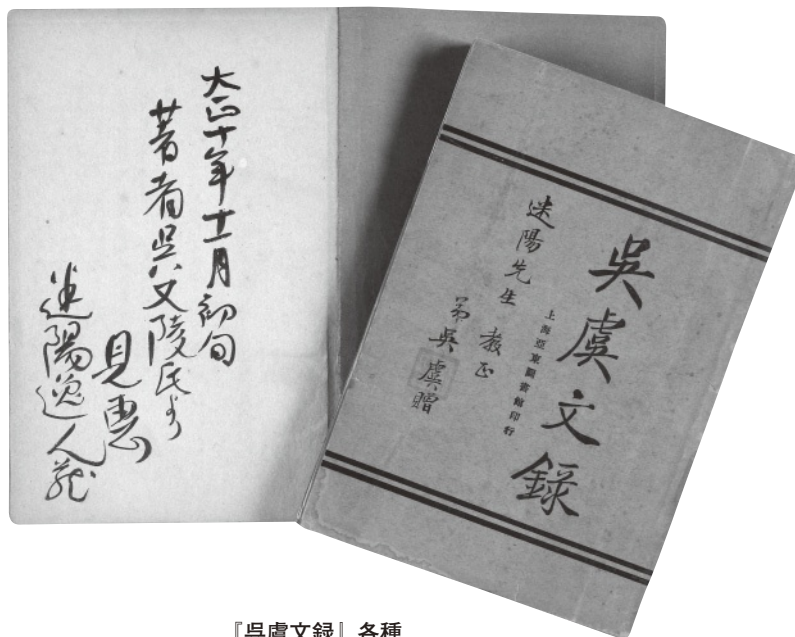
Ⅲ 青木正児の交流関係

【中国編】

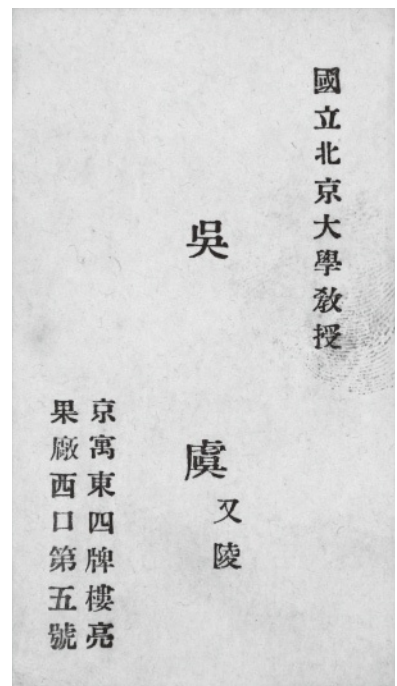
〔8〕 吳 虞

吳虞 (1872-1949) は四川成都の人。字は又陵。北京大学で教鞭をとる。1921年11月初旬『吳虞文録』と『秋水集』を吳虞から寄贈された青木は、同年同月、『支那学』に「吳虞の儒教破壊論」を発表した。辛亥革命から十年、中華民国では儒教が現代生活に適合するか否かの議論が起こっていたが、青木は、吳虞の新たに西洋倫理を持ち込もうとはせず、古来の文献に徴し、老莊を以て言を立てようとする思考に共感し、「吾が吳氏」と称して論旨痛快と絶賛した。四年後 (1925) 青木の北京遊学により、二人は初めて対面ししばしば往来した (『吳虞の儒教破壊論』附記)。1933年、吳虞は『吳虞文統録・別録』を刊行し、同著も青木に寄贈されている。その巻頭には、青木の『支那学』掲載の同論文が中国語訳され、転載されている。

なお『吳虞日記』(中国革命博物館整理 四川人民出版社 1984-1986) には、両者の交流が生き生きと綴られている。現在、青木の次男・中村喬氏宅には、計16通もの書簡が保存されている。それをもとに交流の具体的な内容を分析したのが、唐振常「吳虞与青木正児」(『中華文史論叢』1981-3) である。



『吳虞文録』各種



吳虞の名刺—『雞肋』

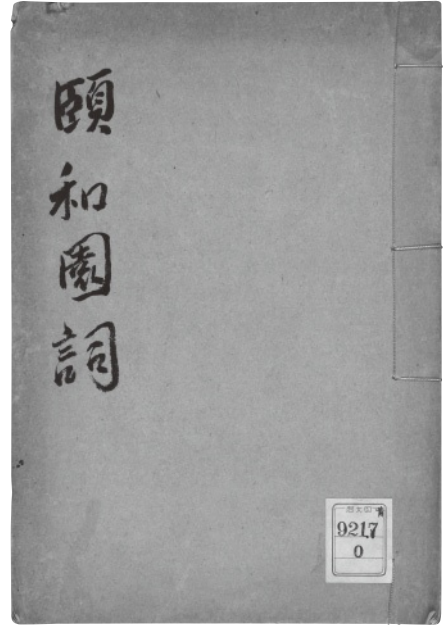


「吳虞の儒教破壊論」中国語訳など

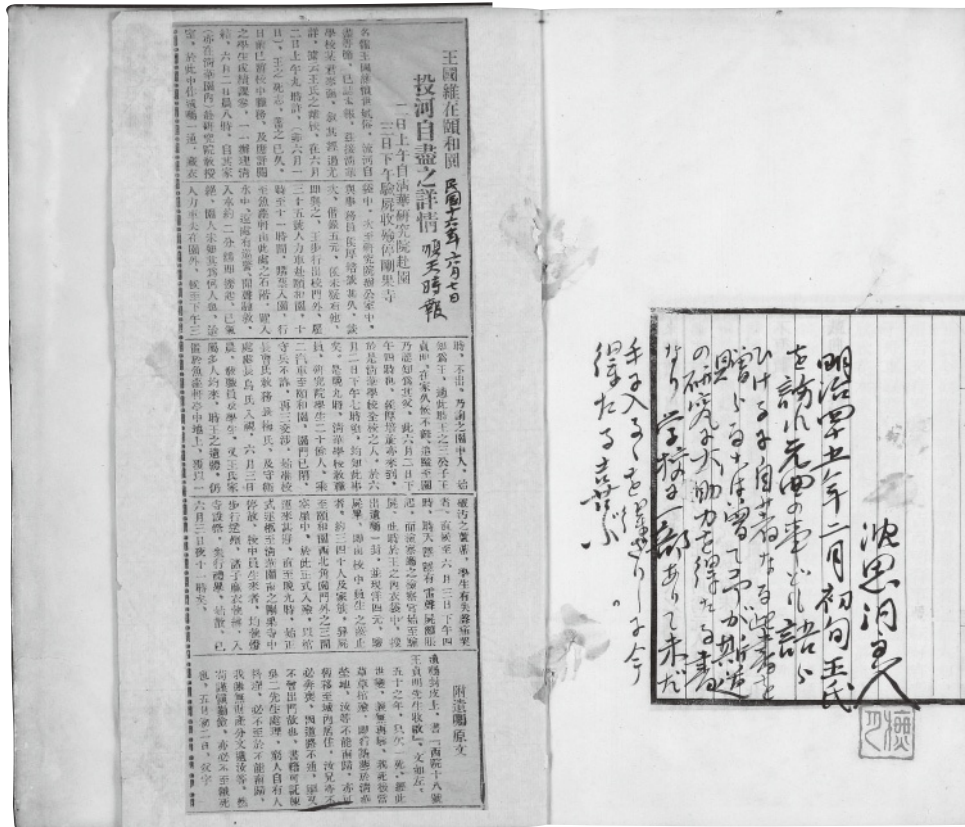
[9] 王国維

王国維 (1877-1927) は1901年日本に留学。帰国後、辛亥革命にあい、羅振玉とともに日本に亡命、京都に住んでいた。青木が彼と邂逅したのは、1911年2月上旬のことである。青木を戯曲の道へと導いたのは恩師・狩野直喜であるが、もう一人は他ならぬこの王国維であった。王の著作『曲録』『戯曲考原』と、王自身が書写した『録鬼簿』（青木文庫に現物は所蔵しない）こそは、青木に戯曲の門徑を窺わせた書物であると、青木の「王静庵先生の追憶」（『青木正見全集』第7巻）には記されている。その青木をして生涯戯曲研究を貫かせることになったのは、1925年の二人の再会だった。この時、王国維は明清の戯曲を取り扱おうとする青木に対して、「明以後は取るに足る無し、元曲は活文學なり、明清の曲は死文學なり」（『支那近世戯曲史』自序）と批評したのである。これを聞いた青木は、やがて前人未踏の世界に踏み出すこととなる。そこには「王国維の冷ややかなあしらいぶりが、却って先生の慷慨の気を振起せしめた」（入矢義高「解説」、『同全集』第3巻）という趣きもあったからだろう。青木の諍友・王古魯は『支那近世戯曲史』の中国語訳版に、下記のような序を書き加えている。「王国維は決して青木の志を軽蔑した訳ではなく、彼はただ自分の戯曲に対する価値観を陳ね述べただけであった」（原文は中国語）と。この記述は、二人の並々ならぬ関係を示唆するものであろう。勿論、両者が互いに相手を称える言葉も多く記載されている。たとえば、王は「青木は古典を飽読する士人と言え」と称賛。一方、青木も王を「辯髪こそは寔に先生の主義の表榜であつた。所謂余幼にして此の奇服を好み、年既に老いて衰へざるものであつた」（『王静庵先生の追憶』）と高く評価している。王国維は1927年北京昆明湖に身を投げ自殺。清朝に殉じたためともいわれる。弁髪はその主義の象徴であった。この二人の関係は、「英雄は英雄を識る」という中国の諺を体現するものといえよう。

青木文庫には、自著『宋元戯曲史』『頤和園詞』『曲録』（「事略」、裏表紙見返しに書き込み多数。詳しくは『曲録』の項目参照）、『王忠愍公哀挽録』が蔵せられ、王国維の写真や遺書が掲載されている。



『頤和園詞』



『曲録』裏表紙見返し

海寧王靜菴國維手抄手校詞曲書目

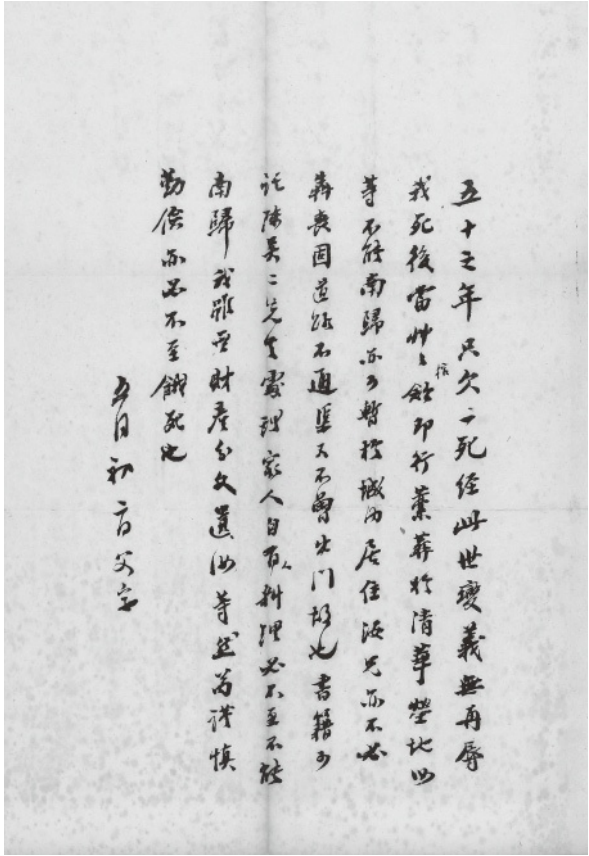
樂章集 一卷	宋柳永撰 王國維手抄宋本有跋	一冊
半山老人歌曲二卷	宋王安石撰 王國維手抄有跋	一冊
王周士詞一卷	宋王以寧撰 王國維手抄有跋	一冊
雙溪詩餘一卷	宋王炎撰 抄本有王國維跋	一冊
竹友詞一卷	宋謝逸撰 王國維手抄	一冊
赤城詞一卷	宋陳克撰 王國維手抄有跋	一冊
誠齋樂府一卷	宋楊萬里撰 王國維手抄	一冊
寧極齋樂府一卷	元履癸撰 王國維手抄	一冊
審域詞一卷	宋杜安世撰 汲古閣刊本 魏伯子藏書王國維校有跋	一冊
蛻巖詞二卷	元張翥撰 舊抄本 王國維校有跋	二冊
鷓鴣詞一卷	劉履芬撰 手稿本有杜文瀾語人批 王國維跋	一冊
宋六十名家詞	汲古閣刊本 有王國維手校十二家均有跋	五十冊
六一詞 樂章集	山谷詞 東堂詞 放翁詞 稼軒詞 片玉詞	
石林詞 酒邊詞	後村別調 龍洲詞 姑溪詞 以上十二家均校過	
尊前集 二卷	影寫明顧格芳本 有王國維跋	二冊
古今名賢草堂詩餘四卷	明嘉靖中劉時濟刊紙印本 王國維手校有跋	四冊
梅苑 十卷	宋黃大輿撰 棟亭刊本 王國維手校有跋	四冊
又	宜到本 有王國維跋	二冊
詞林萬選四卷	明楊慎撰 汲古閣刊本 焦理堂藏書 有王國維跋	二冊
詞學叢書	秦氏校刊 內樂府雅詞有王國維校語	十冊
詞辨 一卷	周濟撰 王國維批點有跋	一冊
紫鸞笙譜二卷	魏文述撰 道光中書局刊初印本 有王國維題識	二冊
元曲選一百種	明臧晉叔輯刊 王國維全部圈點有跋	一百冊
○明劇 七種	傳鈔宣德本 有王國維跋	六冊
內 弼天師明齋戲抄	呂刻寶花月神像 二種王國維手抄	
雍熙樂府二十卷	明郭勛輯 嘉州庚子楚齋刊白楊紙印本 有王國維跋	二十冊
錄鬼簿 二卷	元鍾嗣成撰 王國維手抄校本有跋	一冊
曲品 三卷	明饒宗生撰 新傳奇品一卷高奕撰 王國維手抄有跋	一冊

共二十五部 二百十四冊

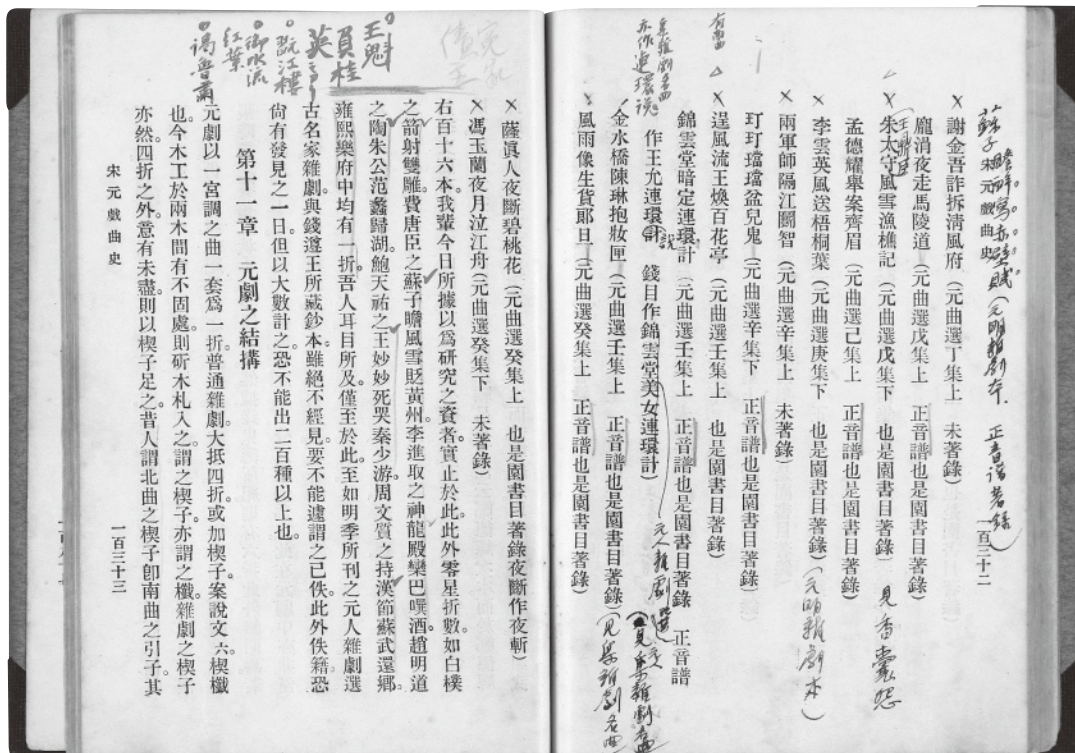
『曲錄』添付の「書目」



王国維の写真



王国維の遺書



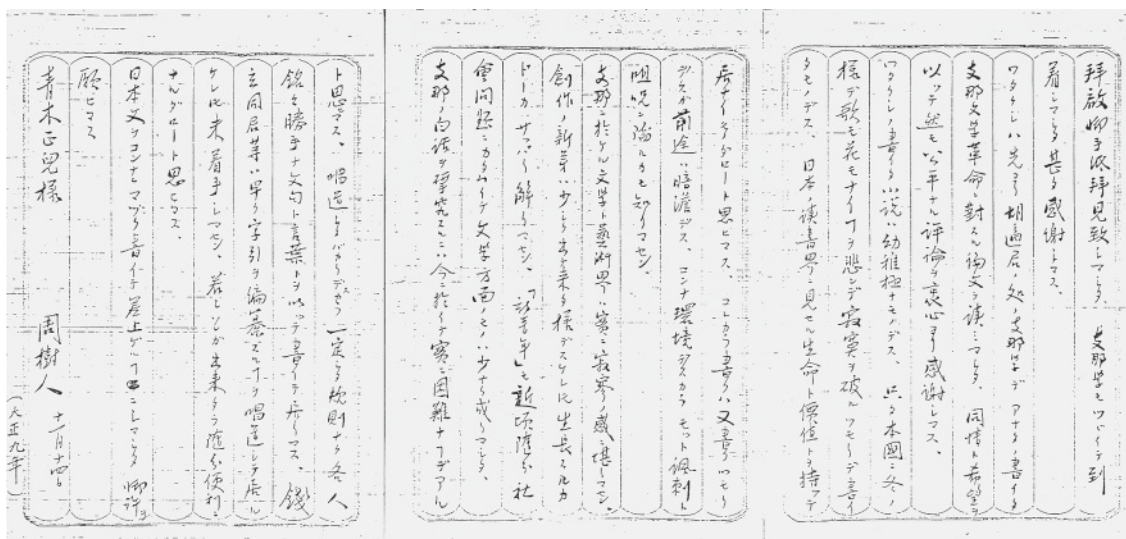
『宋元戲曲史』への書き込み

[10] 魯迅

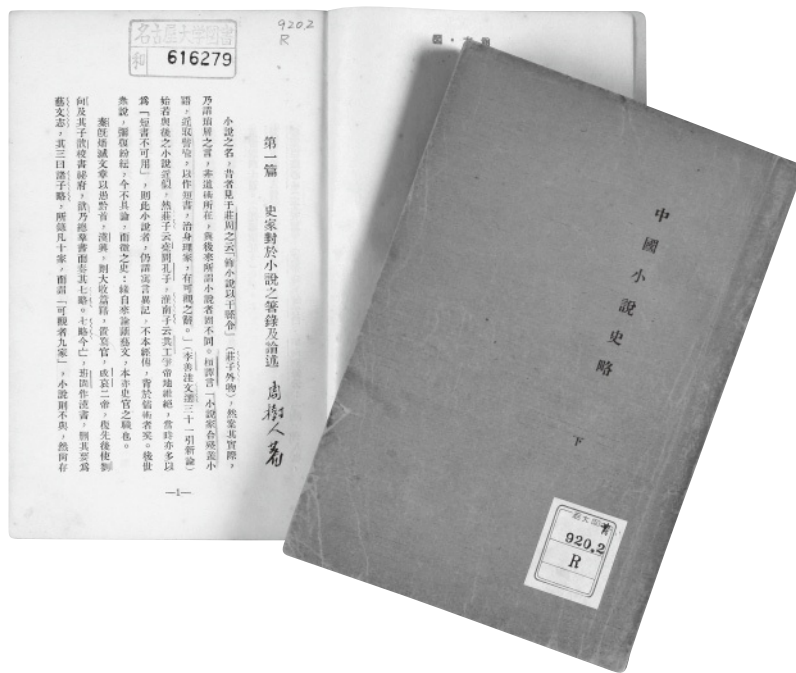
青木は「胡適を中心に渦巻いている文学革命」（『支那学』第1巻第1号-第3号 1920）において、日本ではじめて魯迅（1881-1936）の「狂人日記」（『新青年』第4巻第5号 1918・5）に言及し、未来のある作家として紹介した。この文章に対して、魯迅は日本語書簡（1920年11月14日付け）で礼を述べている。以下の写真を参照（現物は不明、張小鋼教授提供）。

1923年魯迅は、『中国小説史略』上下冊（北京新潮社 1923・24）を出版する。この本は青年時代の増田渉が1931年、魯迅の直接の教えを受けながら翻訳し、『支那小説史』（サイレン社 1935）として出版された。

なお戈宝権「青木正児論魯迅」（『社会科学戦線』1978-1）によると、魯迅は青木正児の書を3冊所蔵しているという。1927年10月8日、東京の内山書店を訪れたときに、『支那文芸論叢』を、1930年5月7日には『支那近世戯曲史』を、1936年2月19日には『支那文学概説』を購入している。これらは、現在、北京魯迅博物館の魯迅蔵書中に珍藏されている。



青木宛書簡



『中国小説史略』

●コラム(2)：「青木正児博士と中国近現代の文学・思想」

青木正児博士は若い時代、同時代の中国の文学界・思想界に注視した。その範囲は雑誌『新青年』、『新潮』、『北京大学月刊』、『少年中国』、林紓の翻訳小説等に及び、また古い研究形式を凌駕する同時代の新研究(王国維の『宋元戏曲史』〈1915〉、呉梅の『顧曲塵談』〈1916〉、胡適の「紅樓夢考証」〈1921〉等)に注目している。

「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」(『支那学』第1巻第1号—第3号 1920)は、同時代の文学革命の動向を日本にはじめて紹介した。そこには胡適の「文学改良芻議」(『新青年』第2巻第5号 1917・1)、「建設的文学革命論」(同第4巻第4号 1918・4)、陳独秀の「文学革命論」(同第2巻第6号 1917・2)が詳細に紹介され、中国の文学革命が当面する課題についての分析が精緻に論述される。さらに博士は、「論短篇小説」(胡適、『新青年』第4巻第5号 1918・5)、「易卜生号〔イブセン号〕」(同第4巻第6号 1918・6)を解説し、文学革命の具体的多面的な動向を把握して、当時においてこれ以上望むことはできないほどの、文学革命に関する詳細精緻な論述をなしている。

その中で、青木正児博士は先駆的に魯迅の「狂人日記」(『新青年』第4巻第5号 1918・5)に言及し、未来のある作家として紹介した。また、周作人の「人的文学」(同第5巻6号 1918・12)を評価し、欧陽予倩の「予之戲劇改良観」(同第5巻第4号 1918・10)を取りあげ、胡適、沈尹默、劉半農等の新詩を掲載した。そして文学革命における錢玄同の役割を指摘する。

思想革命の分野について青木正児博士は、「呉虞の儒教破壊論」(『支那学』第2巻第3号 1921)において陳独秀とともに奮戦した呉虞の反儒教の思想(「家族制度為專制主義之根柢論」〈『新青年』第2巻第6号 1917・2〉、「儒家主張階級制度之害」〈同第3巻第4号 1917・6〉等)を紹介する。

「王静庵先生の追憶」(『藝文』1927・8)、「『支那近世戏曲史』序」(1925)には、若い青木正児博士と王国維先生との交流が述べられる。『宋元戏曲史』以後の、明清の戏曲史を志した博士に対して、王国維先生は、「明以後の曲は死んで居る。」と言いつた。博士は、王国維先生の高風を仰ぎつつ、後に不朽の名著とされる『支那近世戏曲史』(1927)を著した。

青木正児博士は若い時代、旧漢学から脱却して科学的研究を志した。文学革命を始めとするさまざまな分野における中国の新しい潮流は、博士の深く共鳴するところであったと思われる。

[11] 吳梅

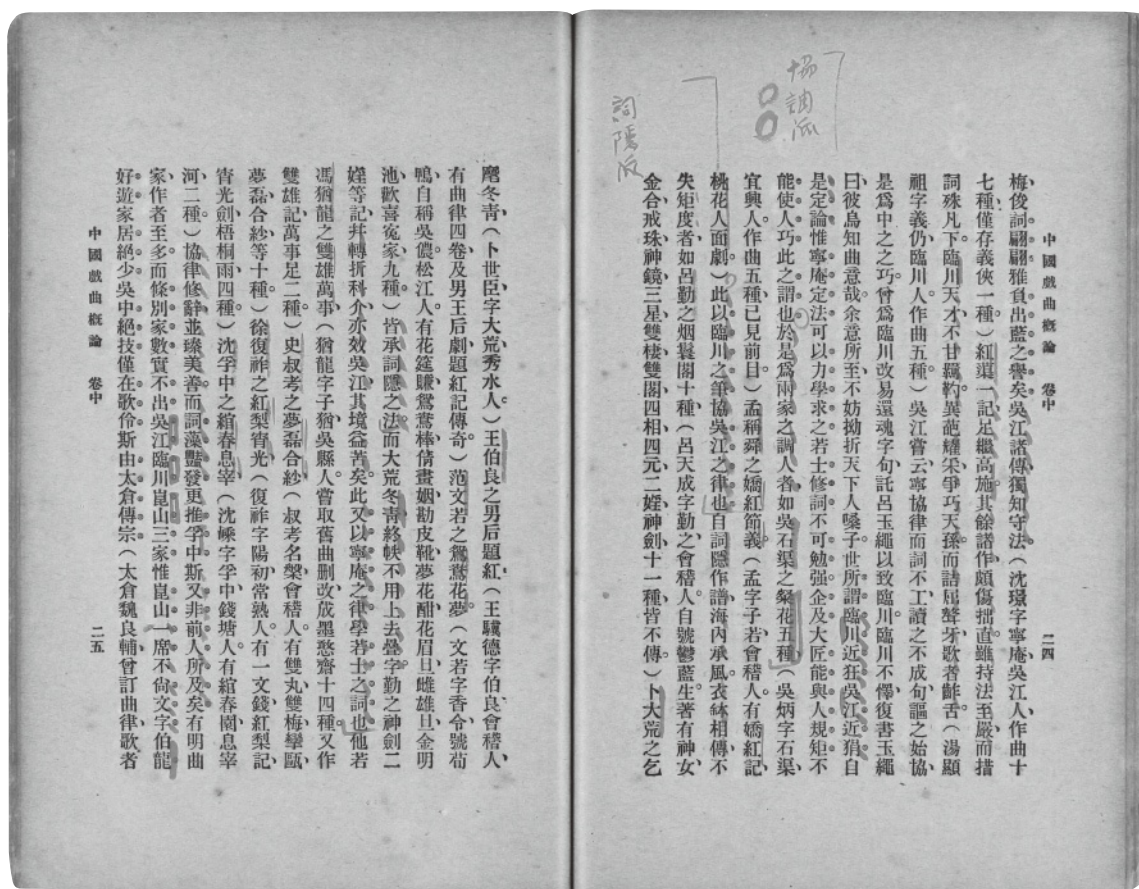
吳梅（1884-1939）は、北京大学や南京の東南大学などで戯曲等を講義。吳梅の戯曲研究は、音律や笛の音を大切にす実演的側面をもっていた。初めて古典的伝統劇を大学の教室に持ちこんだことでも知られる。この吳梅著『中国戯曲概論』（上海大東書局 民国15）には、青木による朱点が多数あり、影響のほどが知られる。また『曲律易知』（民国11）という吳梅の編になる書も蔵する。戯曲研究のカバーする広さ、および体系化の面において、王国維は吳梅に及ばないとの評もある。青木の戯曲研究は、王国維よりはこの吳梅の学風に似る。青木自身、吳梅の『顧曲塵談』について「自ら戯曲を讀み劇の真相を確かめやうと思ふ人々に取つては誠に有益」と高く評価している。また青木の『支那近世戯曲史』の中国語版に序文を寄せたのも吳梅だった。

それには「常熟の王古魯君が、日本の青木正児著『近世中国戯曲史』を邦訳して、私にその序文を求めてきた。これを読むに、…詳博淵雅にして青木君というのはよく本を読む人というべきである」（原文は中国語）と記される。研究の遅れていた中国のこの古典文化を、日本の一研究者が発掘し評価したことが契機となり、日中の最高の文化人らが熱く交わったのである。その熱気は今から見ても、一編の詩のごとき光芒を放っている。

参考文献：森川〈麦生〉登美江訳「精緻な学者型の伝統劇作家吳梅」（楊義著）『二十世紀中国文学図誌』（「言語文化論集」24-1 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 2002）
 「伝奇雜劇評判の評判一実は『顧曲塵談』の御披露」『青木正児全集』第7巻



『曲律易知』『逍遙巾』



『中国戯曲概論』

[12] 胡適

胡適 (1891-1962) は、近代の学者・思想家。字は適之。安徽省績溪の人。上海の梅溪学堂、中国公学などに学んだ後、1910年よりアメリカ留学。農学、及びデューイより教育学を学ぶ。1917年、『新青年』2巻5号に「文学改良芻議」を發表し、文語体の文学言語（文言）とそれに纏わる文章作法の旧習を排除しようと「八不主義」を掲げ、口語による文学を提唱した。同年帰国して北京大学教授となり、文学革命を推進して活躍した。

『嘗試集』（民国9年9月 亜東図書館排印本）は、胡適から青木へと贈られた新体詩集である。注目すべきは、青木の自筆により「余囊さきに一本を藏す。北京客中の武内義雄君贈る所なり。今、胡氏此の書を贈らる。仍て前者を神田喜一郎君に轉与す」と記されていることである。当時の青木を始めとする『支那学』研究者間の交流をうかがうことができ、甚だ興味深い。ちなみに、神田から青木に贈られた自筆署名本に、『薔薇の路』がある。

『嘗試集』の「樂觀」「我的兒子」「老鴉」「沁園春・二十五歳」「贈朱経農」には、青木による朱点が見られ、その中でも「我的兒子」一篇は、特に青木が好んだ作品らしく、論文中でその一部を訳して紹介している。

私の子供 「我的兒子」
私は實際子供はいらない、
けれど子供はひとりで生まれて来た。
『無後主義』の看板も、
今は掛けられなくなつてしまつた！

譬へば梢に花の咲くやうに、
花の落つるは偶然の結果。
其の實がお前で、
其の樹が私だ。
樹はもと無心に實を結ぶ、
私もお前に恩義は無い。

たゞお前が生まれたからには、
お前を育て、教へねばならぬ、
それは私の人道に對する義務、
決してお前にさせる恩誼では無い。

將來お前が成長した時、
忘れるな、私が子供に何と教訓したかを、一
私はお前に一人の天晴れな人と爲つてもらひたい、
私の孝行な子供となつてもらひたくない。

（「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」（『青木正児全集』第2巻）より）

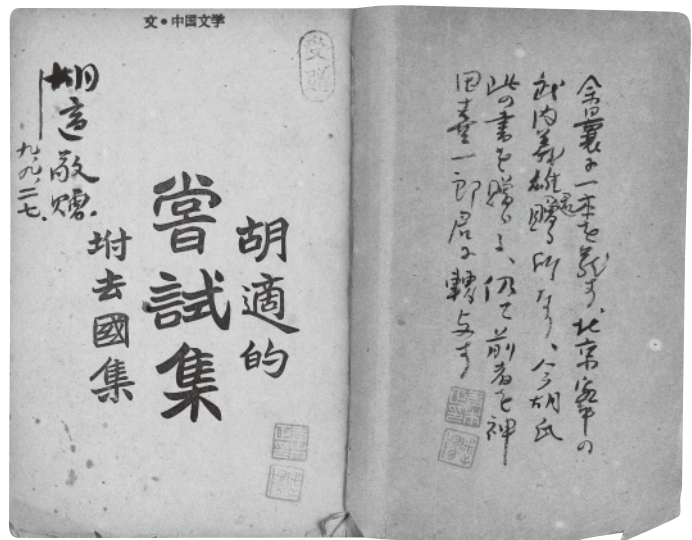
青木のこの「胡適を中心に…」の論文は、吉川幸次郎を大いに驚かせた。「およそ従来の「漢学」とは全くちがったものが、ここには記述されていた。且つその筆づかいは清新をきわめた」（『青木正児博士と私』『古川幸次郎全集』第23巻）と。同論文は文学革命について日本で最初に紹介したものであった。

また青木文庫には、胡適著『章実斎先生年譜』というのがある。ここにも両者の深い絆が刻まれている。胡適の自序にこう記す。「私は内藤湖南先生の年譜（補足—『章実斎先生年譜』のこと、『内藤湖南全集』第7巻）を読み、彼が鈔本の「章氏遺書」18冊を所蔵していることを知った。又、友人青木正児先生が私のために、この「遺書」の目録すべてを筆写して送ってくれた。青木先生のご協力に感謝する」（原文は中国語）。胡適は、青木の筆写の労に対する御礼として、このサイン入り本を贈ったのである。なお湖南の「胡適之の新著章実斎先生年譜を読む」（同前）には、「湖南藏の未刊章氏遺書の目録及び其の遺文の數篇」を青木が「寫送」したとある。

このほか青木文庫には、胡適の書として『五十年來之中国文学』『宋人話本』など、また贈呈本として『二刻英雄譜（漢宋奇書）』もある。さらに青木には「胡適氏の中国哲学史観見の事」「胡適著「紅樓夢考證」（「雜纂」『青木正児全集』第7巻）などの論文がある。国際派文人青木正児の誕生は、すぐれた外国の知人に恵まれた点が大きい。

なお胡適から青木宛の書簡は9通ある（中村喬氏蔵）。展示はそのうちの一通（写真は張小鋼教授提供）。

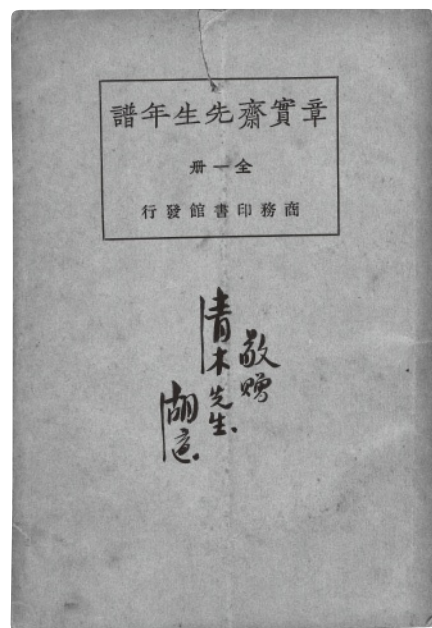
参考文献：張小鋼・渡辺幸彦整理「王古魯致青木正児的信」（李慶主編『東瀛遺墨』上海人民出版社 1999）



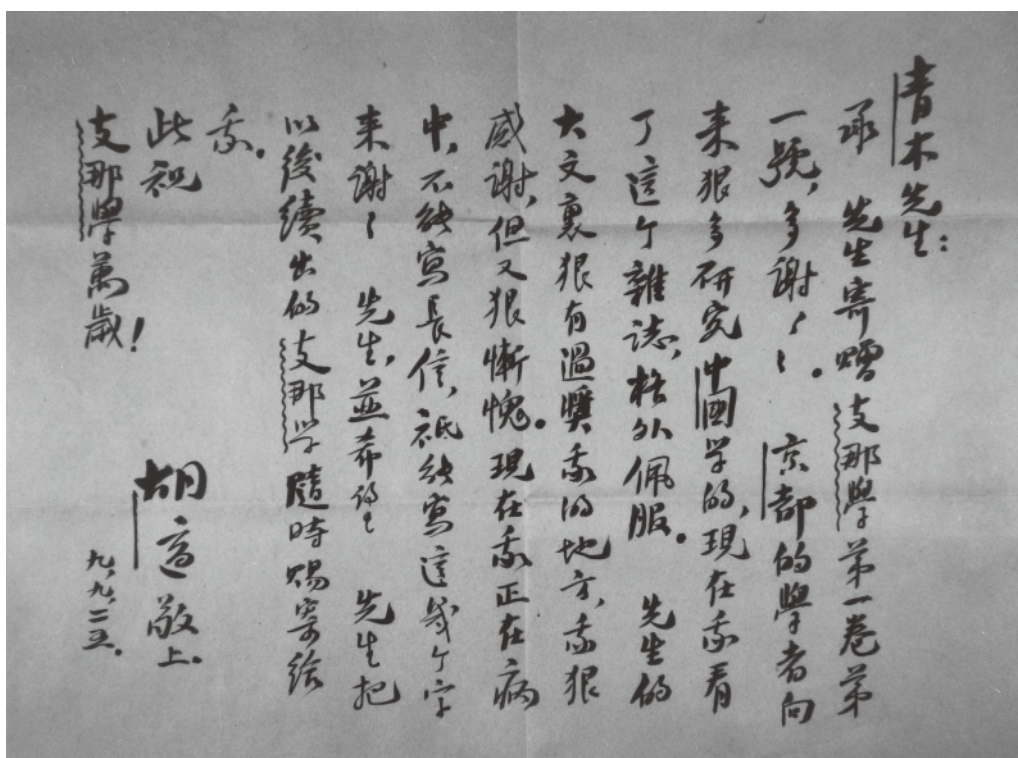
『嘗試集』



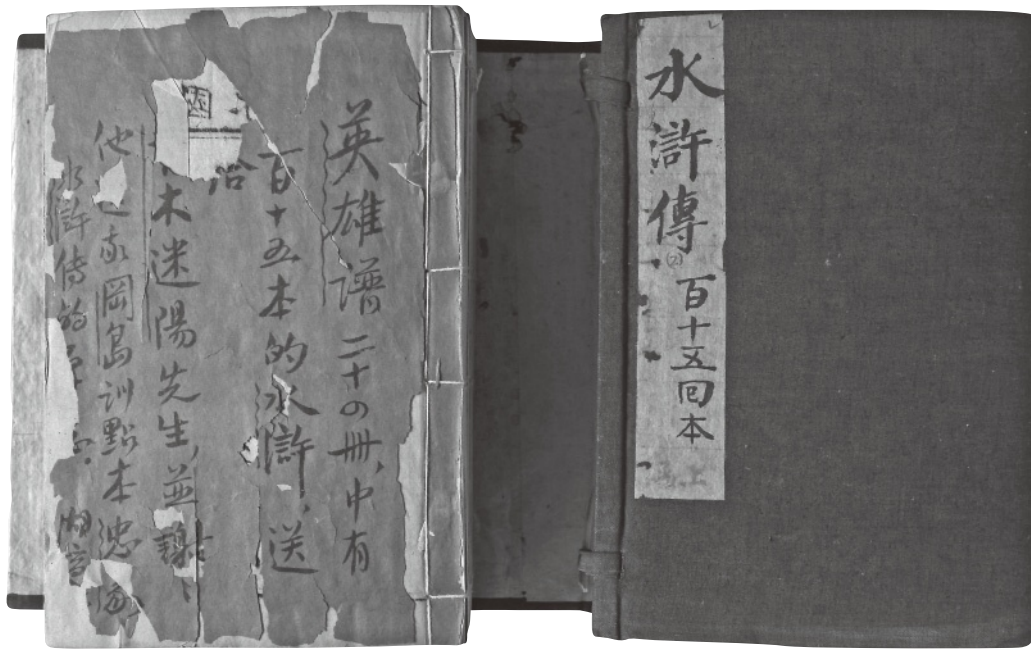
『五十年來之中國文學』『宋人話本』



青木の協力による『章實齋先生年譜』



青木宛の書簡



胡適贈呈の『英雄譜』中の百十五回本『水滸伝』

●コラム (3) : 「梅蘭芳・届いた思い —日本人を熱狂させた梨園の名花—

梅蘭芳 (1894-1961)。京劇役者。祖父は「同光十三絶」(清朝同治・光緒年間における名優13人)の一人にもあげられる名旦・梅巧玲、父も京劇役者(旦)の梅竹芬、祖母・母はともに京劇役者の娘で、叔父梅雨田は著名な琴師という梨園の名門に生まれる。近代を代表する女形で「四大名旦」の一人。「旦」は女性役)戯曲改良運動の流れの中で、しぐさや舞いなどの改革を進め「梅派」を確立する。はじめて京劇の海外公演を行ったのも梅で、1919年(大正8)・1924年(同13)・1956年(昭和31)の3度の日本公演の他、1930年にアメリカ、1935年と1952年にはロシア公演も行っている。

梅蘭芳の年譜に沿って、特に青木と関連のある事項を中心にその生涯を紹介しよう。

梅蘭芳は8歳の時、正式に呉菱仙に師事し女形の稽古を開始した。「戦蒲関」に始まり、「二進宮」、「桑園会」、「三娘教子」など30以上の劇を稽古した。『舞台生活四十年』によれば、初舞台を踏んだのは「光緒甲辰七月七日(十一歳)」の時(西暦1904年(10歳)8月17日)、北京の広和楼劇院にて崑曲『長生殿』『鵲橋密誓』中の織姫の役であったという。その3年後の1907年に梅蘭芳は正式に劇団「喜連成」(後に「富連成」と改名)の一員になった。そこでは「花旦」・「青衣」(ともに女性役で、それぞれ性格が異なる。)の厳しい訓練を受け、それが後に日本人の“梅蘭芳迷”をして熱狂させる技を身につける基礎となった。日本人の熱狂ぶりは『品梅記』、『東遊記』からも窺える(後述)。

1913年(19歳)10月31日、上海在住の許少卿より招聘を受け、初めて上海で公演。当時、上海の舞台改革は北京より進んでおり、梅蘭芳も大きな影響を受けた。自身、「このわずか50日あまりの上海での逗留が、私の後の舞台生活に極めて大きな作用をもたらした。」(原文は中国語)と語っている。(『舞台生活四十年』)この年、新しい歌い方を研究する一方で崑曲を勉強し始め、翌1914年(20歳)からは陳德霖らに弟子入りして崑曲を学んだ。この崑曲の素養が青木をして梅蘭芳に興味を抱かせ、崑曲への傾倒とともに彼を評価する契機となる(後述)。また、路三宝・王瑤卿より「旦」を学び始める。初めて創作した現代京劇を7月から10月まで上演。1915年(21歳)には、「嫦娥奔月」を初公演し、初めて京劇の舞台でスポットライトを使用した。また、同劇では髪型や衣装にも新たな工夫を施した。この時期の梅蘭芳の活動からは、一方で伝統的な崑曲の勉強に打ち込みつつ、一方では京劇の改革革新に取り組んでいることが見て取れる。

この年、画家・王夢白氏について絵を学び始め、その後、齊白石などの画家とも知り合う。また、収集家の朱翼庵との交流を通し、書画や骨董を広く鑑賞。この点も、従来の“芸人”とは異なる、教養を身に



梨園の花

つけ、他の追隨を許さない海内無双の俳優として、書画を愛し書画に通暁した青木が梅蘭芳に一目おいた理由ではなかっただろうか。実際、梅蘭芳が青木に献呈した書籍の自筆のサインを見ると、大変整った美しい書体で書かれており、彼が能書であったことが分かる。

1919年(25歳)、日本帝国劇場の招聘により「喜群社」と4月21日から5月27日まで来日。東京、大阪、神戸で公演した。このとき、その舞台を見て熱狂した中国学者たち13人と書肆・彙文堂の主人(大島友直)がそれぞれに梅蘭芳を品評したのが『品梅記』である。13人の中には、内藤湖南、狩野直喜、小川琢治、鈴木虎雄、神田喜一郎、那波利貞など、歴々たる大家が名を連ねている。可笑しいことに青木は病気のため実際には舞台を見ていないにも関わらず寄稿し、「梅郎と崑曲」という一文を寄せている。この小論から青木の中国戯曲に対する見解が率直に窺えるので少しく紹介したい。

「梅郎と崑曲」は一言で総括するなら崑曲賛歌といえる。冒頭の一文、「聞く如くんば梅郎(蘭芳)は崑曲に於いても驚く可き藝術の冴えを示して居ると云ふことである。」この時点での青木の見解は、文芸史の立場から中国伝統演劇を論ずると、まさに衰頹期にあると考えていた。少しく各時代に中国戯曲を通観した者として、「この意味において(*注：中国戯曲史の観点から見て)余は當世流行の「皮黄」を捨て、「崑曲」を取るものである。」と言う。青木は文中で「梅の藝術に対する讚美の聲は逸早くも燕京の客、村田烏江氏の「支那劇と梅蘭芳」なる著書となつて可なり纏まつた知識を吾人に齎した。」と述べ、梅蘭芳についての事前の知識を同書から得て、その崑曲を聞くことを相当楽しみにしていたようだ。本論の注目すべき点は、青木が中国戯曲史に言及するとき、往々にして我が国の伝統芸能になぞらえていることである。例えば、「北曲は吾が義太夫の語り口に似て居るし、南曲は地唄即ち上方唄の如く無暗に一語を永く曲折せしめて謠ふ如きであらう。」また、「我國などでも鄙唄、例へば追分、馬子唄、子守歌、少し意氣な方では都々逸などは正樂の音律には叶つて居ない。」また、「浄瑠璃」を例に引いている箇所もある。

話を崑曲に戻すと、本論の中で青木は「崑曲腔の危機今より甚だしきはない。併し聞く如くんば近頃頗る復興の兆があると云ふことで、梅郎も此方へ渡來して出しものに務めて崑曲を挿んだのは多しとす可きである。何故に余がその復興を喜ぶかと云ふに、(中略)崑曲其の物の本質、即ち文學上・音樂上より見ても價值ありと思ふからである。」と断言している。ここで重要なのは、文學上のみならず音樂上と言っていることだ。青木の所謂「文藝」は“文學”と“藝術(書・画・音樂・演劇など)”を併せた謂いであり、その意味で崑曲はそのいずれの要素も包含した総合藝術ともいべきものであった。本論を締めくくるにあたって、青木は中国伝統演劇界の若きホープにエールを送っている。「往け好漢、觀客を魅すると稱せられる、汝の眉目は無敵の武器であらうが、徒にお客を秋波で酔はしむるばかりが藝ではあるまい、唄工に倣工に大革新を企つ可きである。」この青木の思いは梅蘭芳に間違いなく届いたはずである。さもなくば、後年、梅蘭芳が青木に著書や写真を贈呈し続けることはなかったであろう。同じ藝術を愛する者として心の交流があったに違いない。

梅蘭芳は1921年(27歳)年春、楊小樓とともに劇団「崇林社」を立ち上げる。1923年(29歳)表現能力を増すために、初めて京劇の伴奏樂器に二胡を加える。また、同年に発生した関東大震災の復興支援のため、チャリティー公演を行い義捐金を送った。

1924年(30歳)帝国劇場修復後の開幕講演のために日本帝国劇場の招聘により二度目の来日公演。10月9日から11月22日まで東京、大阪、京都で公演した。

1927年(33歳)には『順天時報』で「旦」のトップに挙げられ、また、程硯秋らと京劇の「四大名旦」と称せられるなど、その評価を揺るぎないものとした。後、1932年(38歳)には上海に移住し、1941年(47歳)、日本軍の求めによる公演を拒否し髭を蓄えて役者生活から離れた。その後は終戦まで閑居し、1945年(51歳)10月再び舞台に立った。兪振飛と上海美琪大戲院で崑曲「断桥」「游园驚夢」などを共演した。



梅蘭芳のプロマイド

1951年（57歳）7月、上海より北京の護国寺街1号（現・梅蘭芳記念館）の長閑な四合院に居を移す。1952年（59歳）『舞台生活四十年』を出版。1955年（61歳）1月、中国京劇院院長に就任。4月、中央文化部・中国文聯・中国戯劇家協会が梅蘭芳と周信芳のために舞台生活50周年記念行事を共催。2月から8月まで「梅蘭芳舞台芸術」を撮影、12月に完成。

1956年（62歳）5月26日から7月16日まで、朝日新聞社などの招聘と周恩来の援助により、最高水準の陣容を揃えた京劇代表団の団長として来日。これが三度目の訪日となる。東京、九州、大阪、京都で公演を行った。翌年、この年の訪日を記した『東遊記』を出版。1961年（67歳）5月31日、中国科学院で「穆桂英掛帥」に出演したのが最後の舞台となった。7月9日、中国劇曲学院院長に就任。8月8日午前5時、病により北京で逝去した。その故居は「梅蘭芳記念館」として公開され、梅蘭芳夫人と子女が寄贈した多くの貴重な戯曲資料が収蔵されている。

今回の展示資料を改めて紹介すると、一度現役を退いた後、再び舞台生活を続けながら、中国演劇界を背負って立つ重責を担いつつ、貴重な記録としてその芸術生活について書き残しておきたいという企図のもと、構想はありながらも何度も頓挫した計画を、梅蘭芳が空いた時間を見ては語り、許姬伝が記録する、というやり方で記されていったのが『舞台生活四十年』である。第一集、第二集とも口絵第一頁に自身の写真が掲載されている。その他にそれぞれ口絵が32ページあり、祖父、祖母、父、母をはじめ縁のある人々などの写真が豊富に掲載されている。第一集の口絵第一頁にある自身の写真の右側に「青木先生晒存」、左側に「梅蘭芳贈 一九五八年二月」と自筆のサインと篆刻刻印がある。寄贈されたこの二冊とも1957年の重刊本。

『東遊記』は1956年の第三回の訪日の記録である。歌舞伎俳優との交流など、充実した訪日体験が綴られている。表紙見開き第一頁の余白の頁に「青木先生 教改」「梅蘭芳寄贈」「北京護國寺街一號厲齋時一九五八年二月廿三日」の自筆サインあり。初版本。

『支那劇と梅蘭芳』（村田烏江著、玄文社版、大正八年五月一日発行）は、既に前述したが、日本で初めて、まとまった形で崑曲と梅蘭芳を紹介した研究書である。多数の知識人から題字及び序文が寄せられている。自序には「大正八年四月 於燕京客舎 烏江散人」とある。口絵写真も豊富で20枚に及ぶ。初版本。

『品梅記』（大正八年、彙文堂書店）は前述した通り。初版本。表紙の版面左隅に「迷」の字の刻印あり。裏表紙にも版画があり、或いは装幀は迷陽先生（青木）の手になるものか。

『梅蘭芳芸術一斑』（齊如山著）は、梅蘭芳の海外進出をプロデュースしたともいえる齊如山による、梅蘭芳のプロモーション小誌の体を成している。京劇の所作、すなわち身体全体の表現様式、例えば「坐式（腰掛けた姿）」、「立式（立ち姿）」、「臥式（しなだれかかるような姿）」など8種と、「手」の型53種の意味を、豊富な写真入りで紹介している。梅蘭芳の様式美の粋がこの小冊子に結集しているといっても過言ではない、美しい冊子である。「甲戌仲冬（1934年11月）、武進・趙尊嶽」の「序」がある。奥付には「中華民國二十四年（*注：1935年）二月一日初版」とあり、英語版に先立って日本語版が出版された。出版元



中国伝統演劇に捧げた一生

は「北平国劇学会」となっており、国を挙げての京劇世界進出事業だったことが伺える。初版本。

梅蘭芳の自筆サイン入りプロマイド二枚。一枚は素顔の写真。右肩に「青木先生存念」とあり、左下側に「一九五八、二、於北京」、左上に「梅蘭芳」と自筆のサインがある。もう一枚は舞台姿で、欄外右に「青木先生」、欄外左に「梅蘭芳 一九五八年春」の自筆サインがある。

参考文献：

- ・『舞台生活四十年 第一集』（梅蘭芳述 許姬伝記 人民文学出版社 1957年4月）
- ・『舞台生活四十年 第二集』（梅蘭芳述 許姬伝記 人民文学出版社 1957年5月）
- ・『東遊記』（梅蘭芳著 中国戯劇出版社 1957年12月）
- ・『品梅記』（彙天堂書店 大正8年（1919年）9月15日発行）
- ・『梅蘭芳年譜』（王長發・劉華 河海大学出版社 1994）



梅蘭芳の様式美（『梅蘭芳芸術一斑』より）

[13] 韓世昌

韓世昌(1898-1976)、字は君青、河北高陽県の人。崑曲役者。「崑曲大王」の称号を得、一時期梅蘭芳と並び称された。*1「崑曲其の物の本質、即ちその文學上、音樂上より見て最も價值あり……。嘉靖より乾隆に至る二百五十年間の劇界の覇權を把握し來つた崑腔と、僅かに咸・同以來新進の皮黃(*注:京劇)や、古くとも敗殘の餘に過ぎぬ弔腔や、乃至は田舎節の秦腔などと固り同日の論でないことは最も見易き道理である」*2と、崑曲を第一に評価した青木は、1925年7月28日、北京・開明戲院で韓世昌の芝居を見る機会を得ると、「ただ一度で韓世昌のじつくりとした藝風に傾倒してしまつた」という。*3

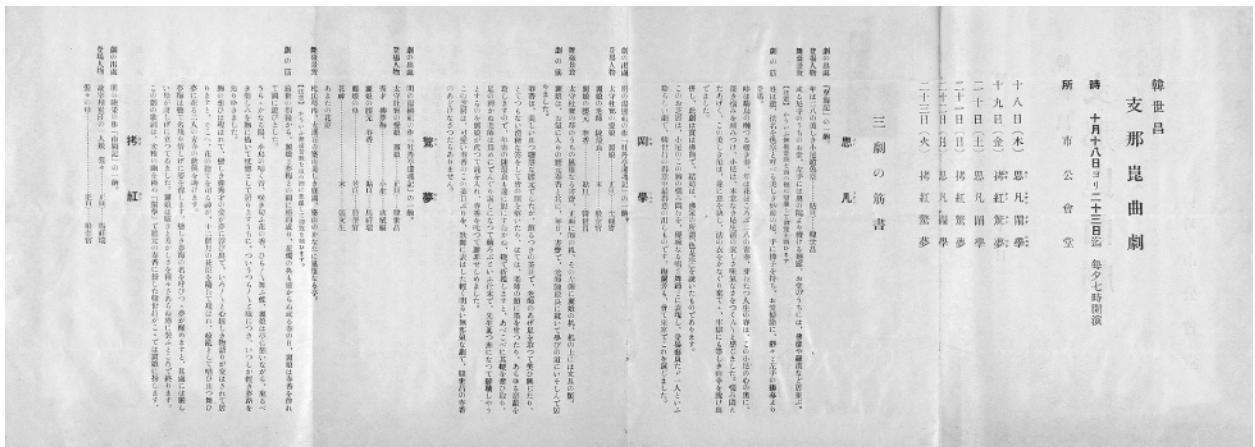
韓世昌は1928年(昭和3、民国17)に来日公演を行うが、その背景として昭和天皇の即位の大礼(同年11月10日)を記念した京都博覧会の開催があつた。青木文庫所蔵の南滿州鐵道情報課長・寒河江堅吾からの書簡(昭和3年8月付)には、「御大典紀年として京都に於て挙行せらるゝ大博覧会を機会に北京崑曲之大家韓世昌氏を聘し本邦之雅客に其妙藝を御賞玩」いただきたいとの考えとともに、「一般之理解に資するため新聞雑誌に掲載し及小冊子に編纂すべき崑曲に関する御研究」についても、青木に依頼したいと記されている。一方、青木は、「崑曲劇と韓世昌—その渡來にあたってこれを世に紹介す—」を、昭和3年10月の大阪毎日新聞に掲載しているが、これは寒河江の依頼を受けてのものだろう。なお、書簡中の「小冊子」に相当するであろう『崑曲と韓世昌』と題する冊子(青木文庫には所蔵せず)においても、青木の「崑曲より皮黃調への推移」「梅郎と崑曲」の二文を引いて崑曲を紹介している。*4 なお青木文庫には、同公演のパンフレット・チケット・韓世昌の名刺・プロマイド、謝意を表す韓世昌の書簡(民国17年12月28日付)の他、「韓世昌東遊紀念号」と銘打つた『北京画報』(民国17年12月8日付)なども所蔵されている。

*1 吳新雷主編『中国崑劇大辞典』(南京大学出版社 2002)

*2 「梅郎と崑曲」(『品梅記』彙文堂書店 1919)

*3 「崑曲劇と韓世昌」(『江南春』『青木正児全集』第7巻)

*4 石田貞蔵編『崑曲と韓世昌』(中日文化協会 1928.9)



公演のパンフレット



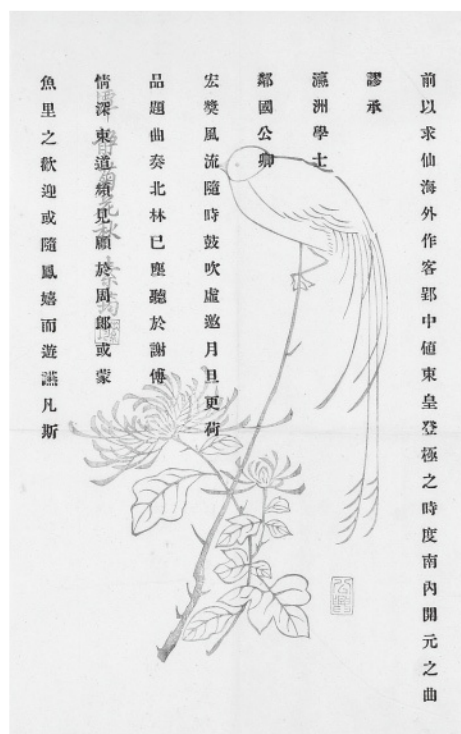
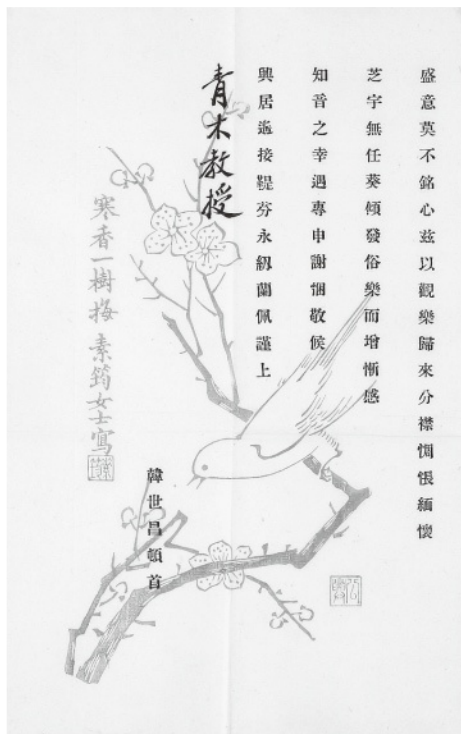
南滿鉄情報課長・寒河江堅吾からの書簡



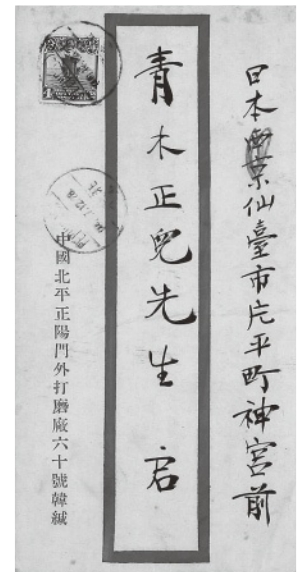
『北京画報』の記事



韓世昌のプロマイド



韓世昌の書簡



[14] 王古魯

王古魯(1900-1959)は江蘇常熟の人、名は鐘麟、古魯は字。北京大学文學院教授、北京師範大學教授。戯曲・小説研究者。青木著『支那近世戯曲史(中国名:中国近世戯曲史)』の中国語訳を行う(※『中国近世戯曲史』訳については『支那近世戯曲史』の項を参照)。日本には留学および1939年から1941年まで東京文理科大学講師としての勤務経験もあり、『王古魯日本訪書志』*2や『最近日人研究中国學術之一斑』*3といった著作もある。青木文庫には『中国近世戯曲史』3種のほか、王古魯著『明代徽調戯曲散齣輯佚』のそれぞれ署名入り謹呈本を蔵する。青木と最も長く交わった中国人研究者の一人で、王古魯から博士宛の書簡37通が残されており、そのやりとりは王古魯が亡くなる前年まで続いている。*5 また青木に英訳本の『話本集』を贈る(署名入り、青木文庫蔵)など、王古魯本人のみならず、彼を通じての中国人研究者との交流も見られる。*6

*1 王余光「中国現代文學家海外訪書成就」(『図書情報工作』第48卷第3期 2004.3)

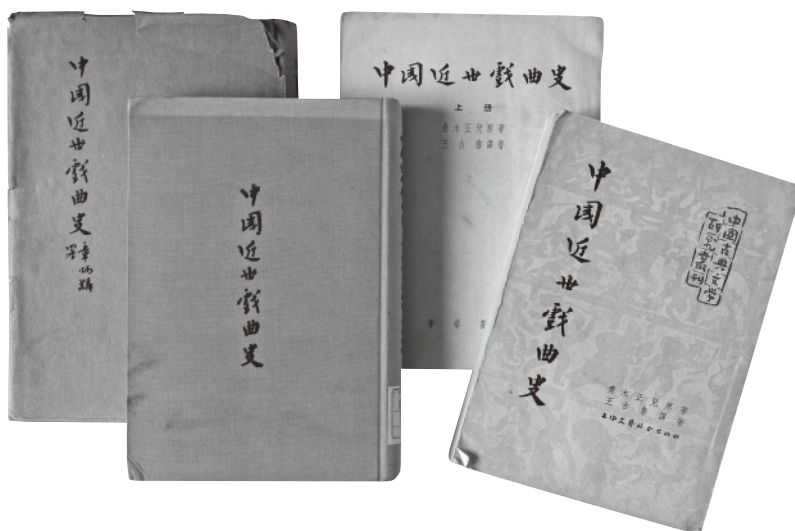
*2 王古魯『王古魯日本訪書志』(海峡文芸出版社 1986)

*3 王古魯編著『最近日人研究中国學術之一斑』 民国25年

*4 王古魯輯録『明代徽調戯曲散齣輯佚』(上海古典文學出版社 1956)

*5 張小鋼・渡辺幸彦整理「王古魯致青木正兒的信」(李慶主編『東瀛遺墨』上海人民出版社 1999)

*6 YANG HSIEN-YI, GLADYS YANG 訳 THE COURTESAN'S JEWEL BOX, FOREIGN LANGUAGES PRESS PEKING (北京外文书店 1957)



王古魯の翻訳本



王古魯からの美しい書簡(張小鋼教授提供)

[15] 趙景深

(1902-1985) 露明女士、愛糸女士、鄒蕭なども名乗る。浙江・麗水生まれ。1927年秋、上海・開明書店最初の編集人。1930年復旦大学教授、北新書局編集人など。青木は、「拙著『支那近世戲曲史』の抄譯本が出るに及び、趙景深君が之に暗示を得、…『宋元戲文本事』を編刊して古戲文の輯本を試みた」（『支那文学研究に於ける邦人の立場』）と述べている。なお現在、復旦大学図書館に趙景深文庫があり、約1200種のいわゆる時調小曲の唱本が所蔵されるが、その唱本の多くは趙景深個人の旧蔵書による。

展示資料は、趙景深著『中国文学史綱要』（上海 中華書局 民国25 1936）『中国文学小史』（上海 大光書局 民国25）『小説聞話』（北新書局）で、三冊とも自筆署名入り。体裁は「青木兄教正 弟景深 廿五年」といった形である。青木に対し「弟」と謙称している。また青木宛書簡は7通あり（中村喬氏蔵）、そのうちの1通を展示（張小鋼教授提供）。

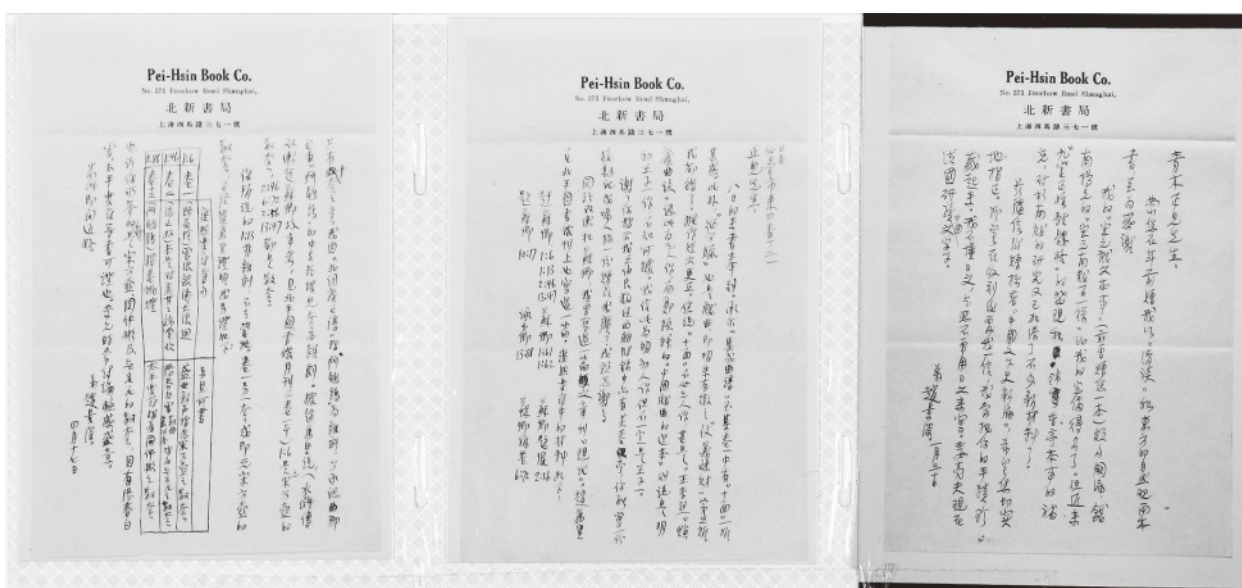
参考文献：川 浩二「清末民初上海時調小曲初探－復旦大学蔵趙景深旧蔵唱本を中心として」

（中国都市芸能研究 5 2006）

張小鋼・渡辺幸彦整理整理「王古魯致青木正兄の信」（李慶主編『東瀛遺墨』上海人民出版社 1999）



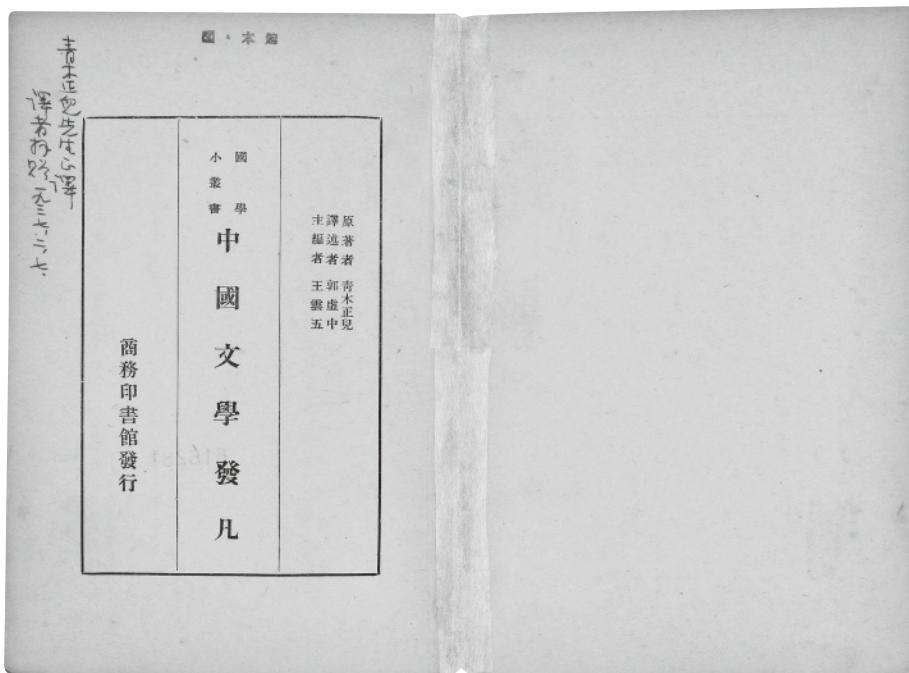
「弟」・趙景深からの贈呈本



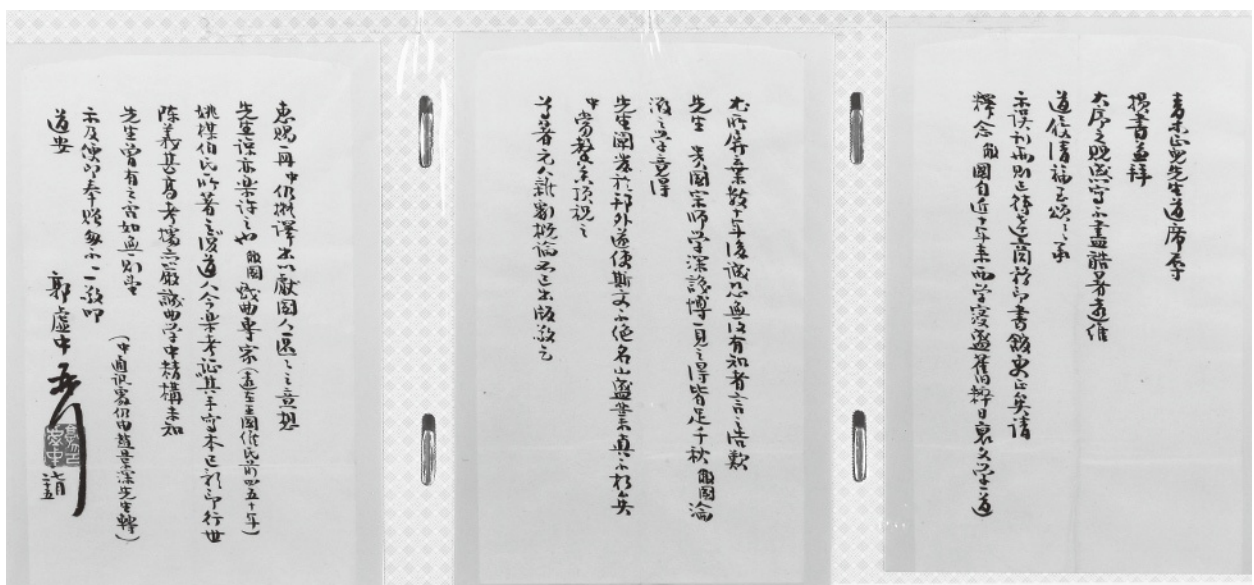
趙景深からの書簡

[16] 郭虚中

青木の『中国文学思想史』『中国文学概説』の二冊をまとめて中国語に訳し、『中国文学発凡』（国学小叢書）と改題して刊行した。その青木の序にいう、「復旦大学の趙景深教授が著書を数冊贈って下さった。私も御礼に拙著『中国文学思想史』『中国文学概説』の二冊をお送りした。すると、彼の友人の汪馥泉氏と、その門下の郭虚中君がわが国に遊学して日本語もうまいので、これを見て可とされた。そこで汪氏が思想史を、郭君が概説を訳して「発凡」と改めて出版されたのである」（原文は中国語）。展示の本は、郭虚中より贈呈されたもので、「青木正児先生正譯 一九三七・二・七」とサインが入っている。『中国文学概説』について、吉川幸次郎は青木が西洋の近代的方法の示唆を受け、「それぞれの歴史の価値を的確に概説し、研究法に説き及ぶ」すぐれた書物と称え、「郭虚中氏の漢訳が間もなく現れたのは、当時は中国にあってもこの種の書が欠けていたことを示す」と記す（『青木正児博士業績大要』『吉川幸次郎全集』第17巻）。もう一つ本書の特色といえるのは、「鑑賞」を軸にした文学理解にある。「文学は須らく味はふ可きである。…一寸した鹽加減、微妙な風味にも靈感する味覺を養はねばならぬ。味覺とは何ぞ、鑑賞力である」。青木の提言は、今もなおそのまま当てはまる。ちなみに、郭虚中から青木に宛てた書簡が一通残っている（中村喬氏蔵、張小鋼教授提供）。



中国人留学生の翻訳による『中国文学発凡』



郭虚中からの書簡

●コラム (4) : 「傅芸子との交流・清く澄める白川の水 —書きつづりたる文の数々—

1956

傅芸子(ふ・うんし)(1905-1948)(生没年は「傅芸子的東瀛訪古」による)。満州族(旗籍)、生粋の北京人。名は寶坤、またの説に名は寶壅。芸子は字。またの説に字を韞之、曼珠という。別号は餐英、竹醉生。戯曲理論家・傅惜華の兄。幼いときから国学を好み、旧京名物掌故に詳しかった。旧京名物掌故への造詣の深さは、名物学へと傾倒していった青木の学問的志向と一致する。また、この博識は、後々、倉石武四郎と共に『支那語会話篇』(弘文堂、1938)を編むに際して真価を発揮することになる。

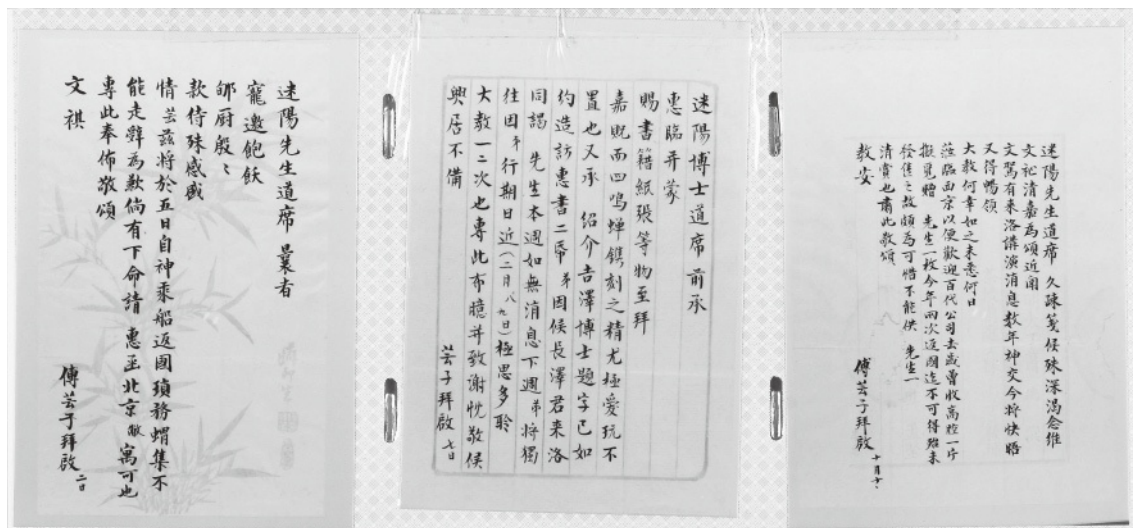
傅芸子は始め「燕京華文学校」の図書館に勤め、『京報』の記者もしていた。『北京画報』と『国劇画報』の主編を務め、梅蘭芳、余叔岩、齊如山らと共に“北平国劇学会”の発起人となった。この頃の論文は『文字同盟』(橋川時雄(1894-1982)が1927年4月から1931年7月にかけて北京で発行した月刊個人雑誌。第1号~第37号)などに収められている。(『文字同盟』所収の論文は「雍和宮所蔵經典要目(上)(下)」、「研究中国古代文化参考用書要目(校録)」、「北京名人故宅考補」、「旧京風俗賸遺之一斑——讀明史弱翁旧京遺事後——」、「次公帰藁記」。)また、『北京画報』第4号・第5号を文字同盟社に寄贈している。今村与志雄によれば、『文字同盟』への寄稿者、新刊案内、書籍等の寄贈者を見れば、読者層もほぼ推定できるという。『文字同盟』第7号には、南京雑誌社発刊、傅芸子校録『至治新刊全相三国志平話』、傅芸子著『春明鱗爪録』が「新刊摘要」で紹介されている。

後に交流を深めることになる倉石武四郎(1897-1975)は1928年から中国に留学していた(当時、京都帝国大学助教授)。前掲の『支那語会話篇』の序文で倉石は「本篇の著者傅芸子先生は余が北京留學中始めて交を定めた旗籍の學者であつて、其後、東方文化研究所講師として京都に來任し、兼ねて京都帝國大學文學部にも教鞭を執られてゐる。」と述べていること、また、倉石は橋川時雄の世話で、在留仲間と共に孫人和に音韻学の手ほどきをしてもらったと回想しているので、芸子と倉石は、この頃、橋川の仲介で知己を得たのかも知れない。

傅芸子は1932年、来日し、京都において上述した職責に就いた。当初、青木は仙台におり、芸子が青木と知己を得たのは、青木がまだ東北帝国大学教授在職中のことだった。青木が芸子の『白川集』に寄せた「はしがき」に言う。「己れ仙臺に在りしより君を知りて、雁の音づれ折々にかはし、西京に移りし後は、行き來も常に繁かりければ、この幾とせ君がものし給ひつる文ども、おほかた示されて讀み侍りぬ。」芸子が京都に来て6年目の1938年(昭和13)、青木は京都帝国大学教授を拝命し京都に移り住んだ。ここで、倉石武四郎とも同僚となり、芸子との往来も足繁くなった。長澤規矩也によれば、「(青木)博士は、進んで広く新しい知己を求めようとはされなかつたのであつた。人の話に、博士は、面識の前、手紙を往復して



日本での10年間の研究成果



雁の音づれ折々にかはし

いるうちに、この人とは気が合いそうだとか、合うまいとか、きめてかかれていたという。」とすれば、青木が京都に移った後も更に交流を深めたということは、青木は芸子と気が合ったのだろう。

来日した10年間で傳芸子が成した仕事は三つある。その一は、『正倉院考古記』の刊行、その二は、今回展示されている『白川集』に集められた論文の執筆、その三も、今回展示されている『支那語会話篇』の刊行である。芸子は来日する時、胸に期するものがあつた。『白川集』の「自序」で、芸子は述べている。「国を出る目的は勿論中国語を教える為であるが、しかし目的の半分には学問を究めたいという気持ちもある。」(原文は中国語)だとすれば、芸子は「教書」と「求学」を両立させたと言える。「自序」では留日の学問的成果として以下の三つを挙げている。「日本当局の特別の許可を得、また両京の友人たちの協力のお陰で、1、正倉院蔵の唐代文物を調査し『正倉院考古記』という形に纏めあげられたこと。2、内閣文庫及び両京の各大学の文庫が所蔵している、中国では佚存した旧籍を見ることができたこと。3、各寺院に残っている唐代楽舞を確認できたこと。」2と3が結実したのが『白川集』である。そして教学の面では倉石と共に、倉石言うところの「新しい支那語学」を確立せんとし、これまでにない新しい中国語教科書の編纂に取り組んだ。(倉石武四郎の項参照)

青木は以上の芸子の学問的業績を称え『白川集』「はしがき」で言う。「君は年ごろ、我が日の本の世々に傳ふるもろこしぶりの跡を、尋ねきはむるを旨とし、あるは正倉院に唐の代の遺れる姿を考へ、あるは内閣文庫に明の代の珍しき書をさぐりて、つばらつばらにあげつらひつ。かくて曩に正倉院考古記といふ一卷を世に問はれけるが、こたひ編み給へる書には、内閣文庫に見いでし、明の代の歌ひもの物語などに就きて、いまだ世に知られざる事ども明らめられたるが多かり。」この序文は、芸子が帰国を前にして、青木の「手を執り」『白川集』が上梓されるあかつきには、「それが端に一言加へてよと、いと懇ろに」請うたのを引き受けたものである。日本に残った古き中国文化の跡を辿り、いよいよ日本を去り中国に帰国する芸子に序文を請われた青木が、敢えて唐文でも漢文調でもなく和文で「はしがき」を綴ったのは、芸子の研究内容と成果に対する青木なりの敬意の表れではなかったかと付度する。

金城学院大学の張小鋼教授から提供いただいた資料(写真)には芸子から青木に宛てた書簡が8通残されているが、その中には、吉澤義則を紹介してもらい『白川集』への題字を依頼したことや、長澤規矩也が(青木の求めで)入洛したこと(長澤は芸子の荷造りを手伝っている)、帰国前にもう一度面会したいこと、別れに際して会うこと叶わず辞去の挨拶ができなかった詫び、序文のお礼、序文を賜ったものの出版前で「寄呈教正」することができないので予め知らせてきた『白川集』の「目次」、原稿に副本がないので進呈出来ない詫びと出版の段取りを知らせてきた書肆の文求堂からの書簡の内容、などがしたためられている。いずれも実直で真面目な人柄を思わせる端正な文字と内容であり、そこには青木に対する感謝と敬愛の念が窺える。

帰国した芸子は、北京図書館の編目部主任に就任、また、北京大学文学院にも職を得た。そのことも青

木に書簡で報告している。ちなみに『白川集』には周作人も序文を寄せている。青木に宛てた書簡の中に、周作人から連絡があり、早期に帰国し北平図書館の職務に就任するように催促するよう言ってきており、予定を切り上げて帰国する許可を求めているものがある。周作人の序文と青木宛書簡の内容からすると、芸子帰国後の就職の斡旋をしたのは周作人だったようである。周作人は序文で、芸子とは10年来の知己であると述べている。

今回の展示資料『白川集』は昭和18年文求堂発行。献呈葉「青木先生教正 傅芸子敬贈」（「青木」の部分のみ自筆）あり。狩野直喜の題字あり。「狩野子温」の篆刻刻印もあり（「子温」は狩野の字）。口絵に吉澤義則による「白川古和歌」の色紙の写真あり。青木の「はしがき」（末尾に「昭和十七年八月 青木正児しるす」とあり）、周作人の「白川集序」（末尾に「中華民國三十一年十月十八日、周作人識於北京」とあり）、「自序」（末尾に「民國三十二年四月傅芸子於北京」とあり）、その後「凡例」あり、本書に序などを寄せた上述の各人に対する謝辞があり、「青木迷陽博士」（「迷陽」は青木の号）の名が最初に挙げられている。本書は内閣文庫の特別の許可を得て多くの写真を撮って掲載しているほか、少なからぬ協力者から撮影の援助、写真の提供も受けているので、各人名を挙げて謝意を表している。書名命名の由来は、京都在住の時、芸子が白川に居を定めていたことに因む。本書が、芸子言うところの「求学」の成果の一である。

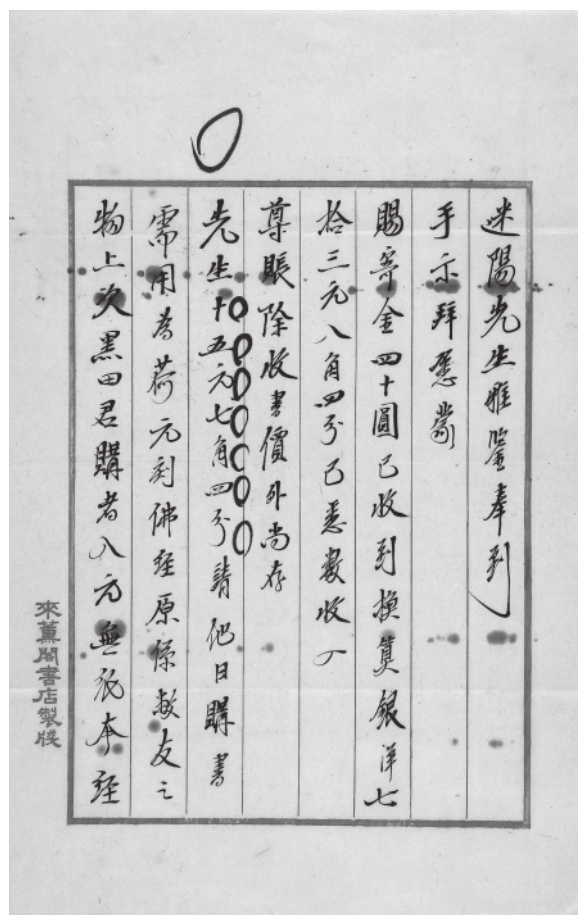
『支那語会話篇』は、倉石武四郎が弘文堂から出版した、漢語教本五部作の一。青木への自筆の贈呈の辞、「迷陽先生 評正 傅芸子敬贈」あり。倉石序文によれば、「就中北京の風土名勝等に關する各章は實に先生が京都來任以前に尤も力を致された北京掌故の研究を凝縮せるもので、本篇の精彩は正に茲に在りと云ふことができる。」本書には多数の写真、地図などの図版が使われているが、中でも特記すべきは、本書第27課「戲院觀劇」で、かなり専門的な教養を必要とする中国伝統演劇が話題になっており、崑曲を唱わせたら尚小雲より韓世昌の方が数段優れている、などという会話も出てくる。（韓世昌の項参照。）名優数枚の写真の他、韓世昌演ずる「驚夢」（『牡丹亭』の一段）の舞台写真も掲載されているのは、崑曲を評価した青木の嗜好とも一致して大変興味深い。本書が、芸子言うところの「教書」の成果の一である。

主要な著作に『旧京閑話』、『餐英廬隨筆』、『清代名人故宅考』などがある。

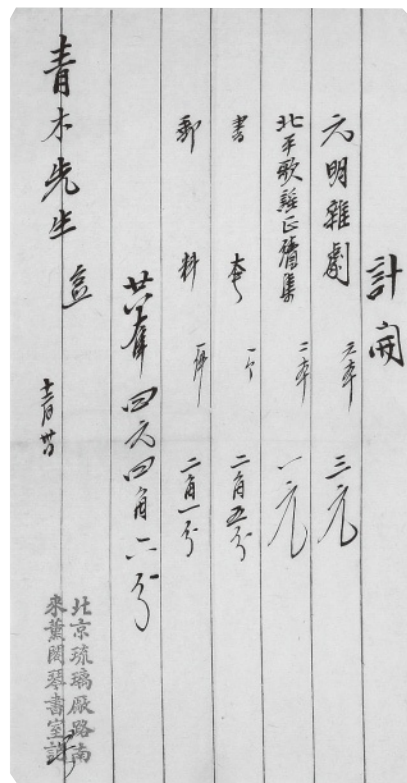
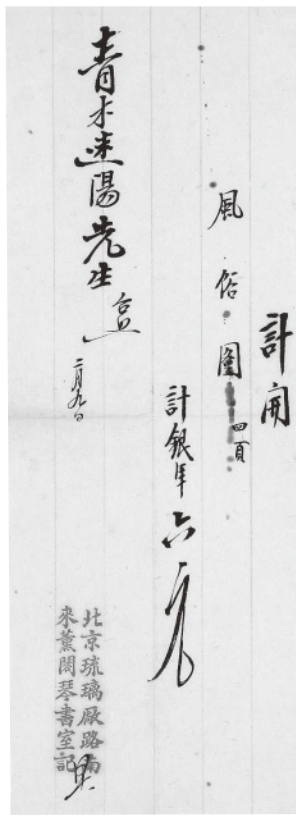
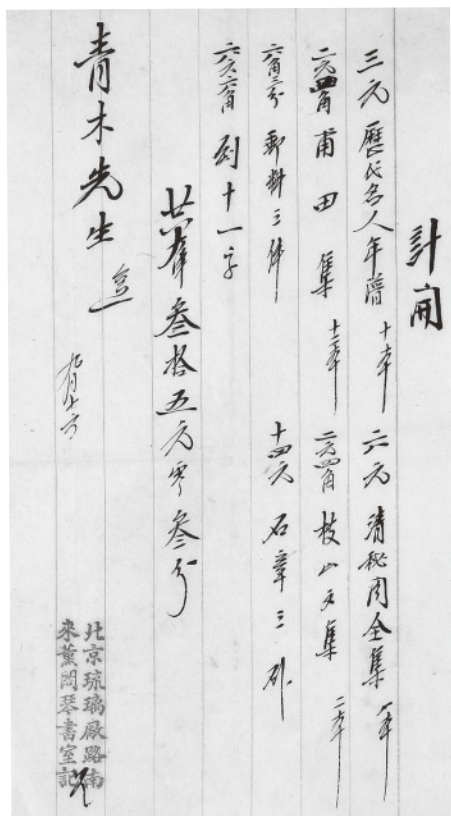
参考文献：『文字同盟』（復刻版、全3巻）汲古書院、第1・2巻は平成2年、第3巻は平成3年刊
『文字同盟』（第3巻）「解題」今村与志雄
「青木先生とわたくし」長澤規矩也（「青木正児全集月報I」1969年11月『青木正児全集』第6巻 春秋社）

[17] 琉璃廠の来薰閣主人

展示資料は、琉璃廠の来薰閣書店からの図書購入に関する書簡。青木は大正14年春から翌夏まで、文部省留学生として北京に滞在。その間、もっとも親交のあった中国人が、この来薰閣主人とされる（『青木正児全集』第7巻 吉川幸次郎「解説」）。琉璃廠の書店主で、陳濟川という（倉石武四郎の「青木さんのおもいで」（『同全集』第6巻月報I）には、「来薰閣の陳杭君に…」とあり、同一人物かと思われる）。青木蔵書『忠雅堂文集』に『湖海詩伝』のメモが挟まれているが、この『詩伝』は来薰閣から6円で購入したという領収書が残っている。大正15年、青木は留学を終えて帰国すると、家族とともに仙台に移った。そこへ来薰閣主人が訪ねて旧交を温めるほどだった（『同全集』月報IV「仙台時代の青木先生」に付けられた写真）。来薰閣書店は、現在もなお琉璃廠にある。



来薰閣書店からの書簡



親しく出入りした来薰閣書店の領収書

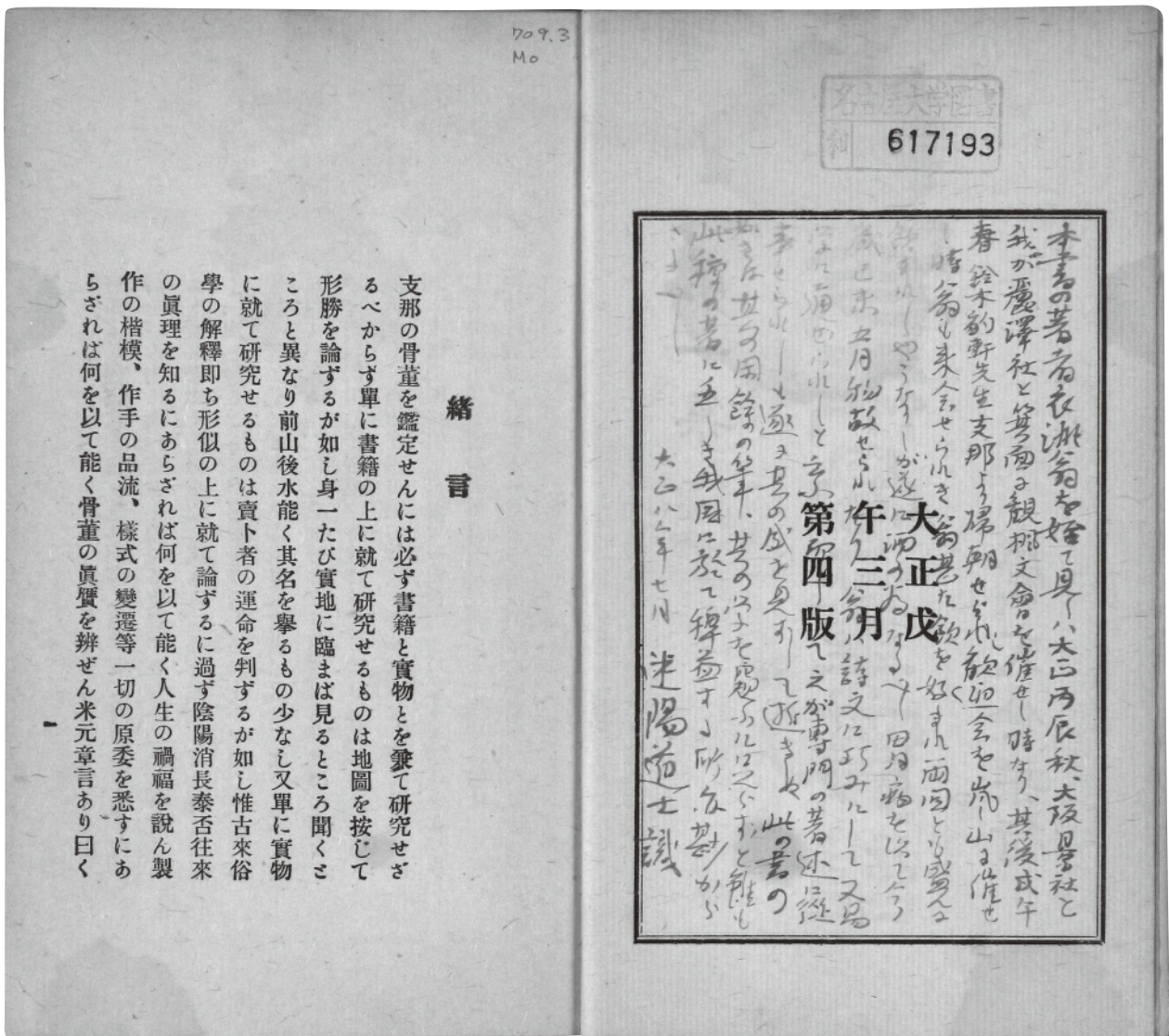
【日本編】

[18] 靱山衣洲

衣洲 (1855-1919) は、東京出身の漢学者。台湾で活躍していたこともある。青木所蔵のこの『支那骨董叢説』第3集の表紙見返しには、自筆で次のように記される。

「本書の著者衣洲翁を始めて見しハ、大正丙辰 (*注: 5年) 秋、大阪景社と我が麗澤社と裏面に観楓文会を催せし時なり。其後、戊午 (*注: 7年) 春、鈴木豹軒先生支那より帰朝せられし歓迎会を嵐山に催せし時、翁も来会せられき。翁甚々飲を好まれ兩回とも盛んに飲まれしやうなりしか。遂に酒の為なるべし。胃病を以て今歳己未 (一8年、補) 五月物故せられたり。翁ハ詩文に巧みにして又易学に通ぜられしと云ふ。而して之が専門の著述に従事せられしも、遂に其の成を見ずして逝きぬ。此の書の如きは其の閑餘の筆、其の学を窺ふには足らずと雖も、此種の著に乏しき我国に於て、裨益する所亦尠からざるべし 大正八年七月 迷陽道士識」と。これまで衣洲の没年は不確かだったが、これによって明確となった。

青木が衣洲と初めて会った文会については、『支那芸論叢』序にも記される。「大正五年五月麗澤社文會興る。是より先浪華に景社有り。…靱山長尾・衣洲靱山二先生之を援け、壇甚だ盛んなり」と。この『支那骨董叢説』第3集の「硯」の部に、朱の圈点・傍線多し。参考にしていた様子が窺える。



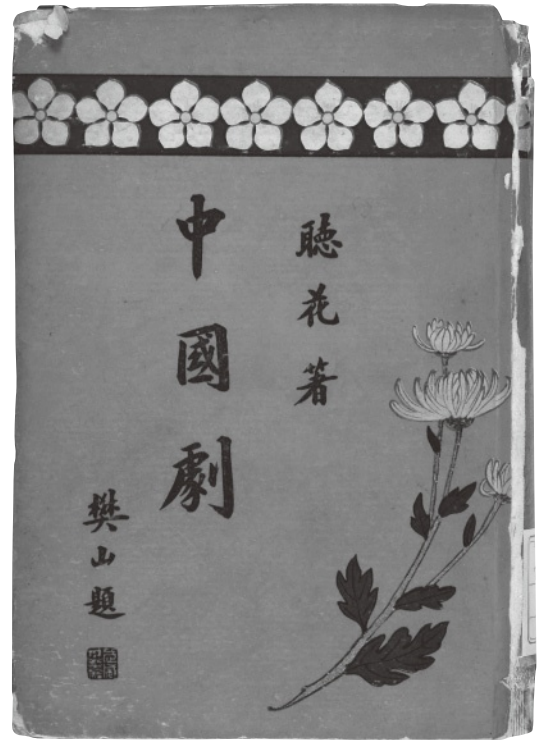
文人への称賛—『支那骨董叢説』

[19] 辻聴花

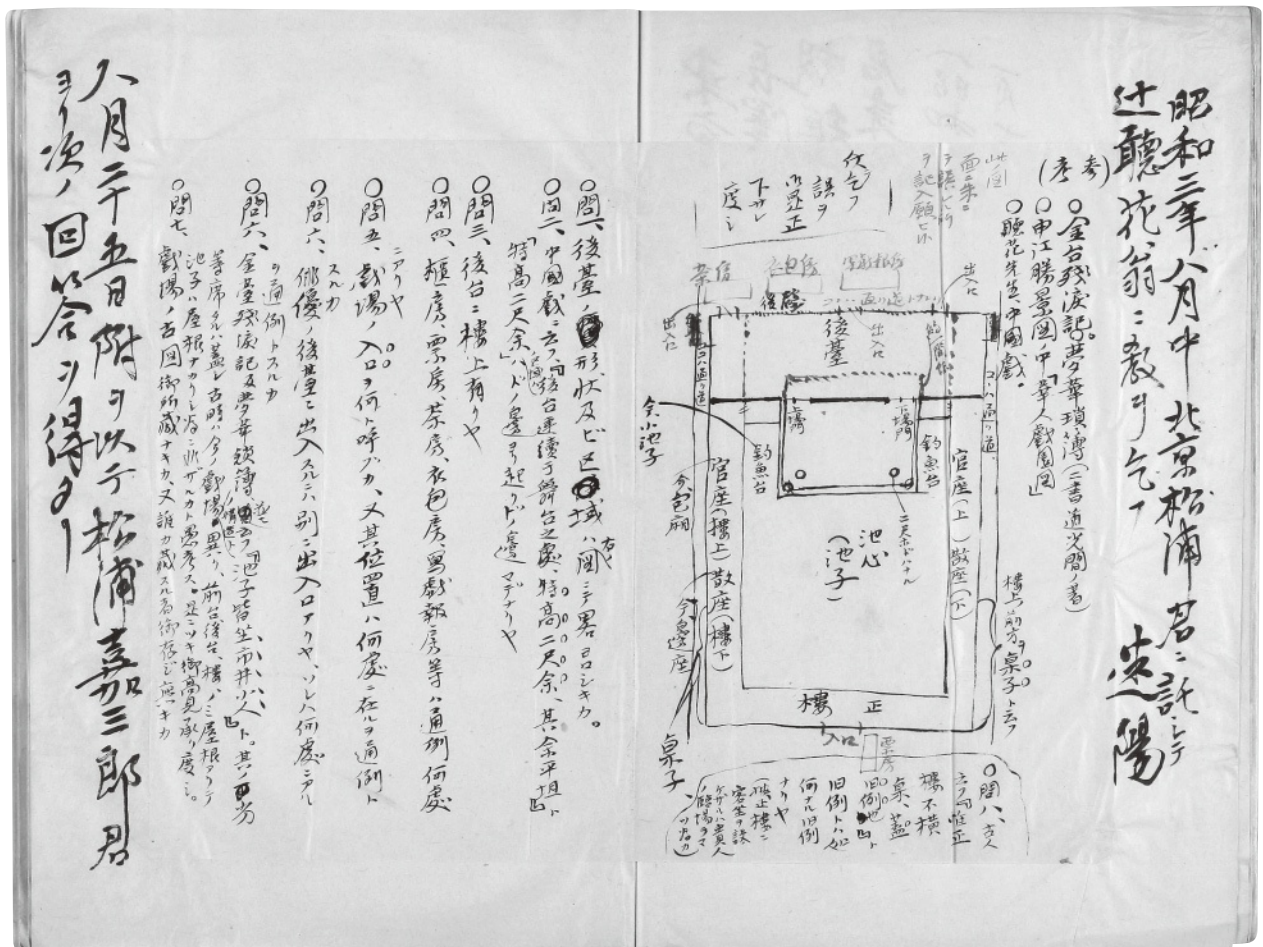
辻聴花(1868-1931)は中国劇評家。明治元年、熊本に生まる。名は武雄、聴花は号。明治38年渡清し、大正元年に順天時報社に入社、演劇改良に関する意見を同紙に掲載する。民国9年、『中国劇』を同社より刊行。(青木所蔵。書込みが見られる)

青木は大正14年、北京に留学し、同社の記者であった知人・松浦嘉三郎を介して辻と面会、その教えを乞う。しかし、青木は辻が京劇のみに力を入れ、崑曲に理解を示さないことに疑問を抱いたらしい。「〔聴花語るに足らず〕『新中国』第2号。「辻聴花先生の思ひ出」として『青木正児全集』第7巻)展示資料の書簡(青木自編「講学来函」)は、青木が昭和3年に松浦に託して辻に送った質問状とその回答。劇場の様式に関するもので、『支那近世戯曲史』第15章で言及されている。

参考文献：中村忠行「中国劇評家としての辻聴花」(『アジア学叢書77 支那芝居上下』2000)



中国語で刊行された『中国劇』



辻に送った質問状とその回答

[20] 藤井乙男

藤井（1868-1945）は、京都帝国大学教授。「近世国文学史」「近世戯曲小説史」などを講義。日本近世文学研究の基礎を築いた。当時、同大の学生だった青木は、「（幸田）露伴先生の後を承けて就任された藤井紫影（乙男）先生にかぶれて江戸文學に耽り、戯作戯文を読んで國文の徒と交はつた」（『江南春』より）と記す。また青木は「先生より…懇切なる示教を忝なくし」、その成果を「創見はなはだ多し」（小川環樹「解説」）と称賛された「国文学と支那文学」（『青木正児全集』第2巻）に結実させた。「嘗て『燕居筆記』と云ふ明本の通俗書を藤井乙男先生の書齋で見せて戴いた事」（『水滸伝が日本文学史上に布いてゐる影』『同全集』第2巻）もあるとも記す。まさに青木の戯作嗜好を方向付けた一人である。展示品は、藤井博士の絵はがき。その膨大な著作をまとめた『藤井乙男著作集』（全9巻）が、クレス出版より刊行されたばかり（2007）。



藤井乙男博士肖像

青木に大きな影響を与えた藤井乙男博士の絵はがき

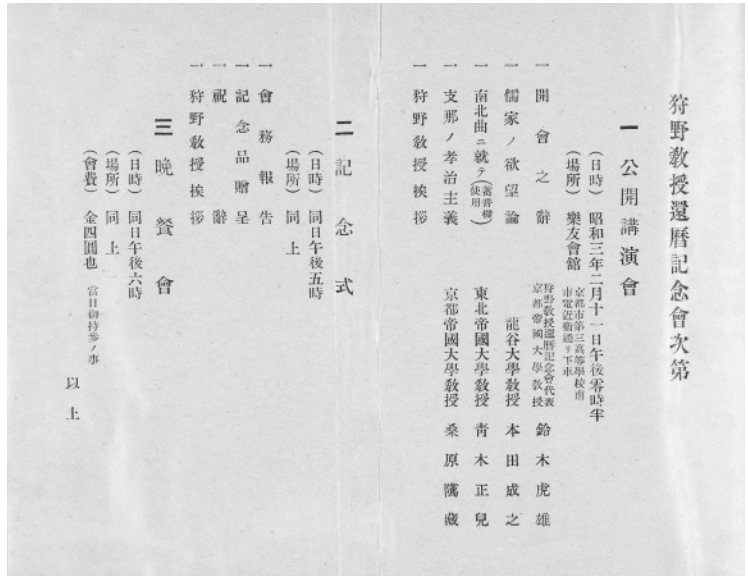
[21] 狩野直喜

狩野直喜 (1868-1947) 明治元年、熊本に生まる。東京帝国大学卒業。京都帝国大学教授として、中国哲学・文学を講義。經学において清朝考証学の祖述者と称され、戯曲小説・敦煌文書の研究に携わる。著者に『支那学文叢』『讀書叢餘』など。

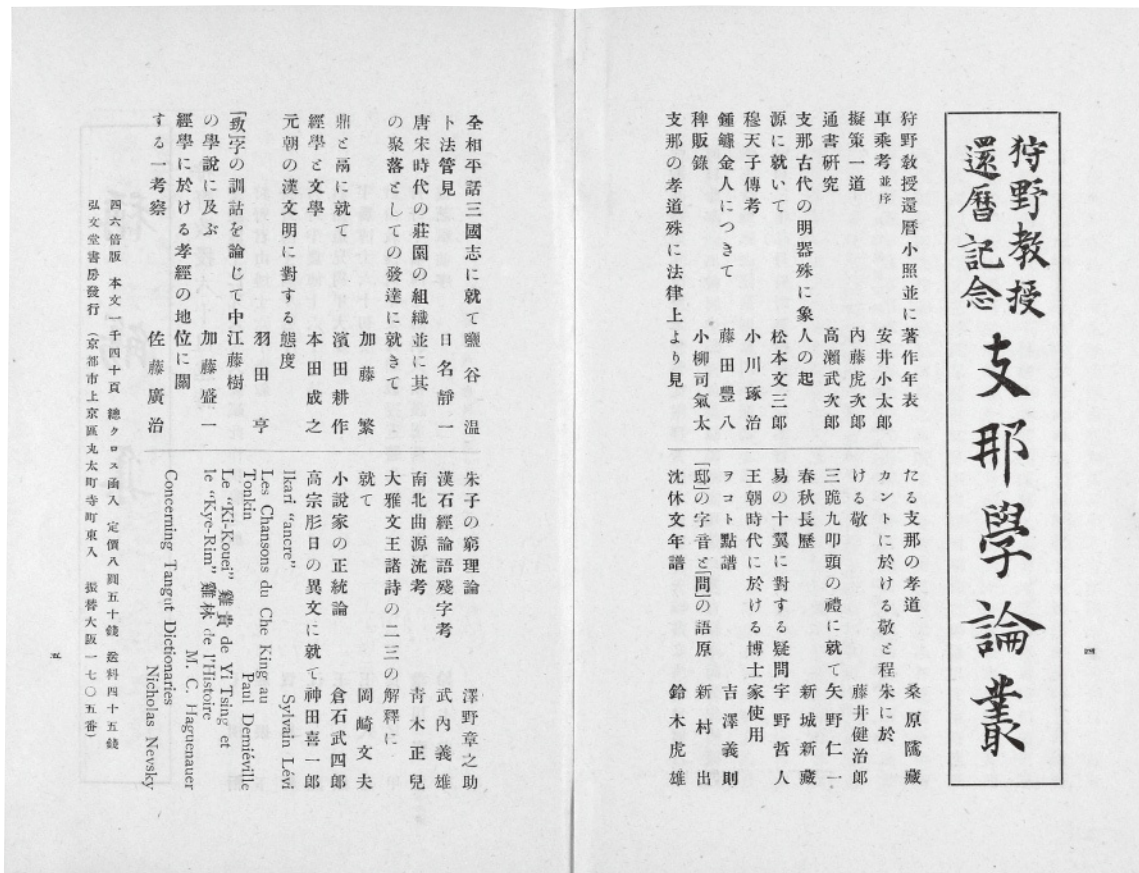
青木は京大において、狩野の指導の下、元曲を題材として卒論を執筆。狩野の元曲に関する読書量と読解の精密さについて、青木は「先生は實に我國に於ける元曲研究の鼻祖である」(「狩野君山先生と元曲と私」『青木正兒全集』第7巻)と述べており、狩野に対する敬愛の念が感じられる。また欧州視察を終えた狩野から、英国図書館蔵スタイン将来敦煌遺書や、レニングラード学術院所蔵「劉知遠諸宮調」の写真(一狩野の還曆祝賀会でレニングラード大学側から贈呈されたもの)などを見せてもらうなどしている。

展示資料は、狩野の還曆祝賀会に関する資料。還曆記念会公開講演会では、青木が「南北曲ニ就テ(蓄音機使用)」と題して発表、また記念論集では、「南北曲源流考」を掲載している。

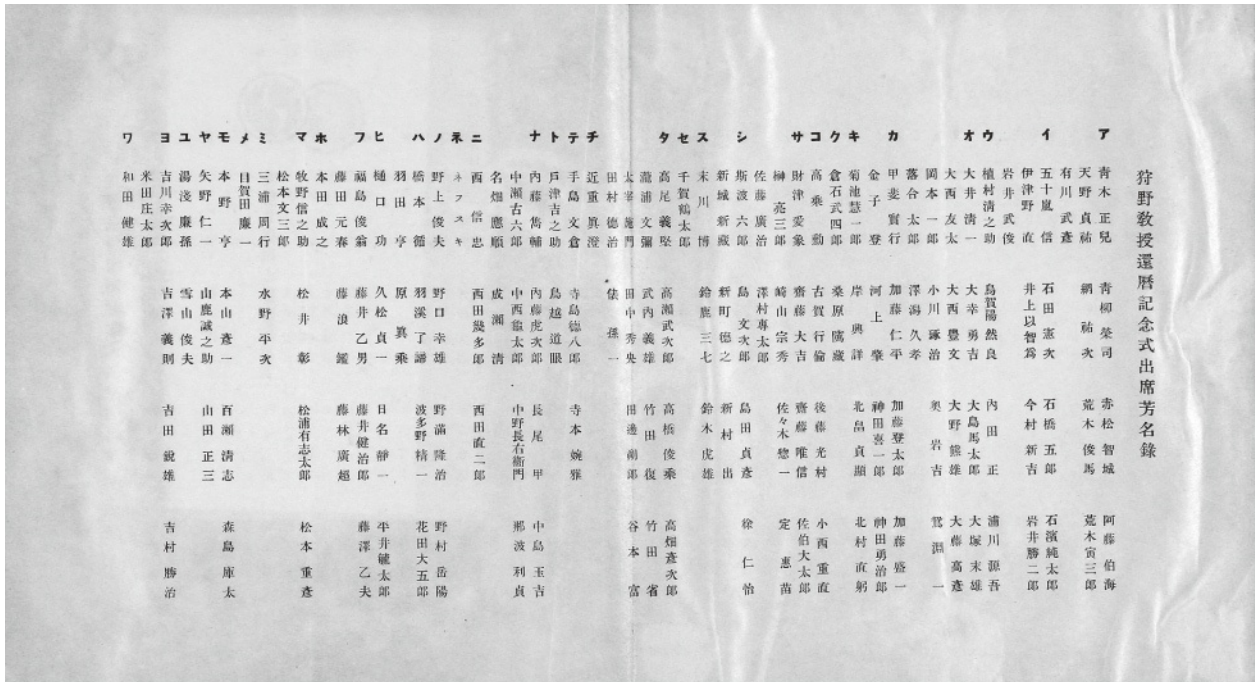
参考文献：吉川幸次郎「狩野直喜」(『吉川幸次郎全集』第17巻)



還曆記念講演会



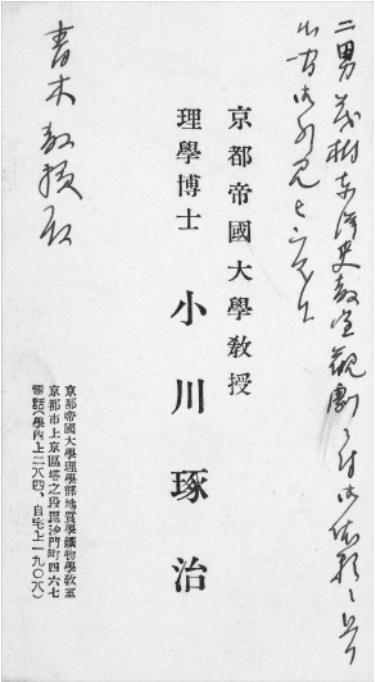
還曆記念論集



還暦記念式出席者芳名録

[22] 小川琢治

小川琢治 (1870-1941) は地質学者・地理学者。著名な中国文学者の小川環樹の父 (環樹については小川環樹の項参照)。1908年、京都帝国大学教授に就任。中国学にもあかるく、『支那歴史地理研究』の著作がある。また、京都滞在中の羅振玉とも交流があったほか、中国戯曲にも関心があったようで、梅蘭芳が来日した折はその舞台を観、『品梅記』に文章を寄せて、「一行の演ずる支那劇が我々の第一印象からの豫期と全く雲泥の差のあるもので、全く支那戯曲及び支那劇の智識のない我々に與へた感じは何とも言ひ現はせぬ。……近頃日本劇で観た最も綺麗な舞臺面に比して遙かに好かつた」と絶賛している。展示品の名刺には、青木に小川の次男貝塚茂樹 (東洋史学者) と観劇の件で会ってほしい旨の言葉が記されている。「二男茂樹東洋史教室観劇ニ付御依頼ニ上 (あが) り候間 御引見被下度候」とある。ちなみに長男は冶金学者の小川芳樹、三男はノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹で、四男は環樹という学者一家であった。



小川の名刺

[23] 久保天随

久保天随 (1875-1934)、本名は得二、別号は兜城。漢文学者、漢詩人。1929年、台北帝国大学教授に就任、中国文学を講じる。日本における中国戯曲文学研究の先駆者で、『支那戯曲研究』の著作がある。青木もこの書は読んでおり、「揚州に在りし日の孔尚任」(『支那文学芸術考』、『青木正児全集』第2巻)や「支那文学研究に於ける邦人の立場」(『江南春』、『同全集』第7巻)に言及がある。前者に曰く、「近時久保天随氏も其の「支那戯曲研究」に「桃花扇」を紹介するに方り、『湖海集はその存佚今不明であるから』と云つて、亦其詩を「國朝別裁集」「山左詩鈔」に求めて珍重してゐる。余は先年北京に於て偶ま其の「湖海集」十三巻を得て獨りほくそ笑んだ」と。久保天随には、大正14年8月26日、留学先の北京で会い、彼のための歓迎会で同席している。

展示品は久保が訓読調で抄訳した『三国志演義』。青木により傍点、傍線、コメントなどが随所に書き込まれている。とりわけ五丈原に諸葛亮が病没する一連の場面には「誰か方斛の涙無からむ。将星將に墜ちんとす嗟吁!!」などといった、嗟嘆の色濃い評語が多く書き込まれている。



幅広い交流—久保著『三国志演義』

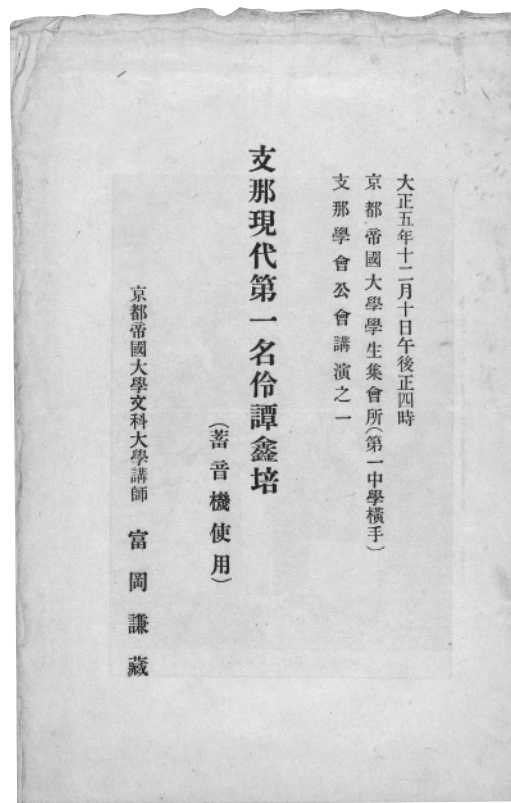
[24] 富岡鉄斎・謙蔵 (謙三) 父子

謙蔵 (1873-1918) は、富岡鉄斎の一人息子で京大で東洋史・金石学を担当。青木が京大に入学した明治11年、「第一時間目の講義は、その時始めて講師として教壇に立たれた故富岡謙三(蔵)先生の『漢書』藝文志の講讀であつた」(『琴棋書画』、『青木正児全集』第7巻)と記す。明治43年(1910)、当時の大発見、敦煌写本の調査に内藤湖南・狩野直喜とともに赴く。また辛亥革命を避けて京都に来た羅振玉や王国維らと親交を結んだ。青木は、謙蔵の康熙刊本「黄山図」を見せてもらい、「感じの好物であつた」(『絵事瑣言』、『同全集』第7巻)と記す。

展示の『丙辰寿蘇録』は、蘇軾の誕生日—丙辰12月19日(大正6年1月12日にあたる)—を記念して催された書画の会。謙蔵が画人の長尾雨山とともに編輯したもので、羅振玉の署名、内藤湖南と長尾雨山の自筆序文が書かれている、たいへん貴重なもの。鉄斎・初山衣洲(氷壺軒主人)・羅雪堂(振玉)・内藤湖南・狩野君山(直喜)などがそれぞれ書画を持参し、鑑賞会を開いたことが分かる。

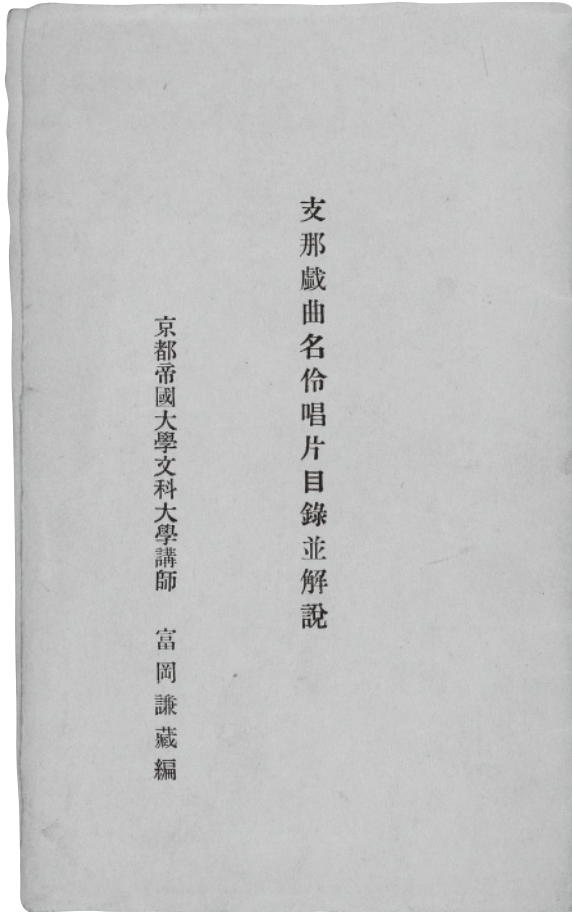
また、謙蔵編「支那戯曲名伶唱片目録並解説」は大正15年(1926)の支那学会大会で謙蔵が「現代第一名伶譚鑫培其他二三の名伶を蓄音機入りにて御紹介」した際のもの。その様子は「近頃支那文学史書評判記」(『同全集』第7巻)でうかがえる。

父・鉄斎 (1836-1924) は、京都出身。明治・大正期の代表的文人画家。青木がはじめて鉄斎に会ったのは、大正10年(1921)4月。鉄斎の床の間には、金冬心の書が掛けてあった。『金冬心之芸術』を刊行していた青木とたちまち話があい、鉄斎の提案で

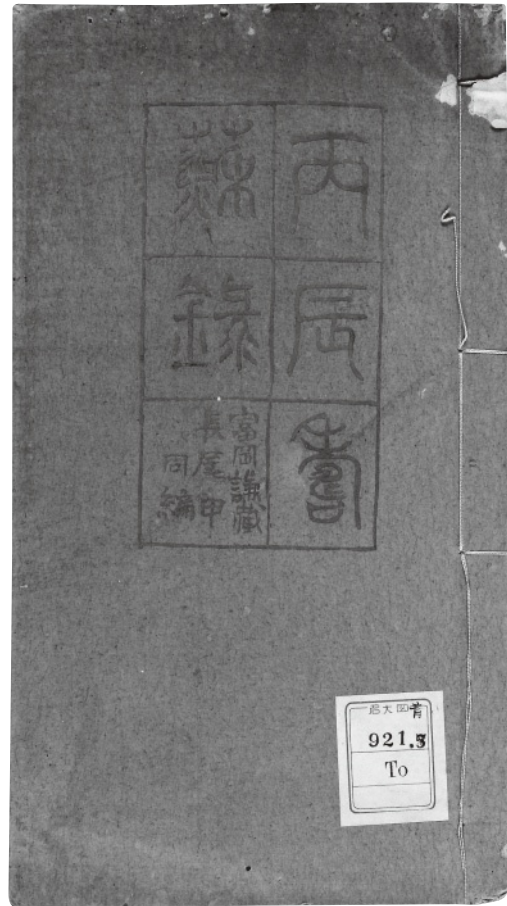


京大開催の譚鑫培紹介の講演会

「考槃社（こうはんしゃ）」を結成。鉄斎は「様々の有益な藝術談を聴か」（青木「富岡鉄斎翁追悼展観講演会」『同全集』第6巻）せてくれたという。青木は、鉄斎「翁の文雅と好事とに深く感動…。かうした中華の文人に見るやうな風格を備へた其の人となりをも敬愛」（「鉄斎翁と考槃社」『同全集』第7巻）した。また鉄斎蔵の李息斎「竹譜」を見せてもらい「實に雅なものであつた」（「絵事瑣言」）と記すなど、両者の親密な交流のほどがしのばれる。



「支那戯曲名伶唱片目錄並解説」



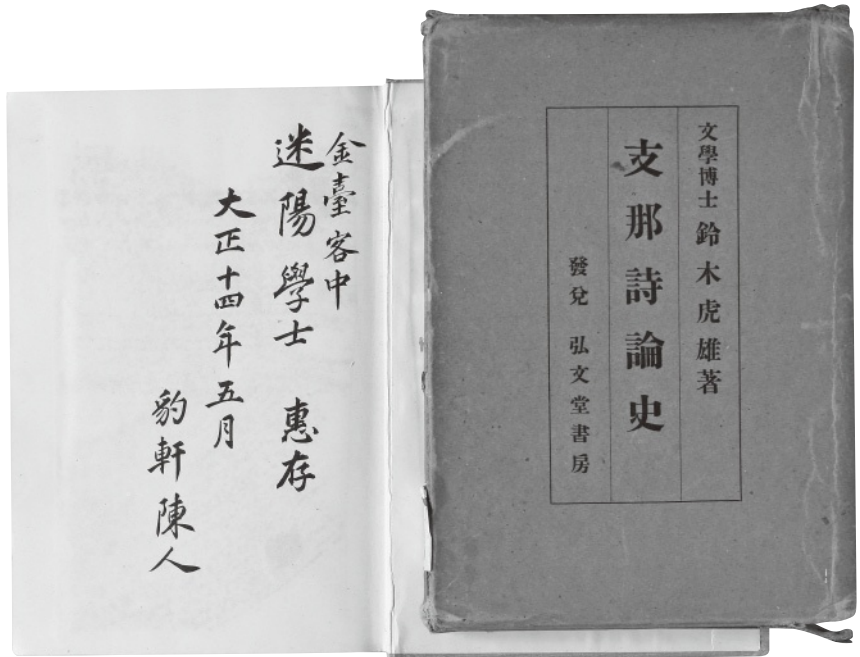
文人の心の精粹—『丙辰寿蘇録』

[25] 鈴木虎雄

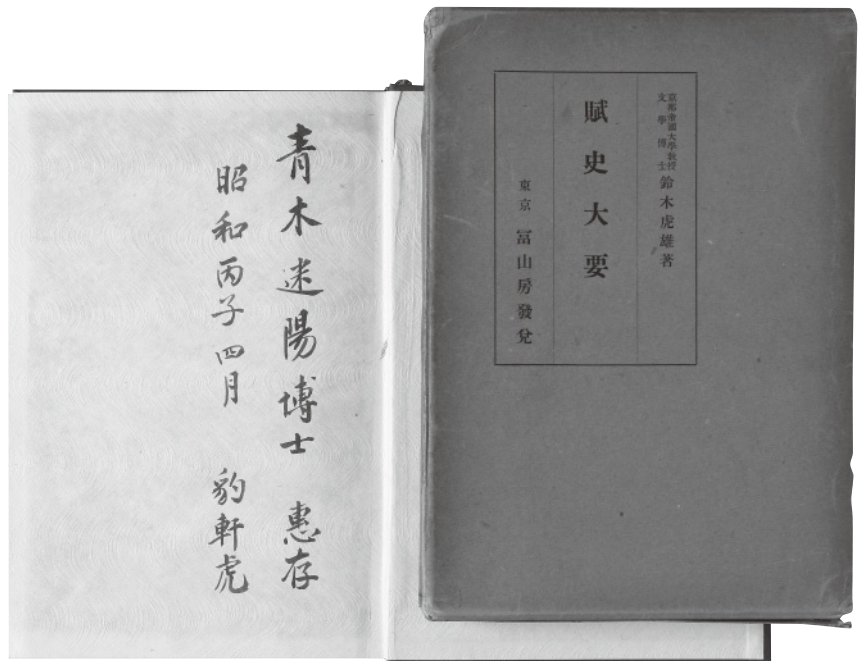
(1878-1963)号は豹軒。新潟県西蒲原郡生津村(現・吉田町)出身。1900年、東京帝国大学文科大学国文科卒業。1908年に新設の京大助教授に迎えられる。1919年教授、1938年に名誉教授。1948年に文化功労者、1961年に文化勲章受賞。日本の草創期の中国文化研究者の一人。主著に『支那文学研究』『支那詩論史』『賦史大要』等、訳注に『杜少陵詩集』などの全訳がある。ことに『支那詩論史』は、「日本の諸家ばかりでなく、中国の羅根沢、郭紹虞にさきだつての画期的な創始」(吉川幸次郎「鈴木虎雄先生の功績」『吉川幸次郎全集』第17巻)であり、「世界的に申しまして、先生が一番初めであると申してよろしかろうと思ひます」(同「鈴木虎雄博士慰靈祭に臨みて」『同全集』第17巻)と高く評価されるものである。

青木は、文科を開設したばかりの京大に着任した鈴木最初の学生であった。「鈴木虎雄先生珍藏の「二刻英雄譜」中の「水滸」百十回本だ。そして其れが現在今借り來つて僕の机上に置いてある」(「水滸伝が日本文学史上に布いてゐる影」『青木正児全集』第2巻)と記すように、親しく教えを受けた。青木文庫にあるのは、『支那詩論史』『賦史大要』の二冊。『支那詩論史』の表紙見返しには、「金臺客中 迷陽學士 惠存 大正十四年五月 豹軒陳人」とある。金臺、すなわち古都北京の雅称。書き込みが散見される。とくに興味深いのが、この部分にはさまれたメモ。鈴木引用をさらに自ら確認することで、理解を深めようとしたのであろう。『賦史大要』の表紙見返しには、「青木迷陽博士 惠存 昭和丙子四月 豹軒虎」と署名さる。丙子は、昭和11年のこと。青木が京大に博士の学位を申請したのは、昭和5年、43歳のときである。昭和13年、その鈴木の後任として、青木は京大の中国文学科の教授となる。

青木が、鈴木『支那詩論史』を強く意識して出版したのが、『支那文学思想史』(昭和18年)である。その序にいう、「力めて先生の遺された所を拾ふことを心がけ、…以て先生の偉業を顯揚せんとした」と。また末尾には、「本書の題簽は恩師鈴木先生に懇願して御染筆を賜はつた。本書に取つて誠に意義深きことであり、光榮の至である」と記される。敬愛の念が偲ばれる。



敬愛する師の著作—『支那詩論史』

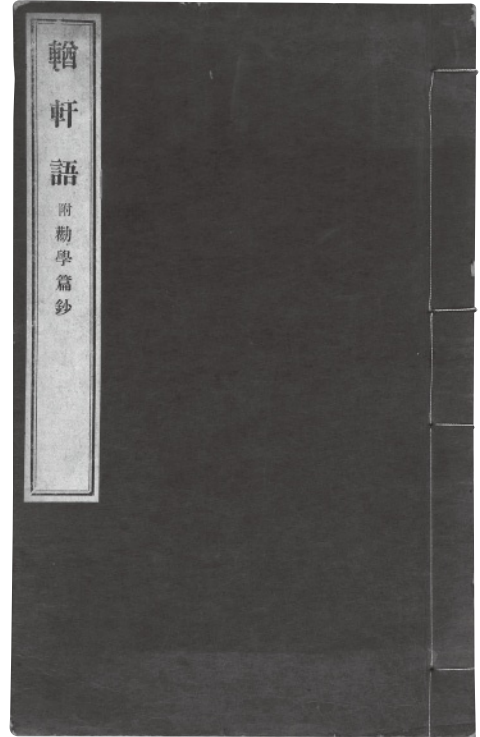


師の御染筆—『賦史大要』

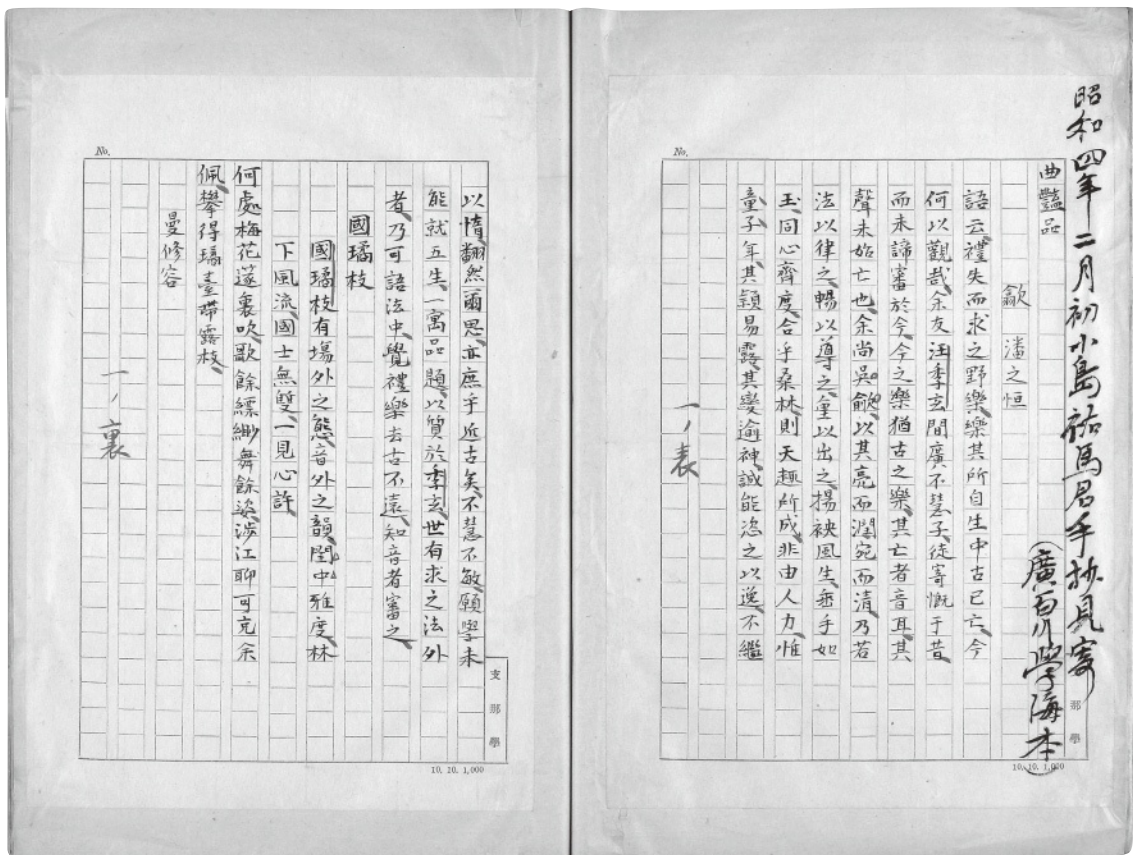
[26] 小島祐馬

(1881-1966) 号は抱甕。京都帝国大学名誉教授(中国哲学)、京都大学人文科学研究所の初代所長。明治末、文科を開設したばかりの京都帝大に着任した狩野直喜の最初の学生で、青木とは京都帝大の同窓で盟友。青木(当時、同志社大教授)とともに雑誌『支那学』の発刊・編集にかかわった。「(大正)九年五月雑誌『支那学』発刊の議熟す。…小島君嘗て余に語つて曰く、寧ろ月刊雑誌を出すに如かずと。余も亦之に同ず。小島君は經濟の才あり、則ち經營の事に當らしむ」(『支那文芸論叢』自序)。小島はまた親友の河上肇に頼み、『支那学』の発行所として弘文堂を紹介してもらっている。この『支那学』が、「従来の漢学に対する革新の雑誌」(吉川幸次郎「小島祐馬博士追憶」『吉川幸次郎全集』第17卷)となり、わが国の近代的中国学の拠点となる。

展示の書簡は、昭和4年、小島祐馬からのもの。青木自編「講学来函」に綴じられている。また『輜軒語 附勸学篇』の見返しには、「同学小島君点乙 彙文堂寄贈 大正五年一月 沈思洞人」とある。沈思洞は当時の青木の号。書き込み多し。なお彙文堂は、この頃青木が頻繁に出入りしていた京都の書店。彼らの中国研究に大きな貢献をした。青木の『支那文芸論叢』自序にも、「彙文堂又支那學研究入門の書を翻刻して叢刊せんと欲す。小島祐馬君は「輜軒語」張之洞撰「經學歴史」皮錫瑞撰二書に訓點を施す」とある。現在も屋号は続いていて、伝統ある「中国文学報」(京都大学)などを刊行している。



彙文堂との連携による『輜軒語』



盟友・小島祐馬からの書簡

●コラム (5) : 「倉石武四郎との交流・新しき支那語学を目指して —中国語で漢文が読めるようになりたかった」

倉石武四郎(1897-1975)と青木との出会いは、青木が「江南」の「春」をたずねに渡中し帰国した頃、北白川の自宅をおとのうたのが初対面だという。とすれば大正11年(1922)の初夏の頃であったろう。倉石は中学の頃から和漢の古典を好み、一高在学中から中国文学を志し、大正7年東京帝国大学文科大学に入学。支那文学科を専攻し、塩谷温教授に就いた。大正10年(1911)文学部卒業と同時に、中国の上海、蘇州、南京、鎮江、揚州、杭州、紹興などに一ヶ月旅行し、また特選給費生として文学部副手を兼ねた。

しかし、大正9年に『支那学』を創刊した青木をはじめ小島祐馬(「小島祐馬との交友」の項参照)、本田成之諸氏に憧れ、とりわけ青木の創刊号から3号までの「胡適を中心に渦まいている文学革命」、5号の「本邦支那学革新の第一歩」に刺激され、青木の文章に傾倒し、京都に憧れ、上京時の狩野直喜をおとなって京大ゆきを請うたという。大正11年、進んで京都帝国大学大学院に転じ、主として狩野直喜博士の指導を受けた。のち、大正15年には京都帝国大学文学部講師となり、翌昭和2年4月、同助教授に任ぜられた。一方、青木は大正12年12月に東北帝国大学助教授となって仙台に単身赴任していた。大正14年から15年にかけて文部省在外研究員として中国に留学し、帰国後、東北帝国大学教授となった青木は、居を仙台に移した。青木が京都帝国大学文学部教授となって京都に戻ってきたのは、昭和13年のことだった。

昭和3年、倉石は文部省在外研究員として北京に留学することになるが、その前年の暮に、東北大学にいた青木を仙台まで訪ねている。東大在学当時から、既に欧米言語の音読から推して、訓読による中国古典文の読解の仕方に疑問を持ち続けていた倉石は、その時、「北京へ行ったら古典も中国音で読めるような勉強がしたい。」と抱負を語ったところ、青木は「自分がやろうとして出来なかったことだ。」と言ったという。

今回の展示資料は倉石と青木の間に関わされた書簡の一部。青木文庫蔵の倉石から青木への書簡は、四通が倉石北京留学中のものである。一通は倉石が北京留学直前に仙台をおとのうたのち東京より寄せた葉書である。いずれも青木自編の『講学来函』に、経緯などが仔細に記された上、丁寧に糊付けして保存されている。

北京からの最初の二通は『永楽大典』「戯文三種」に関する内容。(『永楽大典』「戯文三種」の項参照。)北京に着いた倉石が孔徳学校の馬廉を訪ねたとき、『永楽大典』の「戯文三種」の抄本を見せられ、それに句読を切って欲しいと頼まれた。倉石は北京に着いて早々、6月17日に青木に宛てて、『永楽大典』本「戯文三種」を入手した人物、その経緯などを知らせ、その内訳を報告した。倉石の書簡によれば、海外に流出していて新たに見つかったものは「永楽大典卷之一萬三千九百九十一」「戯」の部中、「戯文二十七」に属し、中に「三種」の戯文を含むものあり、という。そして、書簡の中で「戯文三種」、すなわち「小孫屠」、「張協状之」、「宦門子弟錯立身」の内容を紹介している。ただし、影印本で出版するか、排印本で出版するかもめていて、出版までには相当の曲折を見ることと予想されとも報告している。

ところが、その後日談が面白い。青木は『講学来函』の一頁を割いて、事の顛末を記している。曰く、「戦乱(*ママ)中ナリシ爲郵便慎マズ 前信報告遺失セルモノト誤リ再度此報告ヲ寄セラレタリ」「余當時次男敦重患ニテ入院中ニテ病院ニ往來シ狼狽ヲ極メ居リシ爲前信ヲ受取り開封セザルマ、打忘レ居リ未ダ報告ニ接セザルモノト誤認シ報告ヲ求メタリ倉石君再ビ此信ヲ寄セラレタリ後前信ヲ見出シ腋下冷汗ヲ出セリ慚愧ゞ」。先に送った『永楽大典』「戯文三種」についての報告が青木の手元に届かなかったと思った倉石は再度同様の内容の書簡を送っている。昭和3年8月16日付け。

似たエピソードがもう一つある。『永楽大典』「戯文三種」を至急複製して欲しいと依頼された倉石は、来薰閣の陳杭に頼んで抄本を作ってもらい送らせた。しかし「いっこうに到着しない」という手紙が来たので、陳杭に問い合わせたが確かに発送したと言うし、途方に暮れていたところ(後で紹介する10月16日付けの手紙で「先生にて何卒少しく氣長に御待ち下され云々」)、仙台から重ねて手紙が届き、実はちゃんと到着していたのだが、丁度大掃除の日だったらしく、家財道具の後ろにおっこっていて見つけなかった、自分の不注意を棚に上げ、云々、と。かくして、『永楽大典』「戯文三種」は、戯文の日本最初の紹介として『支那近世戯曲史』の巻頭を飾ったのであった。

三通目(年月日の記録無し)は、青木が倉石に託した書簡の写し、或いは原本か。青木のメモに言う。

「倉石君ガ北京ニテ紅樓夢ノ講義ヲ受ケ居ル老先生俗語ヲ善ク解スル由ヲ聞キ此散套ノ疑問ノ解釋ヲ託シタリ」。「移山書屋」の名入り便箋2葉表裏にびっしりと「朝野新声太平楽府卷九」「般涉調 耍孩兒 杜善夫」の全文を抄写し書き込みもした上、そこに青木の疑問を書き入れ、「意義明確ニ解シ得ザレラル所アリ困リ居リ」と言い、倉石が紅樓夢の講義を受けている老先生に「老先生ニ聞キシ所ヲ本紙ニ附箋シテ御返シ下サレ給ハゞ幸甚ニ候」と教えを請いたい主旨のもの。

倉石四通目の北京よりの書簡は昭和3年10月16日付けのもの。青木から問い合わせのあった「太平楽府」中の俗語等について、中国人の諸先生、知人に質したが明確な回答が得られないので、結局、倉石自身がいろいろ憶説を折衷して回答したもの。この書簡中には、「崑曲派たる傅惜華君（*傅芸子の弟）、「齊如山氏」、「梅蘭芳（の夫人の死去）」などの人名も見え、面識往来があったことが知れる。

時は遡るが、倉石が留学前に仙台に青木を訪ねた後、東京から寄せた葉書が一通ある。昭和2年9月付け。青木のメモによると「此時倉石君仙臺ニ來ル余所蔵ノ『程氏墨苑』ヲ示シテ利馬寶ノ圖說ニツキ疑義ス後東京ニテ完本ヲ見テ此信ヲ寄セラレタリ」と言う。

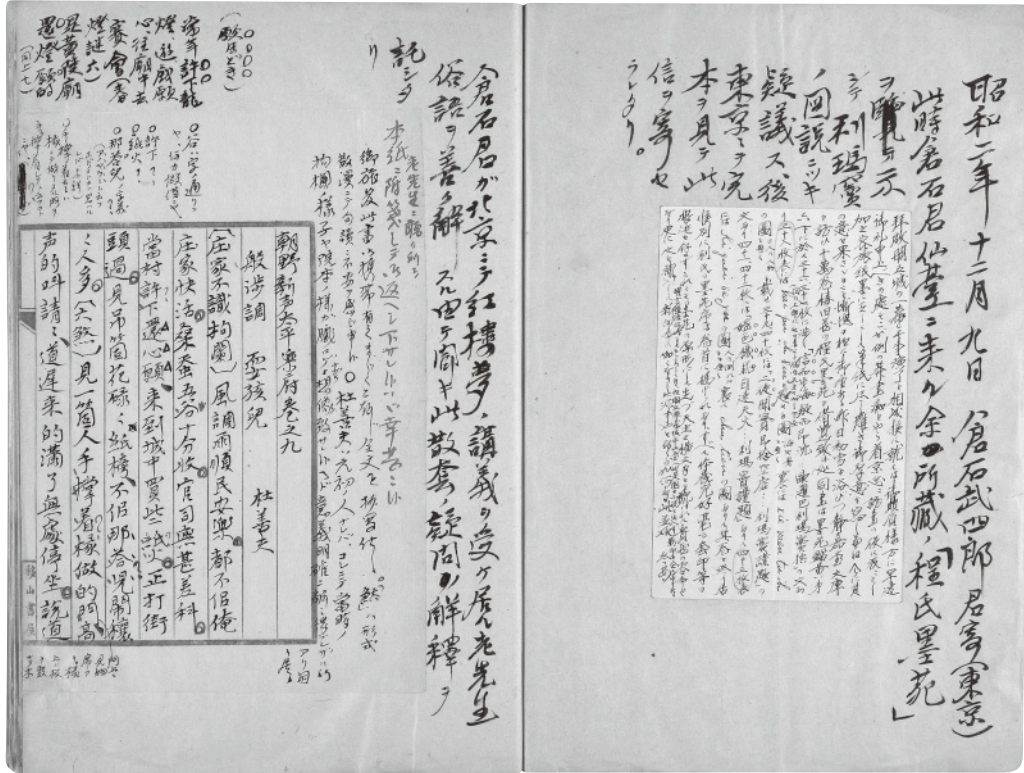
以上の書簡から、青木と倉石は専ら学問上の事柄について頻繁に書簡によるやり取りをしていたことが分かる。

もうひと揃いの展示資料は、倉石が昭和13年（1938）に弘文堂書房から発行した漢語教本シリーズ。1『支那語発音篇』、2『支那語語法篇』、3『支那語読本』（巻一・巻二）（*巻二は昭和14年刊）、4『支那語繙訳篇』（巻一・巻二）（*巻二は昭和15年刊）。それに傅芸子著の『支那語会話篇』を加えて五部作となっている。このうち1には「迷陽先生教 倉石武四郎敬呈」の自筆サインがある。2には凡例に傅芸子への謝辞がある。4には序に傅芸子への謝辞がある。これらの教科書シリーズを編集するに際して、傅芸子の知識と教養から大きな協力を得ていたことが窺える。このシリーズで倉石は「新しい支那語学」を目指した。実用主義、商業主義に流れる低俗な中国語が跋扈している時代にあって（それは時代の要請だったのだが）、所謂“漢文”と所謂“支那語”とを融通貫通したものを「新しい支那語学」と呼んでその確立を企図したのである。いま詳説する^{いとま}違はないが、重要な点は「口語」には教養を注いで品位を向上させ、「文語」には^{いきいきとしたリズム}節^い奏^まを与え生命を躍動させ、両者を均衡させることであった。そして、その根底には、留学前に青木に語った「北京へ行ったら古典も中国音で読めるような勉強がしたい。」という抱負が生きていたと思う。



新しき支那語学

参考文献：「倉石武四郎」戸川芳郎（『東洋学の系譜 第2集』江上波夫編著 大修館書店 1994）
 「青木さんのおもいで」倉石武四郎（『青木正児全集』第6巻月報I 春秋社 1969年11月）



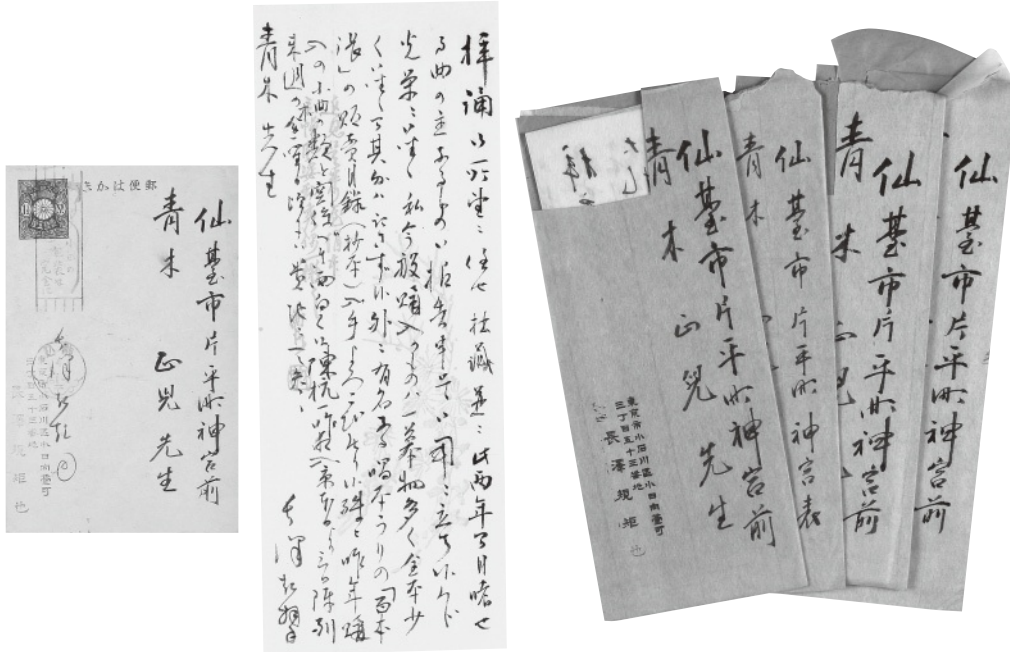
朋友的朋友が朋友になって

[28] 長澤規矩也

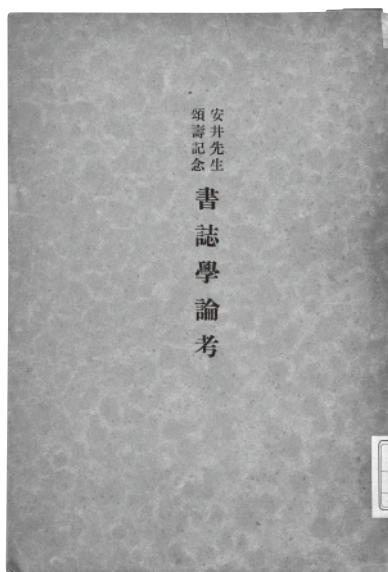
(1902-1980) 書誌学者。東京帝国大学支那文学科卒業。法政大学教授。青木文庫には封面に「青木先生教」との書き入れ・署名のある『安井先生頌寿記念書誌学論考』1冊、長澤からの手紙7通がある。うち1通では青木より贈られた『支那近世戯曲史』への謝意を表すとともに、意見が述べられている。また、『支那近世戯曲史』自序に「長澤規矩也君は稀観の曲本に就きて時々其所得所見を報道せられ」と記されるように、長澤が知見した劇本や小説に関する記述が多く見られる。このほか、韓世昌など同時代の役者・芝居に関しても話題に取り上げている。

参考文献：長澤規矩也『安井先生頌寿記念書誌学論考』（松雲堂書店・関書院 昭和12年）

同 「青木先生とわたくし」（『青木正児全集』第6巻月報I）



長澤からの多くの書簡



『安井先生頌寿記念書誌学論考』



長澤先生写真

[29] 吉川幸次郎

(1904-1980) 京都大学教授。写真は、昭和49年、本学附属図書館開催の青木文庫特別展を参観してのもの。吉川が青木を初めて見たのは、第三高等学校の学生の頃だった。大正9年晩秋の夜、同志社大学(当時の青木の勤務校)の若手教師らによる講演会を聴きに行つてである。題は石濤と八大山人についてであつたらしい。この講演を聴きに行こうと思つたのは、雑誌で青木の論文を読み、強い関心を抱いたからである。講演を聴いた翌月、青木の「和声の芸術と旋律の芸術」(『支那文芸論叢』『青木正児全集』第2巻)を読み、矢も楯もたまらず意を決して青木に面会を求める手紙を送つた。すぐハガキが届き、北白川別当町の私宅「守拙蓬廬」を訪問するのである。「以来四十三年間、私は先生の教室について一度もすわらなかつたけれども、先生の弟子であつた。先生がいられなければ、私は中国文学の徒でなかつたかも知れぬ」(吉川「青木正児先生」『吉川幸次郎全集』第17巻)。二人の気質は、それぞれ李白と杜甫に似たところがあり、資質や方法論も対極にあるが、吉川の青木に対する敬愛の念はまったく揺るぎなかつた。まさに英雄相知るであり、羨ましき師弟関係である。青木もまた吉川解題の「玉燭宝典」(隋・杜台卿撰、尊経閣文庫旧蔵の孤本の複製本)を大切に保管していた(今回展示)。



熱心に見入る吉川博士、今鷹眞先生



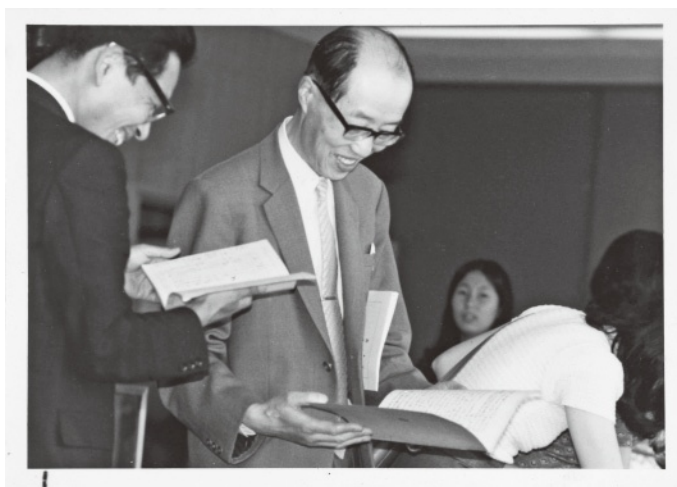
吉川博士解題の『玉燭宝典』

[30] 小川環樹

小川(1910-1993)は中国文学者。『風と雲』『唐詩概説』などの著作や、『史記列伝』『王維詩集』の翻訳(ともに共訳)、『新字源』の編纂など幅広い仕事で知られる。1938年、東北帝国大学講師に就任。これは同年京都帝国大学教授に転じた青木のあとを受けてのものであつた。1950年、京都大学教授に転じる。1997年、『小川環樹著作集』全5巻(筑摩書房)が刊行された。

小川は青木の随想集『江南春』と、『青木正児全集』第2巻(『支那文芸論叢』『支那文学芸術考』)を収録)に解説を執筆している。『江南春』解説に、「(青木は)気ままな旅人であつた」と述べ、また『同全集』第2巻の解説を「自由不羈の精神」と題するなど、青木の自由な精神に対する敬慕の念がうかがえる。また「私は或る夏の一日、これも仙台で先生を訪うたおり、先生は「ここ何日も家から一步も出ない」と笑つて語られたことが有つた。……先生は講義のある日は必ず研究室に坐し、然らざれば自宅の書齋に在るのを常とされたらしい」(第2巻解説)と追想し、学問に専心する青木の態度を礼賛している。

写真は、昭和49年、本学附属図書館開催の青木文庫特別展のもの。



資料を手に取る小川博士、山本和義先生

[31] 青木艶子夫人・中村喬氏

昭和49年、本学附属図書館開催の青木文庫特別展観で。前列中央が青木艶子夫人、その右隣が青木正児博士の次男・中村喬氏。



昭和49年の青木文庫特別展観記念写真

[32] 水谷眞成

(1917-1995) 朝鮮の元山に生まれる。京都帝国大学文学部に入学、倉石武四郎・青木正児などに学ぶ。「倉石先生からは学問の厳しさを教わったが、青木先生からは学問の楽しさを教わった」というのが、先生の口ぐせであった(慶谷壽信「水谷眞成先生の横顔」『中国語史研究』所収)という。大谷大学助教授を経て、昭和33年名古屋大学文学部(中国文学研究室・中国語学)に転じ、教授。昭和54年、仏教大学教授に。この間、昭和49年、水谷の積極的な働きかけで、青木の旧蔵書・資料が一括して本学の受贈となった。『青木正児全集』第8巻の解説は、水谷の手になり「青木正児先生の名物学」と題される。この中で、「目に触れ耳に入るもの総てが筆になり、書を読み物を考えることの楽しみを身を以て示された先生」と、その敬愛の念を綴っている。著書に、『大唐西域記』(平凡社)、『中国語史研究：中国語学とインド学との接点』(三省堂)などがある。青木文庫特別展観記念写真の前列左端。

参考文献：水谷眞成「青木正児」(江上波夫編著『東洋学の系譜』所収、大修館書店、1992年初版)

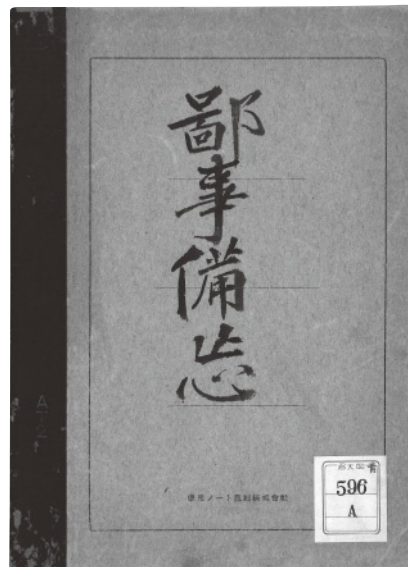
[33] 今鷹 眞

昭和9年(1934)、中国・上海生まれ。昭和28年、京都大学文学部入学。中国語学中国文学を専攻し吉川幸次郎、小川環樹の薫陶を受ける。昭和42年、名古屋大学教養部講師に着任。昭和46年同文学部助教授、昭和53年同教授、平成9年同大学を停年退官。今鷹には、既成の枠組みを越えた先秦から漢代にかけての文章史の構想があり、従来の学問領域では哲学に属する先秦諸子の文章、史学に属する歴史書をも包含して、その解明にあたった。表現形式を追究することによって内容のとらえ方も変化し新しい意味が発見され、従来の研究に変更を迫ることにもなった。また、『史記』『漢書』を始めとする史伝文学における正確な読解に基づく研究は、史書全体の構造を解明し、文章史の上での意義を確定していくものだった。これらの文章を総合的に解明することは中国の文章そのものの本質に迫ることであり、本格的に着手されることのなかったこの課題において、今鷹の業績はその先鞭となった。主著に『諸子百家』、翻訳書に『司馬遷』(バートン・ワトソン著)、訳注書に『史記列伝』、『史記世家』、『正史三国志』、『唐詩選』等がある。青木文庫展観記念写真の前列右端。

IV 青木正児の名物学

[34] 「鄙事備忘」

「鄙事備忘」の冒頭に「昭和二十年四月初旬起」と記されており、青木の執筆の始まる時期と認められる。このA5判(148×210mm)の大学ノートに記されたのは、名物学に関する覚書である。全編にわたって食物、とくに菓子に関する内容が大半を占めている。「菓子、山川」(No.81)の項目に「△之を中田勇次郎君に聞く、此菓子はカルカンと白雪糕の中間のやうな質のものなり」とのメモがある。のちに青木は『中華名物考』自序の中で、概略次のように記している。一昭和十六年頃から、「麗澤叢書」に収める中国の名著の翻訳にあたり、それを担当する学生諸氏から名と物に関して質問をうけていた。奥村伊九良君からは「籐墩」(籐製の円形腰掛)という物についての質問があった。自分もいろいろ調べたが、なかなか適切な解釈を見出せなかった。その折、中田勇次郎君が担当していた「考槃餘事」起居器服箋に、その説明が見つかった。一このような経緯があつて、のちに青木は中田に菓子の質問をしたのであろう。

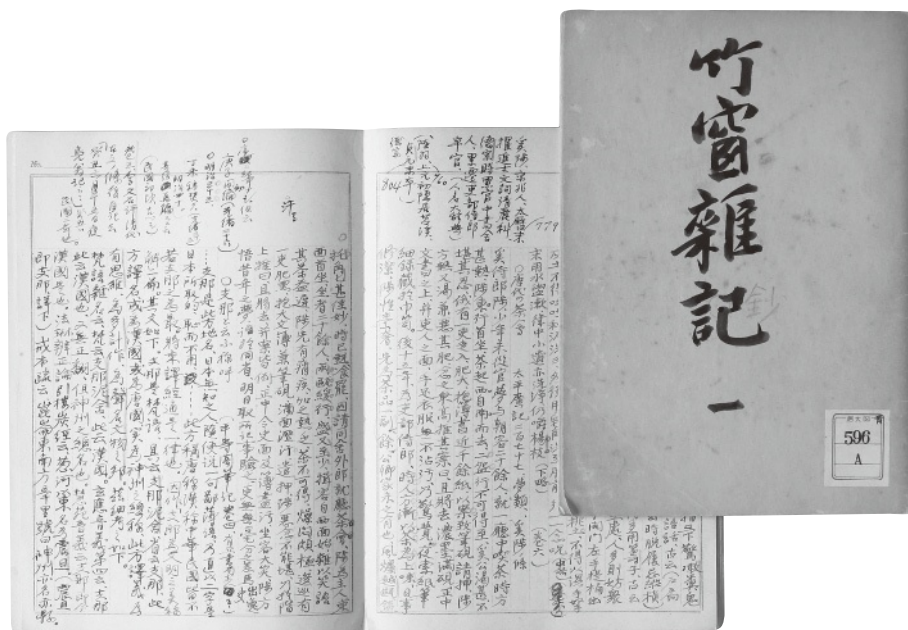


「鄙事備忘」

[35] 「竹窓雑鈔」(一)(二)

「竹窓雑鈔」(一)の原題は「竹窓雜記」だが、朱書きにて「鈔」に訂正されている。青木の『琴棋書画』に「竹窓夢」という章があるが、これは京大時代の師友の思い出話である。したがって「竹窓」とは京大の意味と推測される。ノートの冒頭に「鄙事備忘續編也 昭和二十一年七月三十一日起」と記されている。このA5判の大学ノートに記されたのは、「鄙事備忘」に続き名物学に関する覚書であり、食物関係の内容が多い。「いわば「鄙事備忘」の続編である。「桔梗屋菓子銘」(No.016)の項目に、中田勇次郎からの質問が附されている。名物学をめぐる師弟問答がここにも見られる。なお食物と関連して「電気パン焼き器」の項目に、「久しく米穀の配給がなく七月十二、三日より殆ど毎日三食自家製パンを食す」のメモも残されている。当時の食料事情も、青木が飲食名物研究を重視するようになった一因だった(『中華名物考』自序に言及)。

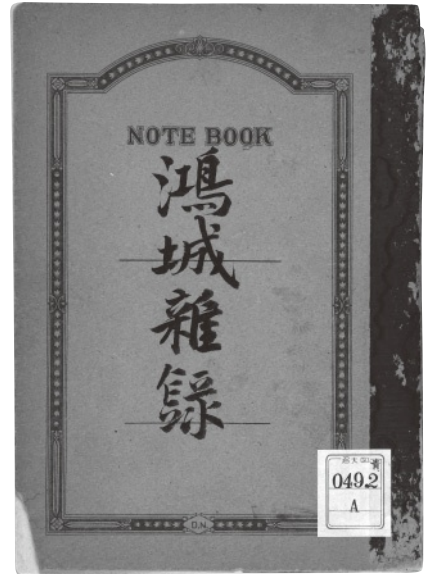
「竹窓雑鈔」(二)の冒頭に「昭和二十一年八月二十八日起」と記されており、「竹窓雑鈔」(一)とは一ヶ月の間隔である。このA5判の学生ノートに記されたのは、「鄙事備忘」「竹窓雑鈔」(一)と同じく名物学に関する覚書であり、内容もほとんど食物に関する記述である。青木の『中華名物考』自序によると、京都大学退官の前年、すなわち昭和21年4月から12月まで、最後の講義として「名物学緒論」が行われたという。「鄙事備忘」はこの講義の前期の準備分にあたり、「竹窓雑鈔」(一)(二)は後期のそれにあたる。



びっしり書き込まれた「竹窓雑鈔」(一)(二)

[36] 「鴻城雑録」

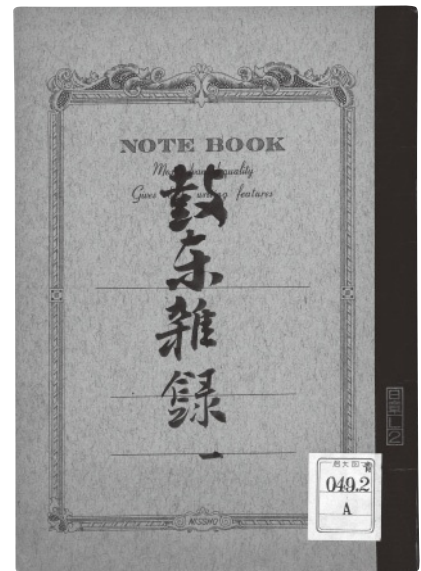
「鴻城雑録」の冒頭に「昭和二十五年四月起」と記されているので、これは青木が昭和25年1月に山口大学に赴任してから、かの地で書かれたことが分かる。このA5判の学生ノートに記されたのも、名物学に関する内容である。食物の内容もあるが、食事関係の調度品や礼儀作法などの内容も見られる。



「鴻城雑録」

[37] 「鼓東雑録」一

「鼓東雑録」一の執筆時期は記されていないが、「鴻城雑録」の続編と考えられる。青木の随筆「鼓東隠居」（『琴棋書画』）によると、昭和29年3月上旬に一度居を移したことがあり、「地は鼓の滝の東に在るを以て、我が寓を鼓東隠居と称した」と記されている。また、このA5判ノートの最初の項目である「大清文典」（原名「文学書官話」Mandarin Grammar）に「昭和三十年三月、借閱村上君蔵本」と記されており、青木が山口にある鼓東の寓所に移って翌年に記されたと推測される。ただし、このノートには主として楽器・服飾・塩・酒などの名物学関係が記されるが、わずか17頁で筆を折っている。



「鼓東雑録」一

[38] 「借読鈔存」(二)～(六)

「借読鈔存」(二)の執筆時期は不詳だが、昭和20年7月1日以前に書き留められたものと推測される(次の解説を参照)。このB5判(182×257mm)ノートに記されたのは、三種の書物の内容である。「燕台筆録」(学海類編本)は主に中国風俗習慣について、「飛鳧語略」(学海類編本)は主に骨董や文房などについて、「故事類苑」飲食部は主に飲食関係についての記述である。なお「借読鈔存」(一)は欠。

「借読鈔存」(三)

これもやはり執筆時期は明記されないが、ノートの最後に、戦時中食料に関する感想を記した日付が昭和二十年七月一日となっているので、「借読鈔存」(二)(三)はそれまでに写されたことがわかる。「借読鈔存」(三)は、(二)と同じくB5判ノートであり、冒頭には「借読鈔存」(二)の「故事類苑」飲食部の内容を続けて記述する。「借読鈔存」(二)の続編にあたる。このノートは、「故事類苑」、「学林」、「堯牖間評」、「北戸録」、「事物異名録」、「筍譜」、「林泉結契」、「沈氏農書」といった書物からの筆録である。

「借読鈔存」(四)

執筆時期は不詳だが、昭和21年頃と推測される(次の解説を参照)。B5判ノート(B4判原稿用紙を二つ折りにして糸で綴じたもの)に記されたのは九種の書物。すなわち「老圃良言」「饌史」「東漢試茶考」「二六功課」「撰生要語」「花裏活」「養小録」「馬氏日抄」「園冶」である。このノートには「饌史」「東漢試茶考」などの飲食関係の内容のほか、幅広い内容を書き留める。たとえば、「老圃良言」は野菜や果樹の「種植法」に関するもの、「撰生要語」は養生に関するもの、「園冶」は造園に関するものである。

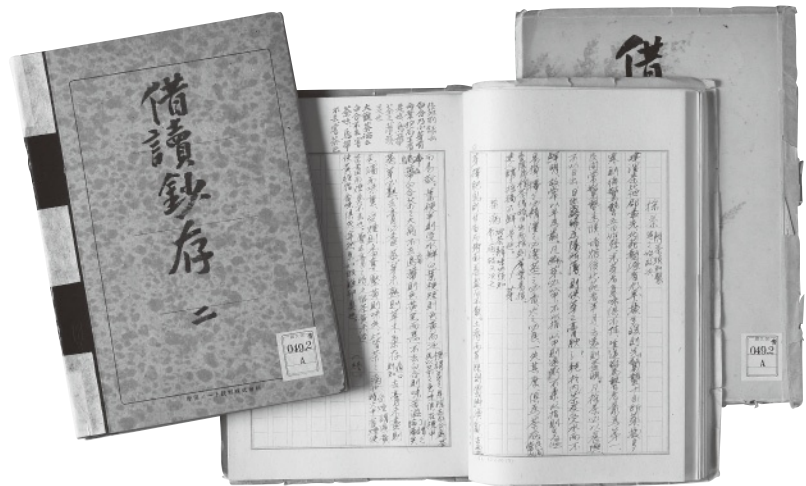
「借読鈔存」(五)

「借読鈔存」(五)はB5判ノート(B4判原稿用紙を二つ折りにして糸で綴じたもの)で、次の五種の書物—「東斎膳語」「宸垣識余」「舜水朱氏談綺」「重編群書事林広記 癸集」「茄草編」が記されている。その中の「舜水朱氏談綺」には、「……頃者余菓予落雁の名義を考ふる資料にこの書を借閱し、因て此巻を見出し得て喜び禁せず、遂に暑気を凌いで病餘全巻を抄寫す。昭和二十一年七月二十五日朝 正兒識」との感想文がある。また、これに関連し『青木正兒全集』第10巻「年譜」に「二十一年(六十歳)多病、春より秋に至るまで臥中に在り」との記述があることから、「借読鈔存」(四)(五)は、この病気の間書き留められたことが分かる。その内容は幅広く、いわゆる「雑学」の類が多い。たとえば「重編群書事林広記 癸集」には、いろいろな物の作り方—(酒や酢などの作り方)や、保存法などの内容が書き留められている。

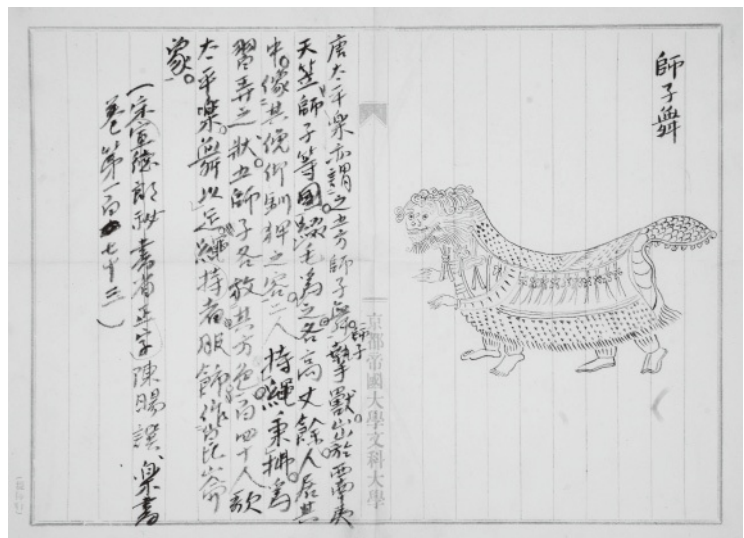
参考文献：渡邊幸彦・張小鋼『名古屋大学青木文庫所蔵「鼓東雜録」「借讀鈔存」について』(『名古屋大学中国語学文学論集』第七輯)

「借読鈔存」(六)

これも執筆時期は不詳。青木の病が快復したのち筆録されたと推測される。ちなみにその直後、昭和21年7月31日に「竹窓雜鈔」(一)が書き起こされ、翌8月に「竹窓雜鈔」(二)が書き継がれている。青木は翌22年には再び積極的に著作の発表を行うようになることなどをあわせ考えると、おそらく「借読鈔存」(六)は昭和21年~22年の間に書き留められたものであろう。「借読鈔存」(六)には、「居家必用事類全集」と「易牙遺意」二冊の本の飲食に関する内容が筆録されている。



旺盛な学問への情熱—「借読鈔存」(二)~(六)



「獅子の図と研究ノート」

●コラム (6) : 「名物学に関して」

青木ノートは全部で十二冊ある。そのうち最も古いノートは「蓬廬雜記」で、青木の研究課題のメモ集である。また『講書雜録』は、青木が講義するとき用いたメモである。この二冊は名物学とはあまり関係がないので、今は省く。

残りの十冊はすでに個々に解説を掲げているが、ここでは全体を通して青木の名物学についてもう少し考えてみたい。

一、青木名物学の成立

青木の名物学については、自著『中華名物考』（春秋社、昭和34年6月刊。同じく春秋社『青木正児全集』第8巻所収 昭和46年6月刊）自序に詳細な説明がある。また、『青木正児全集』第8巻には、水谷眞成（名古屋大学元教授）の「青木正児先生の名物学」が、『華国風味』（岩波文庫）には、戸川芳郎（東京大学名誉教授）の適切な解説がある。よって、ここではこれらの資料を参考にしながら、青木名物学の成立過程および特徴をスケッチ風に紹介する。

いま分かりやすく青木名物学を紹介するために、その成立過程を三つの段階に分けてみよう。

第一段階—「胎動期」

すなわち、京大在学中および東北大学在職中の時期であり、いわゆる「風俗研究」の時期でもある。『中華名物考』自序によると、青木は京大在学中、「専攻の支那文學の理會を助ける爲に、中華の風俗を知る必要を感じて、折々研究室で上海出版の『點石齋畫報』を楽しみつつ閲覽し」たり、また休暇帰郷中には、『清俗紀聞』（13巻本、寛政年間・長崎奉行・中川忠英編）を一冊欠けていたにもかかわらず、「飛び付いて買つて來た」。さらに江戸時代の山東京伝の『骨董集』、柳亭種彦の『還魂紙料』、喜多村信節の『瓦礫雜考』『筠庭雜考』などの書に、「古圖を徵引して昔の風俗器物を考證してゐるのに心を惹かれて、中華の風俗を研究するにも、一法として當に此れを學ぶべきであると痛感し」たという。

そこで、当時東北帝国大学の助教授だった青木は、大正14年、北京遊学の際に画工を物色し、『北京風俗図譜』を作らせたのである。前掲の中川編『清俗紀聞』の南方（浙江、福建）風俗に対し、北方の内容を補完するという意味もあった。『北京風俗図譜』のほかに、青木はまた『新春画冊』、『祭礼紙様』などの風俗関係の資料も集めている。これらのものは「風俗研究」でもあるが、「名物研究」の要素がすでに含まれているともいえる。

昭和16年に出版された『江南春』には、大正15～昭和13年の隨筆をまとめた「竹頭木屑」が収録されるが、その中の「幌子」「鼻煙」なども名と物の研究に関わる。

第二段階—「始動期」

すなわち、青木が京大に転任して三年目の昭和16年に、中華文化の普及を目的とする「麗沢叢書」を出版する際、学生諸君から名と物に関する質問を受けたのがそもそものきっかけだった。たとえば、「籐墩」や「桐油脚」などに関してである。質問に対し青木も一緒に調べていくうち、「名物学」を重視し始めるようになるのである。

「桐油脚」は、すぐには解決がつかなかったが、のちに昭和19年に「名義瑣談」として発表している。さらに、昭和19年～22年の論文を一冊にまとめて出版したのが、『華国風味』（弘文堂、昭和24年刊）である。青木は「これが私の名物學建設の第一歩であつた」と位置付けている。

第三段階—「形成期」

すなわち、青木の名物学の理論建設とそれに伴う実証研究の時期である。昭和21年4月～12月、京都大学で「名物学緒論」と題して講義を行い、のちにこれを訂正・補足して九州大学で「名物学通論」と題して講義。以後、山口大学・立命館大学でも同様の講義を行っている。そして昭和33年秋、青木はそれまでの講義を節録という形で、「名物学序説」と題して『中華名物考』（春秋社 昭和34年6月刊）の巻頭に置いた。この「名物学序説」が青木名物学の理論を述べたものとなる。これについて青木は「私の謂ゆる中華名物學の體系を公にすることとした次第である」と、その自信を示した。

ちなみに、昭和30年代に、青木の著書『琴棋書画』（春秋社 昭和33年）、『隨園食單』（六月社、同年）、『中華飲酒詩選』（昭和35年）、『酒中趣』（筑摩書房 昭和37年）、『中華茶書』（春秋社 同年）が相次いで刊行され、青木名物学の豊かな世界が築き上げられることとなる。

二、青木ノートと名物学との関わり

十冊の青木ノートについては、すでに解説に述べたように名物学に関する内容が大半を占めているが、とりわけ飲食関係の内容が目立つ。その内訳は次のようである。

①菓子関係、②料理関係、③酒関係、④茶関係、⑤その他

ここでは、飲食内容に限定して青木名物学との関係を見てゆく。

1. 『華国風味』(弘文堂 昭和24年)は、「青木正児の名物に関する最初の単行本である」(戸川芳郎解説)。『華国風味』の中に「落雁と白雪糕」の一文がある。また青木ノート『鄙事備忘』には、「白雪糕の拵え方」(『さつま芋お料理』)、「御所落雁」、「落雁及白雪糕類の諸国名産」(鈴木宗康『諸国名物菓子』)などの条目がある。『華国風味』で白雪糕製法について論じる際、青木は「近時日本における白雪糕製法の一例を挙げてみやう、手近に適當な資料がないので、荊妻所藏の『さつま芋お料理』という書の附録から引く。…」と、ノートの筆録をそのまま引用している。また落雁の創製について論ずる時も、「その一説は鈴木宗康氏の『諸国名物菓子』に、富山縣井波の名物、御所落雁を製する家の言ひ傳へとして大約次のやうな由來を述べてある…」と、ノートからそのまま引用する。青木のノートはこのように利用されたのである。

2. 『酒中趣』は、青木の二冊の単行本『抱樽酒話』(弘文堂 昭和23年)、『酒の肴』(弘文堂 昭和25年)をあわせ、それに「酒顛」を加えて一冊として出版したものの。『酒中趣』には「抱樽酒話」一酒茶論がある。また青木ノート『竹窓雑鈔』(一)には、「酒茶論資料備忘」という条目がある。それはさらに次の四つの項目からなる。

- (1) 敦煌綴鎖。酒茶論断簡。
- (2) 群書類従。僧蘭叔述酒茶論。
- (3) 醒睡笑卷五、上戸門ニ酒の論アリ。
- (4) 江戸末期に酒茶論と題する小冊あり、蘭叔の文を和譯してや、増補す。

青木は「酒茶論」の冒頭に「上戸と下戸と趣味相容ざるは古今同様である。されば昔僧蘭叔は『酒茶論』二巻を戯作して兩黨を討論せしめてをり」と述べ、ノートのメモを踏まえた議論を展開する。また(3)『醒睡笑』を取り上げ、上戸と下戸を議論したりしている。

なお、『竹窓雑鈔』(二)に「酒餅論」上下(徳富蘇峰、成實堂叢書ノ内)という条目がある。青木はこのメモを踏まえて、「其後餅を提げて正面から酒に對抗して討つて出たものがある。其れは著者未詳の『酒餅論』二巻で、徳富蘇峰氏刊行の『成實堂叢書』に複製本が収められてゐる」(「酒茶論」と指摘する。

3. 『中華名物考』は、『鄙事備忘』、『竹窓雑鈔』(一)(二)、『鴻城雑録』、『鼓東雑録』、『借読鈔存』との諸関係が認められる。たとえば「柚の香頭」条は、『借読鈔存』(五)の「舜水朱氏談綺」、『鴻城雑録』の「柚の説」(田中長三郎の二篇論文の抜粋)が材源となっている。また「唐風十題(四)卓袱料理」の附録、「薩摩侯の卓袱料理」は、『鴻城雑録』の「卓袱料理」(古賀十二郎編『長崎市史風俗編』衣食住第二節料理)をそのまま引用する。

4. 『随園食單』の「五、猪肉の部(30)醬肉」の注(1)に、「明代の『居家必用事類全集』を見ると、醬の作り方は種々有るが、『麪醬』は白麪(うどん粉)を材料にしたものである」とある。一方、青木ノートの『借読鈔存』(六)に、『居家必用事類全集』の「諸醬類 造肉醬法」の条項がある。また「七、鳥類の部(15)黄芽菜炒鶏」の注(2)に、「明代の『居家必用事類全集』には『大廚大料物』『調和省力物料』の處方を載せ、清代の『養小録』には『葷大料』『減用大料』『素料』の處方を載せてゐる」とある。一方、『借読鈔存』(六)に、『居家必用事類全集』の「包廚雜用 大廚大料物・調和省力物料」の条項があるが、そこに『借読鈔存』(四)にある『養小録』の条目に対応するのがないものの、『養小録』の内容を熟知していることが分かる。青木は『随園食單』の「訳余贅語」で、「私には寧ろ康熙年間の顧清仲著『養小録』の方が氣取ったところが無く、趣味も廣いので、好ましく愛讀せられた。この本なら、譯して世に廣めて見たいと思ふ希望は抱いてゐたが、『食單』を譯さうなどとは思ひも寄らなかつた」と述べ、『随園食單』より『養小録』の方を好んだ様子がうかがえる。

V 青木正児の諸研究

[39] 『新訳楚辞』 — 訳詩は難し

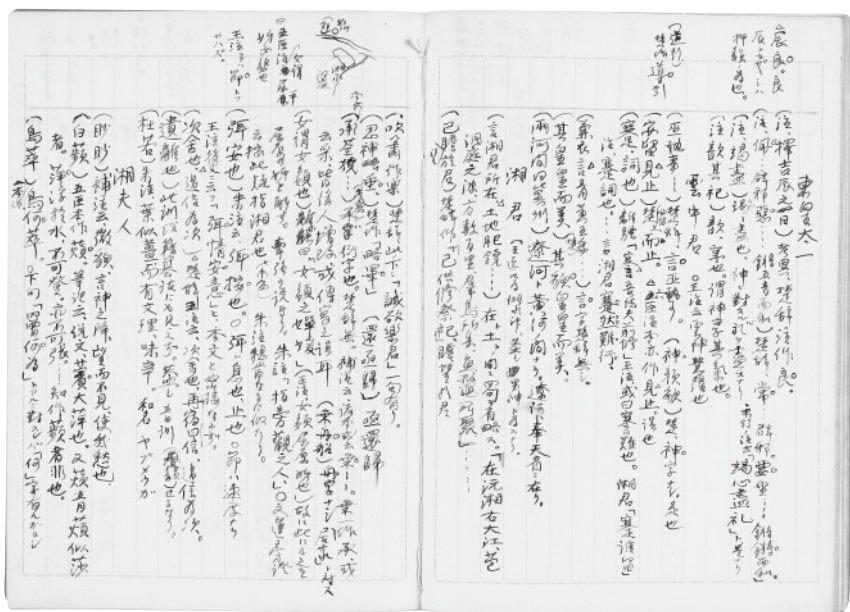
「造化は萬物に數限り無き不平均を與へた。其不平均が屈曲參差した所に人生の甘味はある」と青木は言う。それは青木自身の感慨そのものでもあっただろう。晩年の『新訳楚辞』執筆を支えたのは、「不平均」を与えられた屈原の、苦悩と人生の甘味を受け止めようとする思いへの共感ではなかったか。

訳注へのこだわりもあったようである。歌人土岐善麿に宛てた書簡に「漢学者流は訳詩に閉口して朗詠風に碎けたる訓読を以て之に充つこと流行致候。…迂生は翻譯に甲を脱ぎて此節は解釈との中間程度として易きに就き居候」と述べる（土岐『楚辞解』苦心の一面『青木正児全集』第10巻月報X）。漢字文化の可能性を追い続けた青木の謙虚な姿勢が垣間見られる。それはまた、中国の古典を日本の国民文化として根付かせようとする意欲の表れでもあった。この『楚辞』訳詩への挑戦は、目加田誠の『楚辞』（岩波新書）へと連なっていく。

青木直筆のノート『講書雑録』を見ると、『楚辞』（宋・洪興祖補注、一今回展示、朱点多数、青木による補訂）『五臣注文選』をはじめとする注釈書を丁寧にたどりながら考証を進めている。所々朱筆が加えられているが、特に朱の目立つ所が「招魂」中の「激楚」語義の箇所である。

『新訳楚辞』本文においては、「楚國の歌舞は急激であるから之を激楚と謂ふのらしい」と結論づけながらも「よくわからない」と付け加えている。不確かな部分については断定をしない所にも、やはり青木の思慮深さを窺い知ることができる。

『楚辞』に関しては、「楚辞九歌の舞曲の結構」「読騷漫録」の二文もある。戯曲の視点に基づく考証が盛り込まれ、「読騷漫録」に至っては文章自体が戯曲調で書かれている。単に内容が興味深いというだけではない。戯曲研究に新境地を拓いた青木の新しい発想のあり方が、ここにも提示されていて、まことに面白い。青木と『楚辞』との関わりについては、田中謙二「解説」（『青木正児全集』第4巻）がよくまとまっている。



『読騷漫録』『楚辞』の部分



『楚辞』（宋・洪興祖『補注』の書き込み）

[40] 『文心雕龍講疏』—最後の講義

『文心雕龍』は、梁・劉勰の文芸批評の名著。中国文学理論史上の画期的著作。『文心雕龍講疏』は、華北大学編集員の范文瀾が編集し、中華民國14年10月1日新懋印書局より出版したもの。昭和39年、青木は立命館大学で『文心雕龍』の講義を担当、『文心雕龍講疏』は標注が詳しく、講義の準備のよい参考になったと想像される。目次に朱の丸印が付いた篇は、「辨騷」「明詩」「樂府」「詮賦」「封禪」「麗辭」「才略」など、これらの篇を中心に講義を行ったものと推測される。このほか丸印は付いていないが、「神思」「風骨」「原道」等の篇章に朱点が多く打たれている。同年12月2日、青木はその講義を終えるや、階段途中の踊り場まで来て昏倒し、急逝した。当時、青木の受業生だった清水凱夫に「青木正見先生のこと」(『青木正見全集』第10巻月報X)があるのも参考になる。



『文心雕龍講疏』

[41] 『李白』—絶筆の書

本書は青木の絶筆で、昭和40年5月に集英社から出版された。「編年」と「分類」の上下両篇で構成され、李白の生涯、また李白の詩風に略年譜が付けられている。「読者が詩人の生活や思想の動きを知る便宜の爲」、李白の詩が年代順に169首編次され、さらに分類ごとに李白の性格・思想等がよく表現された55首を選ぶ。古体詩の換韻の示す意味まで詳しく指摘、「鑑賞」を大事にした青木ならではの訳注書となっている。その「凡例」に掲げる所によれば、この時、青木が主に使用したのは延宝の和刻本「分類補注李太白詩」二十五巻(元・蕭士贇補注)である。青木文庫に所蔵し、彼自身の朱点が多く残る。今も青木のこの訳でない、李白を読んだ気がしないとの声もある。沓掛良彦である(「京都新聞」05.7.28)



李白関連の書籍

[42] 宋詞研究

「中国音楽史の最も基礎的な事からして楽律を精密にきわめたのは、我が国では博士をもって最初とするのではなかろうか」（小川環樹「解説」『青木正児全集』第2巻）と評されるように、青木は音楽にもたえず関心をよせていた。それが文芸と結びついた時には、ごく当然のように音楽と一体のものとして捉えようとした。たとえば、宋詞研究への意欲的な姿勢がそれを物語る。『支那文学思想史』の「詞説」の項で、沈義父「楽府指迷」、張炎「詞源」を踏まえた論を展開したり、また『支那文学概説』の「評論学」の項でも、この二書を掲げて、「並に作詞の要法を論じて参考となるべきもの多く、後者は詞の音楽的方面にまで論及して居る」等という。この二書はいま青木文庫に蔵せられている。さらに『同概説』の「詞曲」の項では、詞の研究資料の主たるものとして、明以降のものから拾う中に、清の秦恩復編「詞学叢書」を掲げるが、これも青木蔵書にある（朱点多数）。青木の宋詞研究の芽は、後年、東北大学教授となる村上哲見により開花することになる。

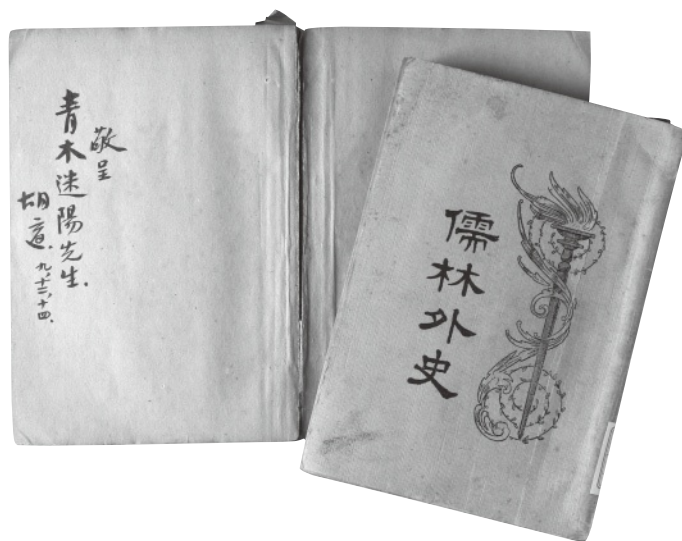


宋詞への関心も深かった

[43] 「儒林外史」（民国9年 1920 上海・亜東図書館）

呉敬梓（1701-1754）著。科举に四苦八苦する儒者たち（儒林）の偽善や愚かしさを批判した小説。本書は、当時、文学革命の旗手として活躍していた胡適（1891-1962）からの直筆署名入り贈呈本。じつは、本書をいち早く世に紹介したのが、この胡適だった。青木は胡適の強い影響を受けながら、近代的中国文学の道を切り開いていったのである。

「儒林外史を読む」（大正10年、『支那文学論叢』所収、『青木正児全集』第2巻）という青木の論文には、「上海の亜東図書館から…本書が昨年十二月世に現はれた。…私は是を読んで漱石の「吾輩は猫である」を聯想する」とある。日本の当代文学と比較する同時性感覚にもすぐれていた。なお本書は、青木が江南の旅の際、「旅行案内に代へて携帯した」（『江南春』）もの。小説の舞台となったのが、杭州や南京だったことから、ガイドブックとして持ち歩いた。『江南春』には、たとえばこう記される。「吾が呉敬梓は云つてゐる一此の西湖は乃ち天下第一の眞山眞水の景致である。云々と」。青木の朱点多し。



胡適の直筆署名入り贈呈本—青木流「江南の歩き方」

●コラム (7) : 「民謡、童謡、時代の息吹 —週刊『歌謡』は言葉の泉—

『歌謡』は、北大歌謡研究会出版、北大日刊課発行。北京大学の「北大日刊」の附刊として北大歌謡研究会が発刊したものである。『歌謡』は週刊で、毎週月曜日に八版（8頁）乃至は四版（4頁）ものとして、当初は無料で配布していた。様式は縦書き三段。民国11年（1922）12月17日に第1号が発行され、民国13年（1924）3月23日の第48号をもっていったん終刊。継続後誌は『歌謡週刊』と名を改め、民国13年4月6日に第49号（この号からは横書き2コラム）として継続発行され民国14年6月28日、第97号をもって終刊した。更に継続後誌として、『歌謡』（2巻第1期）が民国25年（1936）4月から再刊、民国26年（1937）6月（3巻第13期）まで発行された。

青木文庫所蔵の『歌謡』は原本で、簡易和綴じ装幀され、『歌謡週刊』と黒墨で直接表紙に書かれている。第1号から第48号まで右開きで、横書きに変わった『歌謡週刊』第49号のみは天地を逆にして綴じられており、そこで原本は終わっている。この原本は現地で入手したものと考えられるが、青木が初めて中国に遊学したのは1922年（大正11）3月、36歳の時である。3月25日神戸港を出て、上海に上陸後、江南各地を遊歴し、5月26日には帰国している。この時、『歌謡』はまだ発刊されていない。青木が二回目に渡中したのは、1925年（大正14）、39歳の時、文部省の在外研究員として北京に留学する為であった。3月26日下関から出航し、釜山に上陸。朝鮮経由で北京入りしている。この時、『歌謡』は終刊していて、継続後誌『歌謡週刊』の刊行が始まっていた。現地でまとめて入手したとしたら、まず考えられるのは北京大学に保存してあったものを譲り受けたか、古書店で購入したか、或いは、誰かに委託して毎号保存しておいてもらったものを受け取ったか。留学中、1926年（大正15）40歳の時、3月18日に一度帰国しているが、4月6日、再び渡中した時は上海に上陸し、江南の地を中心に湖南にまで足を伸ばし、同年7月5日には帰国している。以上からすると、大正15年の一時帰国前には入手していたとみるのが妥当だろう。（その根拠は後述する。）

どのような経緯で青木が原本の『歌謡』を所有したかは俄にはつまびらかにし難いが、青木がなぜ『歌謡』に興味を示したかを考える上では、差し当たって支障のないものとせざるを得ない。ただ、なぜ第49号以降は所蔵していないのか、疑問が残る。

しかし、むしろ、ここで付言しておくべきことは、青木文庫に残された各種領収書の中に、北京の琉璃廠にある来薰閣（「来薰閣主人との交わり」の項参照）のものが少なからず残っているのだが、その内の一枚に「北平歌謡正續集 二本 一元」と書かれたものがあることである。日付は「十二月三十日」。年は未詳。青木文庫に『北平歌謡正続集』は所蔵されていないが、本書は現存する。いま、『民俗叢書』に収められているもので確認すると、正集には民国17年（1928）12月の序があり、続集の跋に（正集を出版して）以来この一年遅々として整理の続きができなかった、という旨の記述がある。NACSIS Webcatの書誌情報では、正集が1928年12月-1930年10月、続集が1930年とする（恐らく正集の表記は正・続あわせてのもの）。また、『民俗叢書』本では価格・出版社などの情報が全て除かれていてわからないのでふたたび同書誌情報で補うと、正集の価格は五角、続集の価格も五角とあるので、二冊併せて購入すると丁度一元となり、青木の領収書と帳尻は合う。同書誌情報によると、正集は雪如女士編、出版は北平・明社となっていて「明社叢書」という書誌リンクが張られているので、「明社叢書」というシリーズの中の一冊と考えられるが、「明社叢書」の全容については未詳である。続集の著者は、李薩、雪如となっている。『民俗叢書』本では正集に雪如女士編という記述が確認できる。続集も跋文を見る限り同一人物が書いているように見受けられる。序文に「私が北平の歌謡を蒐集する動機は、四年前に歌謡研究会の歌謡週刊を読んだことによって引き起こされたのです」（原文は中国語）と記されており、歌謡週刊への共感が示されている。青木も「歌謡」なるものに興味を持っていたからこそ『歌謡（週刊）』も所蔵しており、『北平歌謡正続集』も購入したことは確実であると言えよう。

さて、展示資料の『歌謡』第1号の要目は、1「歌謡週刊縁起」、2「發刊詞」、3「對於投稿諸君進一解」、4「民歌選録」、5「兒歌選録」、6「徵集歌謡簡章」の6項目からなっている。毎号多少の出入りはあるが、おおよそ毎号揃っている主要項目としては、①研究、討論、或いは、メッセージ性のある論文など、②民歌選録、③兒歌選録、④投稿、の4つである。発刊の辞によると、『歌謡』発刊の目的（北大歌謡

研究会が歌謡を蒐集する目的)は二つあり、その一は「學術的」、その二は「文學的」なものである、という。「學術的」というのは具体的には「民俗學」を指す。民俗学の研究は当時の中国にとって重要な学問領域だが、そのことに気づいている学者はまだ少なく、来るべき専門的な研究の発展に備えるべく、歌謡を蒐集しようというのである。ここでは、歌謡は民俗学上の重要な「資料」とみなされている。事実、中国民俗学の父とも称される鍾敬文は、郷里で教員をしていた頃、民間文学に興味を抱くようになり、民間に伝わる歌謡や民話を収集、整理し始め、それを『歌謡』に投稿している。『歌謡』がその「徵集歌謡簡章」にもうたっている通り、会員以外の積極的な参加を歓迎していた証左である。目的のその二、「文學的」というのは、文芸批評の観点から、歌謡を卑俗で価値のないものとしてではなく、国民の心の声が反映された文学作品とみなし、「民族の詩」の来るべき発展に資するものとして、広く興味関心を喚起しようというものであった。これは、『歌謡』発刊前史として歌謡の蒐集に関わってきた人物、具体的には、劉半農、周作人、劉復、沈尹默、錢玄同、沈兼士という面々を見れば自ずとその意図が知れる。五四運動の新たな文化思潮の影響を受けて設立された北大歌謡研究会の活動は、新文学運動とも連動している。

一方、青木は、自ら創刊に携わった『支那学』に「胡適を中心に渦いてゐる文學革命」を寄稿し、魯迅を日本でいち早く「発見」し評価し、新文学運動の気運をリアルタイムで感じとりながらも、『歌謡』の収集に関しては、刊行者たちの意図とは異なるところに興味を感じていたように思われる。それは青木が『歌謡』から童歌約120首を採り、それらを翻訳して『支那童謡集』として刊行したことからもわかる。後に『江南春』に収められ、『青木正児全集』第7巻にも収録されている『支那童謡集』は、大正14年から15年(1924-1925)にかけて東京・世界童話大系刊行会より出版された『世界童話大系』の第17-18巻『世界童謡集(上・下)』の下巻に収められている。この二巻の内訳と著作者を見ると、「諸国童謡集 / 竹友藻風編訳、独逸童謡集 / 茅野蕭々訳、佛蘭西童謡集 / 西條八十訳、露西亜童謡集 / 米川正夫訳、支那童謡集 / 青木正児訳」となっている。(因みに『世界童話大系』は東京・名著普及会から1988年12月に複製本が刊行されている。)青木はこの『支那童謡集』の凡例で「この譯歌は匆忙の間に筆を執つたため、推敲するに遑あらず、(中略)出版社の稿を促すこと急にして、身も亦將に江南尋春の旅途に上らんとして行李匆々の際である。(後略)」と言い、末尾に「大正十五年三月上旬 北京の客舎において」と記している。とすれば、青木はこの時より以前に既に『歌謡』を手元に置いていた、しかも、この訳本の執筆は北



これが『支那童謡集』のもとネタです

京留学中、一時帰国の直前だったということになる。

このことについて、小川環樹は「(歌謡研究会の) 会員たちは民間文学に強い関心を持ち、文学の底流の一つとして民謡や童謡をとりあげて研究していた。その仕事は開始されたばかりであって、理論も研究方法もまだ確立していなかった。第一着手として、まず歌謡を口頭伝承から採集したのであるが、その集録の外国人として最初の紹介者は恐らく青木博士であろう。日本では口承文芸の研究は早かったが、童謡や童謡を創作することのほうがさかんな時があった。大正期は正にその時期である。博士の翻訳は、この空気の中で『世界童話大系』の一部分として刊行されたのだが、当時の中国の学界の風潮に注意を怠らなかった博士の視野の広さは、ここにもあらわれている。そして博士にあっては、これらの資料への注目は俗語文学の歴史のあとづけの一環をなすことになる。」という見解を示している。それは確かにその通りである。

しかし、筆者はもうひとつの別の可能性を考えないではいられない。その可能性とは、青木は純粹に、また直感的に、民謡や童謡に言葉の調子やリズムの面白さを感じ取ったのではないか、それ故、『歌謡』や『北平歌謡集』に興味を示したのではないか、ということである。そのことは、この翻訳が日本語としてのリズムに配慮した訳文となっていることから窺える。青木が“文藝(文學と藝術)”を語るとき、そのすべからく満たすべき要件として、「^{リズム}節拍・^{メロディー}旋律・^{ハーモニー}和声」という要素を重視していたこととも合致する。

青木文庫に残された青木のメモには、大変興味深いものがある。それは三枚からなる手書きのメモなのだが、『小倉百人一首』の二條院讃岐、蝉丸の二首を書き付け、言葉ごとに線で結び、「不同」、「對」と書き込んである。また、「佐渡おけさ」、「江差追分」、「鈴鹿馬子唄」、「蜜柑の歌」、「伊勢音頭」、「ソーラン節」などの民謡や俗謡、果ては「まもれ 志んがう くるまも ひとつ」といった標語まで書き付けて、同じように線で結び、なにやらリズムの分析を考えている様子である。そして三枚目の最終行には、「此他調子よき謠ひものにハ此例甚だ多し」と記している。

また、青木は日本の古典芸能の造詣も深かった。その著作には、中国の詩歌のリズムや戯曲を論ずるとき、しばしば日本の義太夫や地唄、追分、馬子唄、子守歌、都々逸などになぞらえることがあることから、中国の“文藝”を考えると、青木の頭の中では常に「音(楽)」が切り離すことのできない要素として存在したことに気づかされる。その意味でも、『歌謡』が青木文庫に存すること、そしてそれを日本語としても詠むに堪える文体に移そうとしたことには、青木の文学研究者としての潜在的な意識を垣間見ることが出来ると言えよう。

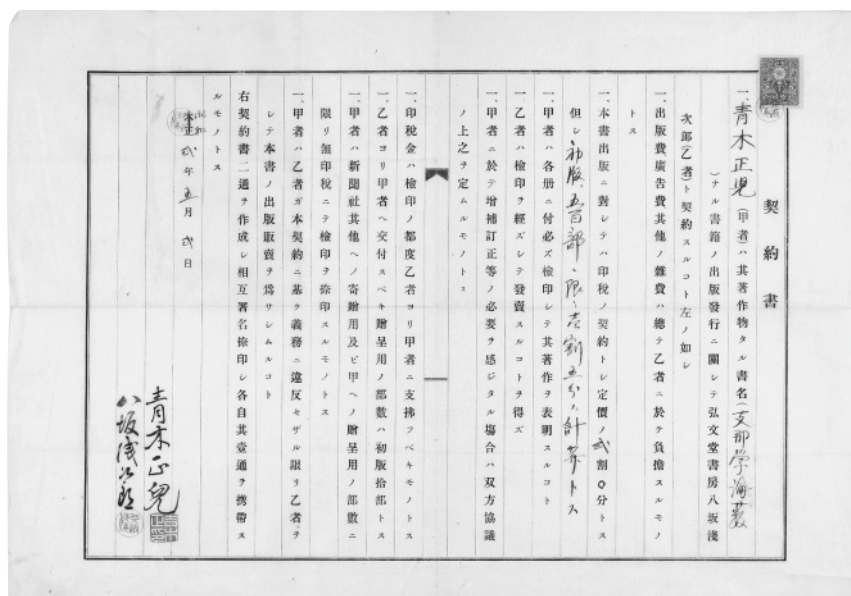
参考文献：「解説」小川環樹(『江南春』平凡社 東洋文庫 1972年初版 所収)

「和声の芸術と旋律の芸術」(『支那文芸論叢』所収 『青木正児全集』第2巻収録)

『北平歌謡集』(正・続) 雪如女士編(『国立北京大学中国民俗学会民俗叢書』36 婁子匡編 1971)

[44] 『支那文芸論叢』（昭和2年 1927 弘文堂）

仙台の移山書屋にて旧稿（おおむねは京都にいて『支那学』に発表したもの）を編集したもの。青木の文学論集の中では初期の代表作。その論著の特色は何よりも青木の清新さと多彩さにあった。それを吉川幸次郎は、「創見に富んだ文学史家である一方、犀利な文芸批評家であり、そして何よりも芸術家である」（『青木正見氏「支那文芸論叢」』『吉川幸次郎全集』第17巻）と評した。それまでの漢学臭とは一変して、近代的な視点からのアプローチが鮮烈な印象を与えたのである。しかも、一人で、文学史家も文芸批評家も芸術家もみな兼ね備えていた。『支那文芸論叢』はその人の論文集であるから、要約するのは困難だが（概要は、前掲吉川・解説を参照されたい）、ただ第一章「解衣般礴の芸術」に青木の姿勢は集約されているといえる。すなわち、「世に藝術ほど自由なものは有るまい。藝術は「無」から「有」を生ずるの道である。創造である、造物主と光を争ふの道である。…之に關して僕は『遊心』と云ふ支那一流の藝術論を提起して見たい。遊心とは藝に遊ぶの心である。…手近い例を擧げるならば、所謂文人畫なるものが貴ばれる所以も、此の遊心の尊い現れがあるからだ」という。この「遊心」から生み出された学問・芸術の世界が、青木学すなわち青木ワールドである。特別展のタイトルを「『遊心』の祝福」とした所以である。なお展示の出版契約書は、弘文堂との間に取り交わされたもの。



『支那文芸論叢』出版契約書

[45] 『支那近世戯曲史』（昭和5年 1930 弘文堂）

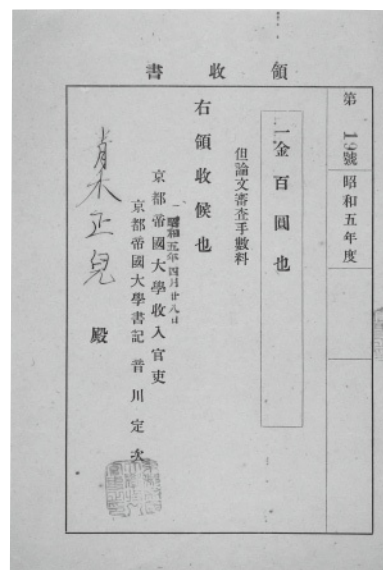
序の冒頭に「本著を作るは王忠愨王國維先生の名著『宋元戯曲史』の後を繼がんと志に出づ」とあるように、王国維『宋元戯曲史』に続く明清の戯曲史。青木の戯曲研究の一つの集大成であり、青木はこの著作で京都帝国大学の博士号を取得。その論文審査手数料の領収書、およびその出版契約書が青木文庫に所蔵される。

「宋元戯曲史が經に戯曲を述べたるに對して、是（*注：『顧曲塵談』）は韓に戯曲の組織を論じたるに梨園佳話と同種の物。ぢやが佳話は現代劇に關して述べてあり、塵談は金元から清朝の初期頃まで、つまり所謂元曲から崑曲までに至る諸曲に就て論じてをる。そこで此三書に加ふるに明清戯曲史を誰ぞが作れば、支那戯曲の全形は先づ經緯から一通りは明になる筈ぢや。其様な本が早う見たいなへ。」*1との自身のかつての言がその戯曲研究上の意義を物語っている。実際、発表されると中国でもすぐに注目され、早くも同年9月には陳子展「青木正見氏の『支那近世戯曲史』」が雑誌『現代文学』に発表され、ついで1933年に鄭震の節訳本、1936年には王古魯の完訳本が出版され戯曲研究に大きな影響を与えた。*2 中でも王古魯訳は好評を以て迎えられ、幾度も版を重ねた。青木文庫にも4種の版本を蔵する。

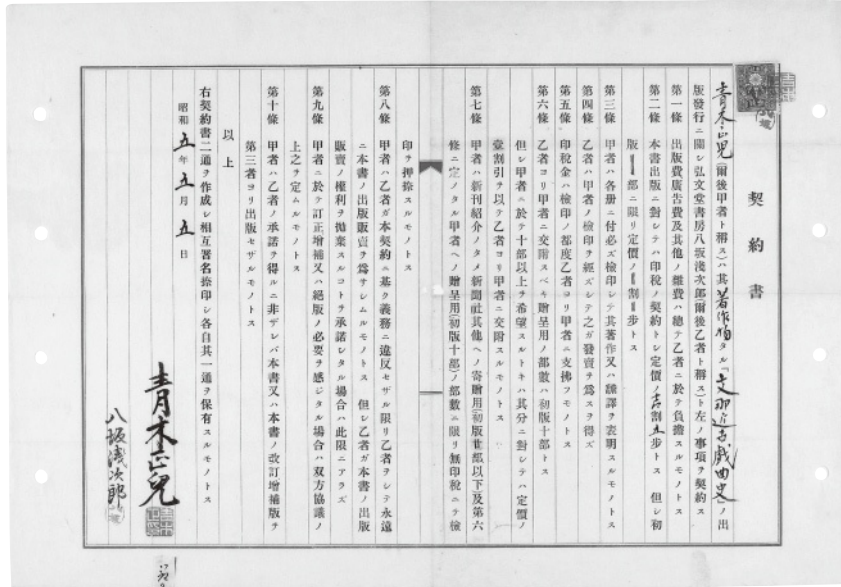
なお「序文原稿」の写真が、『青木正見全集』第9巻口絵に掲げられる。

*1 「伝奇雜劇評判の評判一実は『顧曲塵談』の御披露」（『冊府』6, 1917 『同全集』第7巻）

*2 汪超宏「一個日本人的中国戯曲史觀—青木正見《中国近世戯曲史》及其影響一」（『戲劇芸術』2001年第3期）



論文審査手数料の領収書



出版契約書

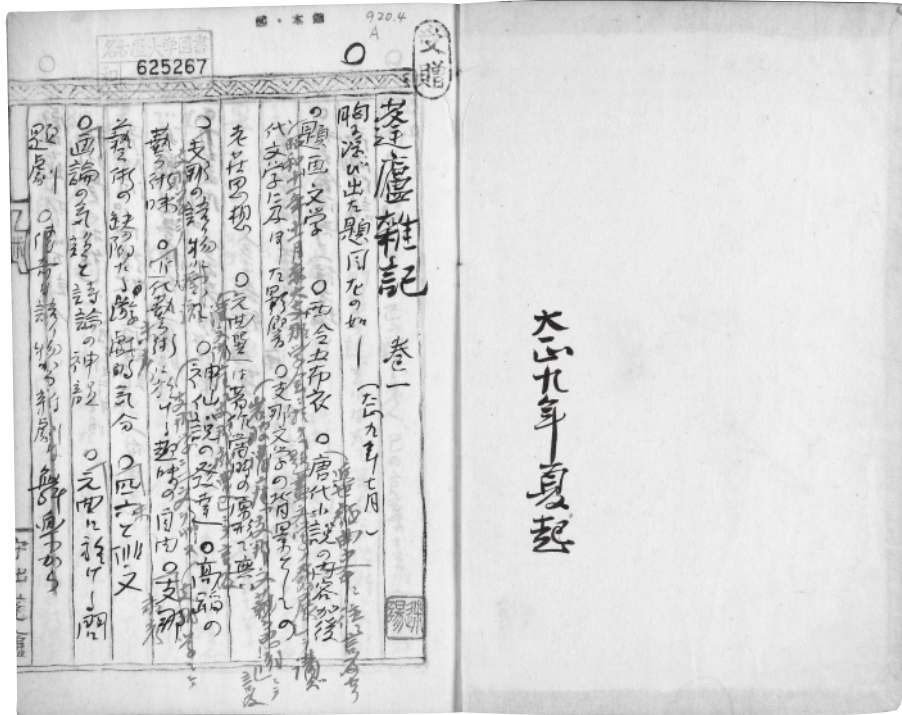
[46] 『元人雜劇』

昭和32年春秋社より出版。青木文庫には初初版本を所蔵。元の雜劇『貨郎旦』、『魔合羅』、『梧桐雨』の三作品の翻訳を取めたもの。うち『梧桐雨』については「『元曲選』本と『元明雜劇』本とが通行してをり…本文に多少の異同は有るが、『元曲選』本が整理が行届いてゐるので翻譯の底本とした。…『雍熙樂府』の中に此の劇の第二折及び第四折の曲文のみが收められてをり、是は大分文字の異同があり、時代が早いだけに元代の舊文に近いものと思はれるが、今は『元曲選』本で意味の通ずる限り文字の異同には餘り觸れないことにしておいた」とあるが、青木文庫蔵『元明雜劇』本の書き込みからも『元曲選』『太和正音譜』『雍熙樂府』と比較しながら読んだ様子が見て取れる。

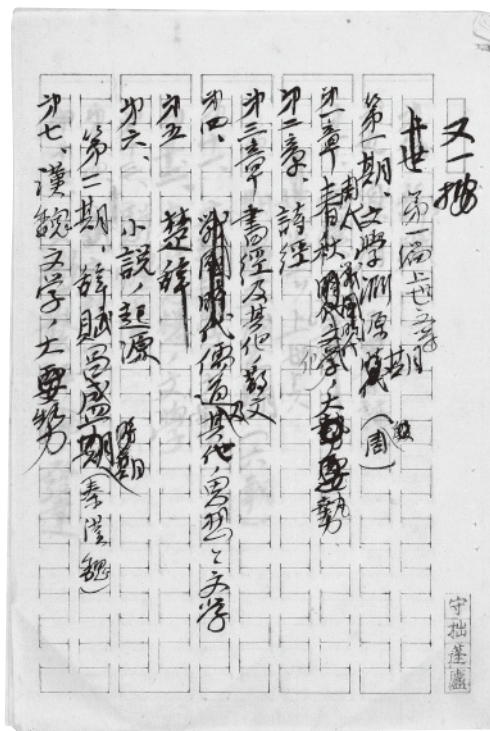
また『元曲選』本『梧桐雨』第二折【紅繡鞋】にメモが挟まれており、ライチを描写した「端的個絳紗籠單水晶寒」なる文に注して「予囊に之に註して其の肉紅なりと為せしは誤なりき 絳紗は殻なり、肉は白なり。所謂水晶寒なり。余者乾したるを食ひて鮮者を見ず、故に誤解せりき 乾者は殻は茶褐色にて肉は濃紅色なり。(やゝ黒みを伴ふ)」と記している。この箇所の『元人雜劇』の訳は「さながら紅絹に包みし水晶の玉」となっており、注には「荔枝は外に硬く薄い皮をかぶつてゐるが、熟すると赤くなるので之を絳紗に喩へたのである。皮を剥くと内に白く半透明の果實が丸い核を包んでゐる。之を水晶に喩へたので、「寒」とは果汁の冷やりとした感觸である。」とあるから、このメモの内容が反映されていることがわかる。このメモには「昭和二十六年八月三日記」と記されている。一方、『元人雜劇』は一度出版しようと序(昭和23年9月付)まで付けたものの、出版事情により昭和32年2月になってようやく出版できたという経緯があるのだが、このメモと訳文より一旦序を付けた後も実際に出版されるまで適宜手を入れていたものとわかる。

[47] 「蓬廬雜記」

和綴じ、毛筆写一冊。「大正九年夏起」とある。朱筆で欄外に「胸に浮かび出た題目左の如し」（大正9年7月）とあり、「題画文学」「西冷五布衣」「唐代小説の内容が後代文学に及ぼした影響」「支那文学の背景としての老荘思想」云々が列挙される。「以上大正十三年東北大へ赴任前ノ雜記也」と記される。さらに「金瓶梅ト水滸伝ノ交渉」については、「是は蓋し昭和十二年度東北大学特講小説瑣談の一項目とす」などと記される。青木の研究の構想を示したものの。



「蓬廬雜記」の論文構想



自筆原稿一次はどんな論文にするか

●コラム (8) : 「青木正児という原点 —中国文学評論・批評史の視点から—

近代中国文学の先駆者として、青木正児の業績は数々の称賛に包まれている。いわく、「五四運動以後の中国現代文学の日本における確実に最初の紹介者、金冬心の芸術の日本におけるおそらく最初の発見者、更に明清の戯曲史については、中国日本を通しての最先達」（吉川幸次郎「青木正児先生」『吉川幸次郎全集』第17巻）である。が、まだある。彼は文学評論・批評史や名物学のスタイルの創始者でもある。名物学については、前掲コラムを参照していただくことにして、ここでは青木の文学評論・批評史を俯瞰してみよう。

『支那文学概説』（『青木正児全集』第1巻）自序にいう、「文学は須らく味はふ可きである。…一寸した鹽加減、微妙な風味にも靈感する味覺を養はねばならぬ。味覺とは何ぞ、鑑賞力である」。鑑賞を伴わない文学研究が当たり前になってしまった今の学界には、かなり手厳しい叱声に聞こえる。よく作品を味読鑑賞すること、これが青木のすべてにわたる基本姿勢だった。

また『支那文学思想史』（『同全集』第1巻）序論を開けると、こうも記される。「文藝發生の源を假想するに、蓋し人性の有する美意識の發露に由るは勿論であらう。美意識は快感と密接な關係がある。即ち、美を意識すれば斯に快感を覺え、快感を覺ゆる所、そこに美を意識する」と。この「美」には、「浮世の紛擾、個人の失意より生ずる苦悶」（同「道家的文芸思潮」）から創造された文化も含まれる。というよりも、青木はそこにこそ中国文学の本質を見ていた。

その「生活は一面に意気昂然たる獨行の心強さを自覺すると同時に、其の裏面に於ては聊か孤獨のうら淋しさを感じずには居られない。」それを慰める代表的なものが、「清談と文藝と自然美と酒」（同）である。あるいは、「其の一は自然美、其の二は藝術、其の三は酒」（『支那文芸に溢れたる高踏的気味』『支那文芸論叢』『同全集』第2巻）ともいう。それらは、しばしば個々別々のものではなく、あくまで一体のものとしてある。たとえば、「七賢中阮籍・嵇康の如きは魏朝末期に輝く詩文の作家で、就中嵇康の如きは音楽を善くし畫も描いた、書も名家である」（『支那文学概説』第2章）などがそうだが、青木はこのような一個の人間の精神文化の全体を丸ごと理解しようとする。それは、分野ごとに解体して総合的視点を欠落している、今風の研究と大いに相違する。青木の方法論こそ中国学の原点だった。ちなみに、青木の七賢好きの痕跡は、青木蔵書『李卓吾批点世説新語補』20巻（ことに七賢の記述の多い「文学篇」「任誕篇」）に、多数の朱点^{しゆてん}が打たれていることに明らかである。

また青木は屈原^{くつげん}が大好きだった。いわく「古代文學に於て最も苦悶の跡を残した吾が屈原が慨世的生活から厭世的生活に入り、超世の天堂^{てんたう}へ攀ぢんとしては数々雲梯を滑り、遂に失脚して汨羅の水底に墜落した足跡は、其の「離騷」以下の珠玉に歴々と印してある」（『支那文芸に溢れたる高踏的気味』）と。その血汐は、「自我の尊重の爲に、自己の憤懣の爲に、自己の藝術の爲に、自己の生命の爲に流された瀧つ瀬のやうな血汐だ。そして其れは今も流れてゐる、未來も無論此の世のかぎり……」（『読騷漫録』）という鑑賞の部分などに至ると、自身の靈魂まで乗り移っているかのようだ。青木蔵書中の『楚辭』（宋・興洪祖補注）を開けると、朱の圈点がおびただしい（今回、展示）。その成果は、彼の『新訳 楚辭』にまとめられている。

青木らしい方法論は、このほかにも論集の至る所に示されている。たとえば、「周漢の音楽思想」（『支那文学思想史』）を見られたい。「詩經時代の音楽は詩中に現はれたる樂器の多種類なるを以てしても相當進歩してゐたことが推察される」という。そして資料を博搜して（委細ははぶくが）、「絃樂よりも管樂が嚴肅なりと考へられてゐたやうである」とか、「特に磬^{けい}は衆樂を統率するものと爲されてゐたやうである」などという論を読むと、彼がいかに詩と音楽を一体のものとして捉えていたかがよく分かる。吉川幸次郎博士を感動させ、中国文学への道に入らせることとなる青木の論文「和声の芸術と旋律の芸術」（『支那文芸論叢』）もまた、これに通ずる一編である。

音楽だけではない。美術の面でもことは同様である。「周代の美術思想」（『支那文学思想史』）を読むと、「色の中で赤が最も尊ばれたらしい形跡は、詩に於て認め得られる。幽風「七月」の詩に「我朱孔^{あきら}だ陽かなり」とあるは、朱の鮮明な色彩を最も誇とする氣持が見えてゐる」とある。青木にはこの種の先端を颯爽かつ果敢に突き進む論文が少なくない。吉川が惹かれたのも、この辺に一因がある。

最後に、『清代文学評論史』について言及したい。「評論史」への注目、これも青木の創見である。彼は批評の態度が大切であることを力説した。対象としては、詩・文・詞・曲・小説の分野を含む壮大なものである。その概略は『支那文学概説』第6章に示されるが、この視点からさらに通史的に論じたのが、『支那文学思想史』である。この書は東北大学での講義をまとめたものだが、清代の部分十分ではなかった。そこで後年、今度は京都大学での講義を利用して「其の不足を補ふ」こととしたのである。ここで、青木は先賢の評論書を博捜し、清代の文学思想の変化の跡を明快に捉えてみせた。それが『清代文学評論史』である。これまた世間の称賛を得、「よくもこれだけ評論関係の文献を披覧検討したものだ。…こういう文学史は、未だ曾てない。著者の創体と言っていい」（橋本循「解説」『青木正児全集』第1巻）と評されている。

当時の世相では、中国古典文化に理解を寄せる者などきわめてまれだった。青木が生涯で直接育てた学生も、またきわめて少なかった。その淋しさはかなりのものがあっただろう。それにもめげず、中国文化の理解に一心に打ち込む青木は、しばしば変人と揶揄された。気むずかしいとも評された。が青木は、この孤独感をも芸術をはぐくむ力と信じて疑わなかった。そして自身の淋しさにたえて、中国の精神文化に高く舞い遊んだのである。青木の逍遙する文学空間は、まさに祝福された気韻の宇宙と化し、彼の「遊心」を大歓迎してくれた。そこで発見した妙味を、青木は文化の伝道師のように人々に黙々と語り伝えようとしたのである。

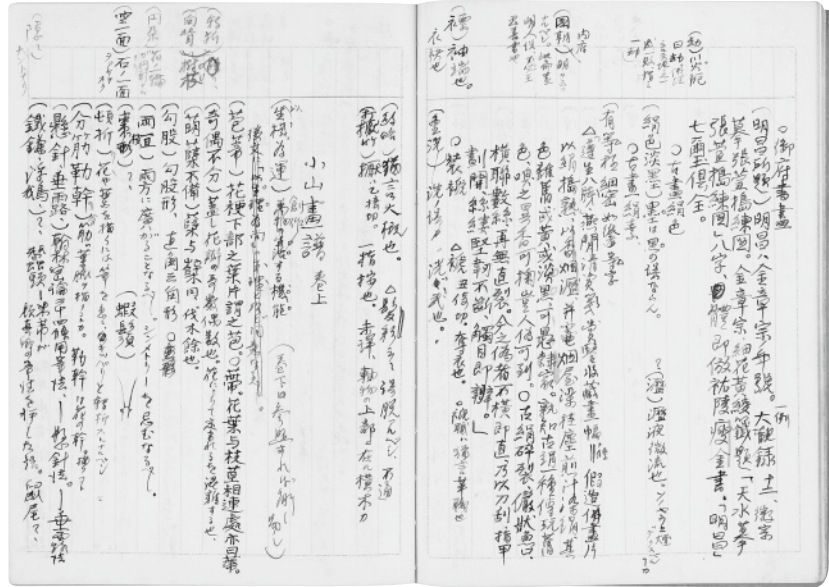
青木正児という原点には、ふるさとのような大きな温もりがある。帰るたび、ここが自分の原郷であることを、懐かしく思い起こさせてくれるものがある。

なお『支那文学史』（幻の本）『支那文学概説』草稿の写真が、『同全集』第9巻口絵に掲げられる。

[48] 「講書雜録」

ノート一冊。「六如画譜」「画訓」「王維山水訣」「山水賦」「画説」「画訣」「写像秘訣」「小山画譜」などに関するメモが多い。「歴代画論」(『青木正児全集』第6巻)と関連する。

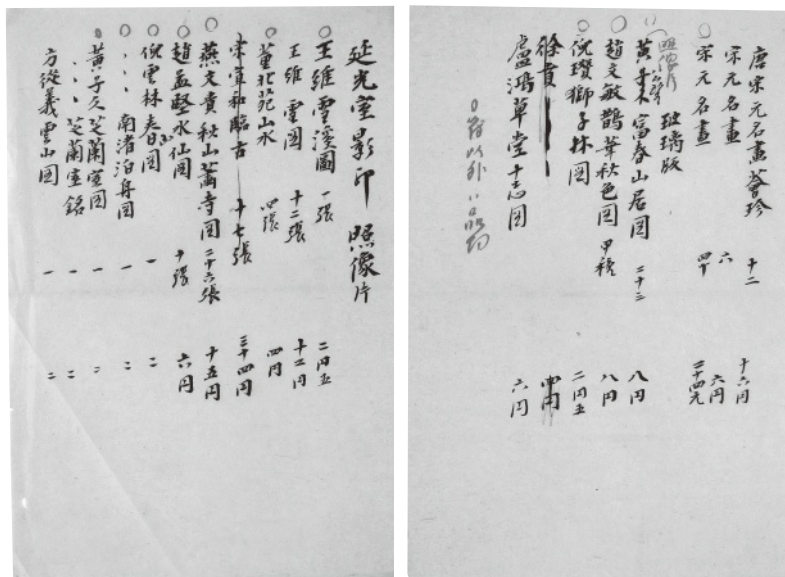
また『楚辞』の「東皇太一」「雲中君」「湘君」「湘夫人」などのメモあり。「楚辞九歌の舞曲的結構」(『同全集』第2巻)と関連する。さらに『文選』巻34「七発」、巻7・8「子虚賦」「上林賦」、巻16「長門賦」のメモもある。



画論関係のメモ—綿密な構想

[49] 「中華文人画談」(昭和24年 1931 弘文堂)

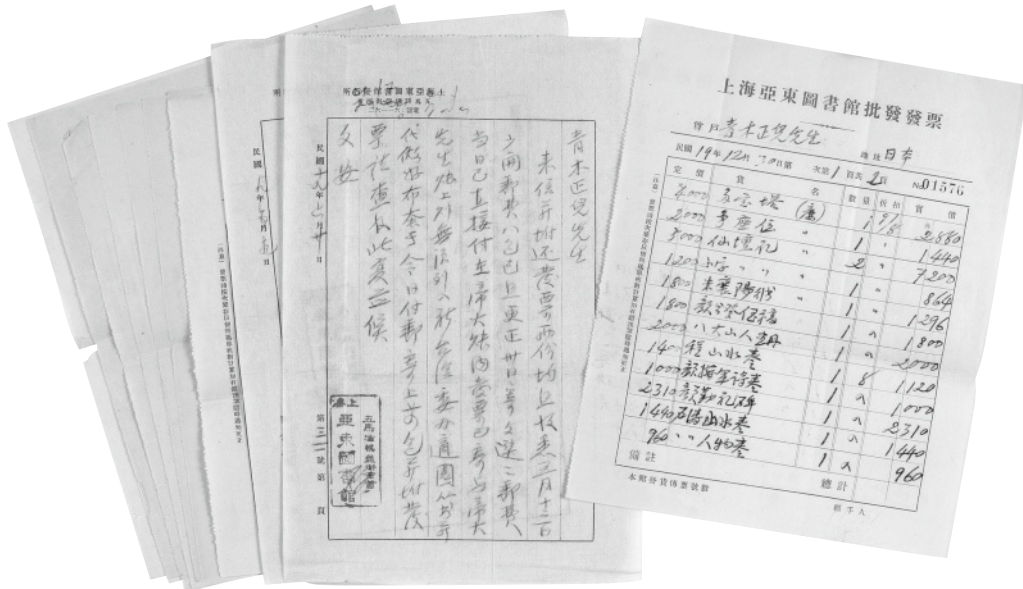
「余は文學を専攻する者であるが、姉妹藝術たる音樂美術に興味を有し、平生其等と文學との交渉を討究することに留意してゐる」(『支那文学芸術考』序)というように、青木得意の分野。もともとは「十六七年前曾て東北大學で楽しみ半分に支那文學の特殊講義として諸生に談じたものに本づいたのであり、…然し東北に於ける講義は資料の抜書を手にしてほつへ話したので、原稿は綴られてゐなかつた」。それをこの機会に、新たに起草し書き下ろしたのが本書である。昭和13年に同じ弘文堂から刊行された内藤湖南著『支那絵画史』を、「至極便利であるから、是非一讀せられんことをお勧めする」と記す。湖南著に比べ、詩文・書・画の「三絶」を強調した書となっている。詩文と書と一体となった画、これが青木の考える「文人画」だった。



自筆の買い物リスト—文人画の精粹を窮めん

[50] 上海・亜東図書館批発発票

展示資料は、上海・亜東図書館より石濤（1642-1707）の山水画などを購入したときの領収書。度々購入していたことが分かる。亜東図書館は胡適とも付き合いがあり、青木は信頼を寄せていたようだ。石濤は、青木をして「清初に於ける最も自由な畫風の代表者。…思ひ切り我儘な藝術を生んだ」（「石濤の画と画論と」）画家と称賛せしめた人物。青木は「吾が支那藝術に關する嗜好は、可なり強い」（「金冬心之芸術」自序）と述べるほど、芸術にも造詣が深かった。

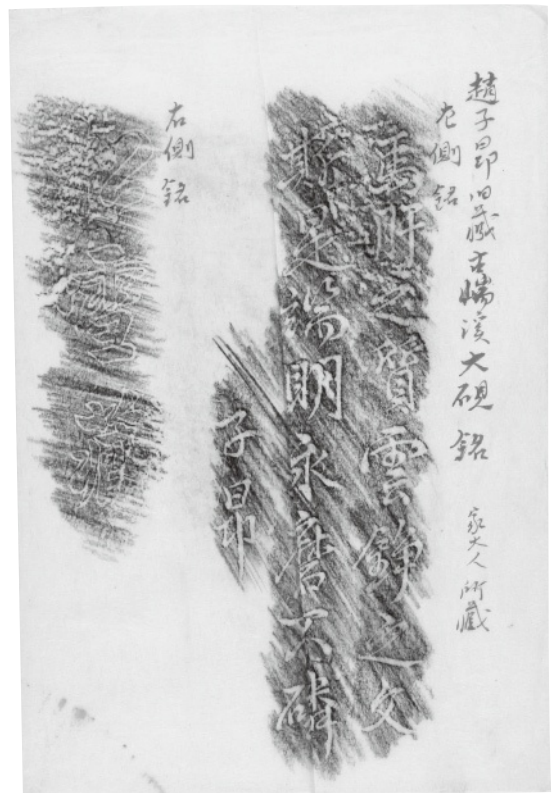


毎度お買い上げ有り難う御座います

[51] 趙子昂の硯拓

青木自編『雞肋』にある。趙子昂（1254-1322）旧蔵の古端溪の大硯の鉛筆拓本。名は孟頫、子昂は字。浙江省湖州の出身で、宋の宗室にあたる。至元23年（1286）、フビライに招かれて大都に行き、以後、元の皇帝のもとで集賢院や翰林院の学士となった。王羲之の書風を学び、後世に「趙子昂体」「松雪体」と呼ばれる美しい楷書体を提供、画風においても文人画を復興した。

青木は元初の文人画家としてこの趙子昂を重んじた。それが背景にあって、この趙子昂旧蔵の古端溪の大硯の拓本となったのだろう。端溪硯については、「文房趣味」（『琴棋書画』『青木正見全集』第7巻）に、「端溪は今の廣東省高要縣に在り、唐の中葉、劉禹錫の詩に「端溪石硯は人間に重んぜらる」と云ひ、李賀の詩にも「端州の石工巧みなること神の如し」と詠じてあるから（文房四譜）、唐代已に顯はれてゐたのである」と、簡単な言及がある。



趙子昂旧蔵・古端溪の大硯の鉛筆拓本

●コラム (9) : 「文人画とは詩情にあり—青木正児の世界デッサン」

一 金冬心における青木の自己発見

もともと青木は文人画をきらっていた。が、京都の橐文堂でたまたま金冬心^{きんとうしん} (1687-1762 or 3) の画冊を見つけると、たちまち心酔していった。金冬心とは揚州八怪の一人で、詩書画一体の高い芸術性を示した人物である。この金冬心発見が契機となり、青木は石濤^{せきとう}・陳老蓮^{ちんろうれん}・徐渭^{じょゐ}と続けて画人を探求していく。大正9年(1920)には、著書『金冬心之芸術』を橐文堂から刊行。その2年後には、芥川龍之介が金冬心に言及。さらに、川端康成もノーベル賞記念講演で、この金冬心を取り上げる(「美しい日本の私」)などしている。金冬心は青木によってその芸術的価値を発見され、世に広められたのである。ちなみに、青木が金冬心の愛した地・揚州をはじめて訪問したのは、大正11年(1922)のことだった。その感激や推して知るべしである。

青木の金冬心論で強く印象に残るものがいくつかある。まずはその人物理解である。

彼の性格は世の一般の人から餘程懸け隔てた傾向を有して居た。つまり彼は甚しい變人であつた。奇癖の人であつた。…自我の強い性格、嗜奇好古の趣味、それが彼の藝術を形造る凡てのものであると云つても宜しからう。

個性の強い者は動もすれば人に誤解せられ、嫌悪される傾がある。併し彼の如き獨創的な藝術は、此の如き偏僻な性格に俟たねばならぬ、偏僻な性格は一面互に理解ある者に対しては並外れて好感を與へる。彼の藝術が十人向で無い代りに、好かれる者に対しては強い愛着の念を起さしむるも亦同一の理である。

つまり、世の中からかけ離れた性格をもつ人間がいて、自分も他人もあいつはどこか奇人変人だと思っている。しかし、彼は本当に変な人間なのか?人間として、大きな欠陥のある存在なのか?世間に受け入れられるような人間ではないのか?が、よく考えると、それくらいの強さをもった者こそ、真に獨創的な藝術を造形しうるのだとも思われる。そういう人間を理解し好感を寄せてくる者には、彼は非常な人間味あふれる情を抱くことがあるのであり、彼なりの手法で立派に世間の関係性を実現しているのだ。世の中もまたそういう彼を認めているといえる、という趣旨である。これは青木と交流のあった人々が語る青木像とまったく同一であり、まるで青木本人による自画像である。

金冬心は青木の慧眼によって、中国絵画史上に格別の意味をもつ「金冬心」の名を刻印されたわけだが、もし青木サイドに立って考えてみるならば、また別の重要な一面が見えてくる。すなわち書生青木にとって、それは覚醒的な自己発見となる遭遇だったという点である。これを起点として彼の文人的立場が確固たるものとなるのであり、その意味で見逃すことのできない意義をもつ。いわば自己の「内なる偏僻性」を裏返し、それ故にこそ自分たる意義があるとの強い肯定論を、金冬心論のうちに混然一体となって展開したものなのである。

この「変人」への注視というのは、おそらく金冬心論によって始まったものではなく、もともと彼自身のうちに重い自己認識としてあったものだろう。それが京都大支那学での研鑽による人間的成長を経て、いつしか好転し解放された状況で、文人金冬心と劇的に出会うこととなったのである。この時、青木は自らが長年感じてきた「内なる偏僻性」を逆転させ、それ故に幸福でありうる文人像というものに逢着し、高度の芸術性に昇華された信念に到達する。いわば、自らのうちに宿っていた人間的影を、あるがままに芸術的天分として押し開いた金冬心に自身の重さを解決され、新しい人間理解へと明快に解放されたことを意味する。そして第一著作『金冬心之芸術』とともに、青木の自信に満ちた文人的活動も本格化する。それはある部分、陶然自樂的な孤立の気分をもったが、脱俗を掲げながらも節度ある美的活動だったため、江湖の教養人の高い称賛を得たのである。

してみると、本書刊行の翌年の論文「解衣般礴の芸術」に、次のように記すのは青木理解の上できわめて重要なことである。

藝術家は須らく他を見廻す前に、先づ自己を内省しなければならぬ。自己の天分を見つむる事なしに、自己の進路の見出されやうはづは無い。若し藝術家から自信を取り去つたならば、彼は一步も前進することは出来まい。

深く「自己を内省し…自己の天分を見つむる」藝術家であつてこそ、自信をもって「自己の進路」も見出されるのだという、何の躊躇も虚飾もない開放的な確信。『金冬心之芸術』の著作とともに、「金冬心」のその分身もまた晴れやかに世に出たことを物語る。ここに、天の祝福を受けた文人「青木正児」が誕生する。

ついで注目されるのが、詩情に主軸をおいた金冬心論である。いわく、

彼に詩なかりせば、其の畫はたゞ奇怪な拙劣の兒戯に過ぎなかつたかも知れぬ。彼の藝術の根柢を成して居るものは詩である、書である。

彼の畫から詩と書との根柢を引き去つたならば、殘る所は其の幼稚な技巧と未熟な素描^{デッサン}とを有する奇怪な畫に過ぎないであらう。

其取材は卑近、其構圖は單純、其手法は幼稚、然り而して畫妙人を驚かすは何者であらう。そは内面に秘めたる詩味、外部を包める生拙の筆致、其等から響き出づる氣韻の生動ではあるまいか。

金冬心の絵にはどこか素人っぽさがある。職業画家の手によるうまい絵ではない。だいいち金冬心が絵を描き始めたのは老年になってからである。それでも青木が大きな魅力を感じたのは、なぜか。それは金冬心に豊かな詩情があつたからである。その詩情ゆえに、素人っぽい絵も画家の習気を脱した新鮮さを発露していると感じられ、それがいっそう金冬心の個性を輝かせて見せたのである。

その金冬心の詩の特色を要約すれば、

沈靜と幽雅とは彼の詩を組み立てる基調である。その中に山寺の梵聲を聞くやうな趣^{みなぎ}は漲つて居るが、併し無常を觀ずるやうな悲調は見出されぬ。其所には矢張藝術家らしい瀟洒たる輕快さが漂つて居る。

というふうである。こうした深い趣があつてこそ、金冬心の画らしさが表現されるのである。

またその書もすばらしいと感じられた。ことに「八分」と称される書に特色があることは有名である。

劃の兩端が鑿で打ち切つたやうで、波勢も極めて緩やかである。そして線の太さに大小が無く、^{あたら}も刷毛で書いたかと疑れるやうである。併し其の中に何とも言へぬ力強さと脱俗の趣とが備はつて、容易に人の追蹤を許さぬ所がある。

こうした詩書画一体の到達点として、晩年の揚州での「題画記」が生まれてくる。

其の飘逸な筆致、曠達な思想、其の畫は此の題記を得て、益々興味を深からしむるを覺ゆるのである。宛も俳文でも讀むやうな機^{ママ}のきいた恬淡味は甚だしく予の嗜好に投ずる所である。

(以上『金冬心之芸術』)

青木の『金冬心之芸術』がいかに画期的発掘だったかは、内藤湖南『支那絵画史』(『内藤湖南全集』第13卷)を見ればよく分かる。湖南の指摘は、以下の指摘のみのごく簡単なものである。

金^{きんのう}農の畫は日本の琳派の畫のやうで、更に荒つぽい野性を帯びた趣味を畫くのである。此人は文字に於てもさうである。

それほど当時、金冬心という人物はまだ世に知られていなかった。ひるがえって、青木がかくも仔細に金

冬心という人物を、その奥深くまで洞察し得たのは、まさに「自己を内省し…自己の天分を見つ」めるといふ、深密な自己省察と絡むがゆえだったのである。

二 己のための文人画から人々のものへ

金冬心から始まった青木の文人画への関心は、生涯、変わることなく続いた。その画論の根本もまた不変だった。いわく、

元明以來、文人の畫は「詩文」「書」「畫」三者の合一を以て其の歸趣とし、此の三者に秀づることを「三絶」と稱して最も理想的な作品としてゐる。是は文人の能事であり、誇りであり、到底畫技のみ修めた畫工の眞似の出來ない藝當である。（『中華文人画談』）

青木は詩書画一体なる画をもって、すなわち文人画とみる。その本質はというに、「素人絵といふ事」にある。だれがそう規定したのか。

其れは元朝の素人畫家が二人で話し合つたのである。一人は趙孟頫、あざなを子昂と云ひ、一人は錢選、あざなを舜舉と云ふ。二人は浙江の湖州と云ふ好い町に住んでゐた。或時子昂が舜舉に向つて「一體インテリイの畫とはどんなのでせうか」（如何是士夫畫）と問うた。舜舉が答へた「つまり素人の畫ですよ」（隸家畫也）と。

文人の素人の絵でも、職業絵師より尊重されるのはなぜか。青木の発言を続けよう。

其れは人品の高い士大夫の畫には自ら「氣韻」が備はつてゐるからだとされてをり、氣韻は技巧以上のもの、藝術の第一要件とされてをるからで、是が古來中華の鑑賞家の間に認められて來た常識である。

その典型として青木がとくに尊崇したのは、徐渭と石濤の二人だろう。いわく、

明から清へかけて詩書畫三絶の藝術家が少からず輩出した。けれど我が徐青藤ほど多方面で、而も其の孰れに於ても相當の見るに足る作品を出してゐる者は比類稀であらう。

彼の詩は文の力あるが故に根柢あり、彼の畫は詩と書とに相待つて光彩がある、そして是等が渾一した所に面白みがある。（「徐青藤の芸術」『支那文芸論叢』）

清初に於ける最も自由な畫風の代表者として、先づ石濤上人と八大山人とが人々の頭に浮んで來るだらう。

其筆墨の内部に潜む或る物を見つめてみると、思はず涙ぐまれる。其の運命の殘酷さ、人も無げなる其藝術の磊落さ、その「哭」と「笑」との對照から醸し出された高蹈味、其等は人をして正氣を失はしめる旨酒のやうな魔力を僕に對して働きかける。（「石濤の画と画論と」同）

青木のこの種の文章を引用すると、なぜか文章を切ることに不思議な困難を覚える。無理にはせき止められないやうな、強い氣の流れを感じるのだ。これが青木の文氣なのだろう。大好きな人物のことを書いているときは筆先に精氣がこもっていて、こちらが流れを遮断するのを妨害するかのようだ。青木先生のお気持ちは分かるが、紙数の制限もあることであり、この先は全集のほうで読ませて上げてください。

この二人をはじめとして、青木は元明清の文人画の魅力を厭わず語ってやまない。加えて、その基盤となつた唐宋元の画論についても、意欲的に訳本『歴代画論』（『青木正児全集』第6巻）にまとめている。その中には王維の「画学秘訣」（山水訣・山水論）、張彦遠の「歴代名画記」、郭熙の「林泉高致」などがあ

るが、青木の自筆ノート「講書雑録」に、「王維山水訣」「画説」「画訣」などのメモが残されており、両者の関連が興味深い。さらに自筆の買い物リストの書き付けが残っていて、そこに「唐宋元名画薈珍」十二張、十六円。「宋元名画」四十（張）、二十四元。「王維雪溪図」一張、二円五。趙孟堅「水仙図」十張、六円。倪雲林「春図」一（張）二（円）。黄公望「富春山居図」二十三（張）八（円）などと記されており、その生々しさに思わず引きずり込まれてしまう。じつは、これらも「読画清談」の中の「趙孟堅の水仙図巻」、「王維の雪溪図」（『同全集』第7巻）と関連する。口絵は、趙孟堅の「水仙図巻」が全集第7巻に、王維の「雪溪図」が全集第6巻に、黄公望「富春山居図」が全集第2・6巻に掲げられるので、こちらもぜひ見られることをお勧めする。

ちなみに、山水画鑑賞のポイントについて、青木の次の言葉を贈ろう。「即ち一は寫實主義であり、一は理想主義である」（『支那人の自然観』『同全集』第2巻）。すなわちそこは「遊心」が満ちる理想郷、いわば遊トピアなのである。とはいっても、九寨溝でもなければ知床半島でもない。とびっきりの未知の大自然というのではない。それどころか、既知感ただよどこかで見たことのある風景でさえある。青木がそこに求めるのは、むしろ「形骸を遺て超然として宇宙の理法に循うて天命に安んず」る境地（『支那文芸に溢れたる高踏の気味』）なのだ。じつはそれは現実にあるか否かはまったく問題にならない。

元來藝術の發生は實體を一つの形象として製作し、造化が自然を創造せしに對して、人類も亦一つの假象世界を創造して樂しまうと云ふ思想に起因したものとされる。

（藝術の一補足）窮極の目的は、人類の嗜好に叶ふやうな任意の形象を創作すると云ふことに存せねばならぬはずである。既に創作が窮極の目的である以上は、自然は其の模範を示す作例たるに過ぎぬ、藝術家は其の様式の取る可きは取り、捨つる可きは捨て、即ち想化を加へ自己の理想を實現するを以て適當なる態度とせねばならぬ。（『古拙論』『金冬心之芸術』付録）

すなわち、想像をもって模範的自然を敷衍して理想的に形象せられたもの、この芸術の力が生んだ「假象世界」こそが、人間にとっての大切な現実となるのだというのである。その時、まさに「自然が芸術を模倣する」ほどの逆転現象が雪崩を打って発生する。青木の意識は、絵画が世界の真実を真新しい相貌のもとにかいま見せてくれることに感嘆し、その指向する可能性の無限なることに無上の愉悅を覚えるのである。それを彼は、繰り返し「遊心」なる言葉で語った。どんなに貧しかろうと不平を抱えていようと、「遊心」の扉を一たび開きさえすれば、たちどころに僥倖を届けてくれる「窮極」の世界だったのである。

青木がいかにかこの文人画の幸福を、多くの人々に届けようとしたかは、『芥子園画伝』（筑摩書房1975）の翻訳に端的に表れている。これは博士円熟の65歳、最後の大きな画論の仕事である。この書は、明清易代期の李笠翁りりゅうおうおよびその女婿沈因伯しんいんはくが出版したもので、山水花卉の描写法や歴代の画論、歴史的批評などを織り交ぜた、いわば中国絵画の教科書である。本書でもっとも青木が意を用いたある一つのこと、それは何だったか。「訳註を終へて」には、こういう、

訓讀書き流しも分かり易くする爲には、傍訓送り假名に相當の工夫は要るが、何と云つても吾々漢學者には久しく慣れた読み方が有つて仕事は樂である。そして其の方が原文の韻致にほひは好く傳へ得るやうにも思はれる。が然し現今の讀書人に通じ易くする爲には、當然口語體に譯すべきであると私は思ふ。

だれでも読めるような文体で訳出しなければならぬ。彼が描いた理想世界のデッサンが、いつか多くの人々の現実となりますように。そういう願いをこめていたのだと、今になって気づかされる。押しつけがましくない先生の物腰が、ますます文人らしく思われてくる。ここに、一つの結論が導かれてくる。—青木正児は過去の古い文人画を独語していたのではなく、理想世界のデッサンを人類に贈り届けんとしたのだと。

なお青木の自筆書画は、第9巻を中心に、第4巻口絵などに掲げられる。

●コラム (10) : 「河合絹吉氏の書簡・漢字・漢文の衰退を憂う —ミスター・二中、迷陽先生に気を吐く—

河合絹吉(生年1875年(明治8)~卒年不詳)は、宮城県立仙台第二高等学校の前身、仙台二中の第五代校長を勤めたことで知られる。同校は2000年に創立百周年を迎えた歴史ある学校で、東北大学(旧東北帝国大学)への入学者も多い。河合絹吉の校長在職は大正9年(1920)3月~昭和12年(1937)4月。出身地は愛知県で、全国各地(神奈川・新潟・宮城・香川・愛媛)の中学校長を歴任し、清朝政府の要望で雲南高等学園堂でも教鞭を執った。大正15年(1926)には財団法人宮城県仙台第二中学校奨学会を設立、また、昭和3年(1928)には、川内校舎の新築移転を実現し、仙台二中の校基を確立した。昭和11年(1936)には、その還暦を祝って父兄らにより胸像が建立されるほど敬慕されていた。河合は二中を愛し、口癖のように「二中はおれで、おれは二中だ」と言っていたという。仙台二高の平川弘二事務部長によれば、現在でも「ミスター・二中」の愛称で呼ばれているという。

著書に、二中校長在職中に刊行された『漢詩句法新説』([正], 続)(育英書院、1936年)があるほか、校長辞職後陸続と以下の著書を刊行している。『古詩韻法新説』(附:「四声論」)(育英書院、1938年6月)、『国語と四声』(同、1938年7月)、『昆明』(同、1938年10月)、『詩經句法新説』(同、1938年、発行月不明)、『助辞用法新説』(同、1939年3月)、『和歌韻法新説』(同、1939年10月)、『国語発音の原則』(平凡社、1941年1月)、『東洋詩形学』(友松堂、1941年11月)などがある。一瞥して明白なのは、著書のテーマが、漢詩、和歌、東洋の詩歌の形式論一般、韻律論、句法、国語の発音というように、詩歌(韻文)及び言語(発音)に亘っていることである。

中でも青木との関係で特記すべきは『国語と四声』、『古詩韻法新説』(附:「四声論」)、『東洋詩形学』であろう。今回の展示品、河合が青木に宛てた書簡の内容は、大きく分けて二つの事柄について触れている。

その一は、最近の自著について青木が懇切丁寧な批評をしてくれたことに対するお礼である。封筒の日付は「昭和壬午正月吉旦」となっている。つまり1942年(昭和17)の新春の挨拶である。「旧年(*ママ)の拙著に對し細々と批評」とあるので、その「拙著」とは1941年に刊行された『東洋詩形学』だと考えられる。この書簡の前半部分で河合は「二四不同、二六對」は「元來、語路(*注:「語呂」と同じ)、形を整ふる爲の一要件にして、二字目に對すこの偶数倍の句ハ不同にして、この奇数倍に當る句ハ對と相成成(*注:あひなるなり)と愚考いたしました」と述べている。そこに我が国の「和歌聯句」を引き合いに出し、漢詩の定型詩の規則と和歌の聯句とを関連づけることも「あながち牽強附會」ではないとも述べている。そして、「小生の四聲論も御一覽の上御批評下されたし」と付け加えている。これは蓋し自著の『国語と四声』乃至は『古詩韻法新説』(附:「四声論」)を指しているのであろう。この文面からは、河合がさらに青木に教示を求める姿勢が感じられると同時に、上述した校長時代の剛直、闊達な一面が窺われる。

その二は、当時の国語政策に対する危惧と不満と提言である。「昨今」の「漢文廢止論、漢字制限論」について、「國語論者もつとめて漢語漢字を制限せんとするが如きハ、國民思想上、由々しき大事と存じ、アナウンサーの國音(アクセント?)(*ママ)など乱(*ママ)るる事甚だしきことを指摘し、「國音の統一ハ目下の國勢上、重大なる國策の一と確信」と述べている。

ここに、青木の主張との接点がある。青木は後に「簡體漢字と活字——跋に代えて(昭和39年6月)』(『琴棋書画』所収、『青木正児全集』第7巻収録)の中で、「簡體字」と“新假名”の出版物における使用について苦言を呈している。“簡體字”については“俗字”とも、「書くための」“略字”とも呼んで、「見るための」“活字”に使用するのは「不愉快であるのみならず、不合理であると思ふ」と述べている。「不愉快」なのは、正しく書いた原稿の“正體漢字”を活字で“簡體字”に組まれてしまうことのほかに、「見た目の美觀も考慮する必要が大いに有る」という、元來、書画を愛玩する青木ならではの美学も関係している。青木曰く、「私は自著には一切簡體漢字と新假名を用ゐないことにしてゐる。」

また、時代は書簡より遡るが、「漢文直讀論(大正9年10月)』(『支那文芸論叢』所収、『全集』第2巻収録)の中では、漢文の「直下音讀」を提言している。およそ外国文の研究には「音讀」と「譯」と「解釋」との三段の順序があり、漢文渡來当初の講習法が「直下音讀」を先にし「譯解」すること、今日、欧文の講習法と同じであったと想像するに難くないとする。青木が漢文直讀法を主張する目的は、中国古典文の

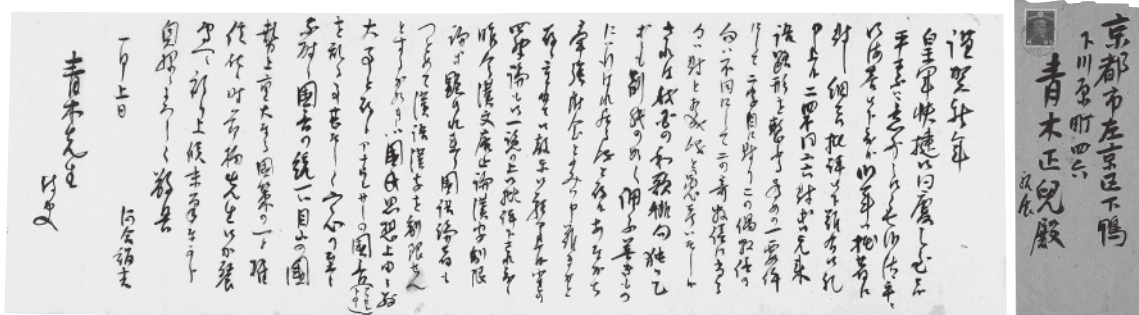
正確な読解であり、我が国における漢学の盛んならんことを願って已まないからである。それは以下の記述からも知られる。「上來述べ来たつた訓點略史から僕はかう云ふ歸結を得た——漢學の盛んな時には音讀に傾き、衰へて來ると訓讀に碎けて來る。で漢學をして最も隆盛ならしむるには全然音讀に依る事が必要だ。」しかし、青木が漢文直讀法を主張する理由はそれだけではない。青木の青木たる所以は以下の記述に尽きるだろう。直下音読のベストな方法は現代中国語音に依ることである。しかし、北京音に依ったのでは入声が体得できない。また、全ての学者が中国語音に通暁しているわけでもない。セカンド・ベストの選択肢は、日本漢字音（漢音を主とし、呉音を従とする）に依って素読することだ。しかし、日本漢字音に依っては四声が会得できないので、「詩に最も必要な音律の妙味は如何にしても會得することが出来ない。（中略）言語の音樂的美感をも併せ見る必要のある純文學の場合には遺憾至極と云はねばならぬ。（それにしても詩の句調や脚韻の美感だけは享樂出来るから訓讀に勝ること數等だ。）」青木の面目躍如たり。

以上の二篇の文章は、河合が書簡を送った時とは時期を異にしているが、河合が漢字制限論・漢文廃止論について激しく反発する気持ちを青木にぶつけたのは、共感を得られる確信があったからこそであろう。

さらに、河合の国語に対する観点と関連するものとして、青木の「アイデア・ノート」とも言うべき研究・著作の構想を記した自筆の備忘録『蓬廬雜記 卷一』（表紙見返しに「大正九年」とある）の中に『邦文に於ける漢字使用問題私議（一名「言文不一致論」）』の構想（「腹案」）が書かれている。それによれば、主旨の一として、「漢字の特徴たる表義文字の性質を活用可シ」、主旨の二として、「必ずしも言文を一致せしむる必要無し。要は理解し易きと文學的効果を収むるに在り。成可くならば簡明なるをよとす。」とうたっている。本編は三章立てとし、第一章は「漢字の特徴」、第二章は「書記法」、第三章は「漢字の教育法」にあてる腹案だったことが分かる。

参考文献等：『仙台二高八十年のあゆみ』（「仙台二高八十年のあゆみ」編集委員会編 松本印刷所 1980）

*宮城県立仙台第二高等学校・平川弘二事務部長の談話（電話による不躰な問い合わせに丁寧に対応して下さった平川事務部長、並びに関係者の方々にお礼申し上げます。)



ミスター・二中の一家言

VI 青木正児の自筆原稿・蔵書

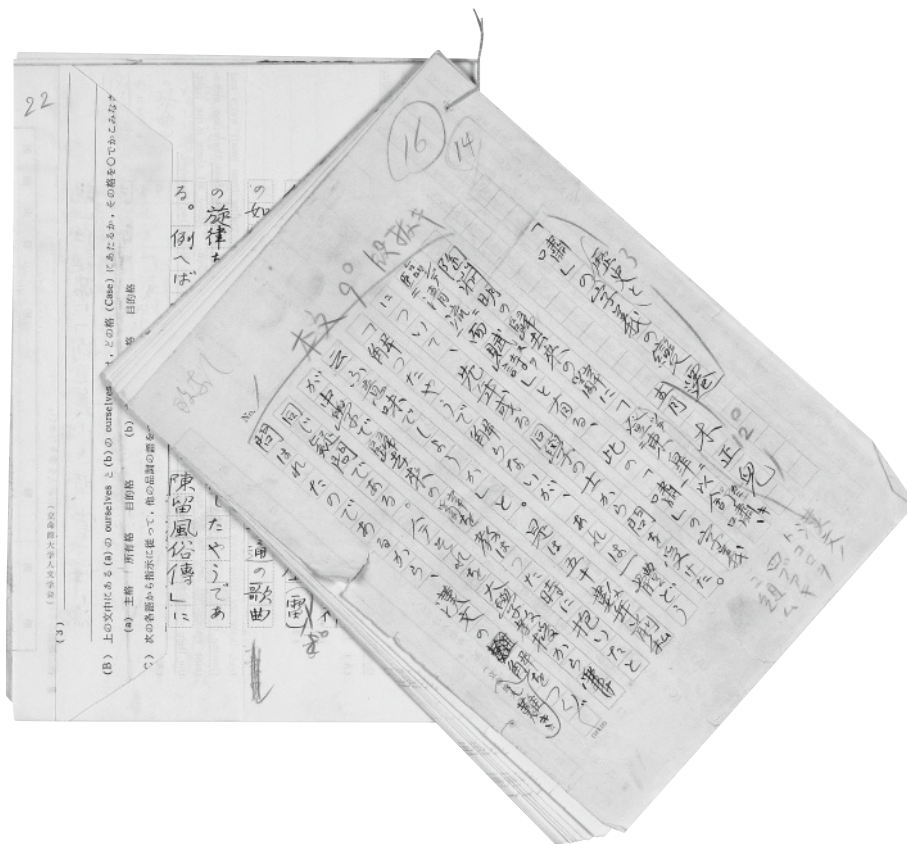
【自筆原稿】

[52] 「漢の武帝と西王母」

「漢の武帝と西王母」と題し、B4判原稿用紙(24字×20行)一枚半に渡って綴られている。内容は「漢武帝内伝」に拠る。内伝は後漢・班固の撰と称されていたが、実際は後世の偽作。漢の武帝の神怪なる出生譚より始まり、武帝が神女・西王母より神仙の術を授かるというものである。青木の原稿は内伝の文章をほぼ忠実に訳す形を取っており、題名からすればさらに書き継ごうとしたとも考えられるが、武帝の即位前で終わっている。『青木正児全集』未収録。なお「支那小説の遡源と神仙説」「神仙説から見た「列子」」(ともに『支那文芸論叢』『同全集』第2巻)は、これと関連する。

[53] 「『嘯』の歴史と字義の変遷」

この文章は、『中華名物考』の一編である。陶淵明「帰去来の辞」にある「嘯」の字義に、無声の「うそぶき」の意を見出し、更に我国の古典文学にもこの字義が用いられている点を指摘する。英語の試験問題の裏に印刷された原稿用紙に丹念に書き込まれた自筆原稿が、まだ紙が大切にされていた時代であったことを物語っている。



紙不足の時代の自筆原稿

[54] 「元曲 瀟湘雨」

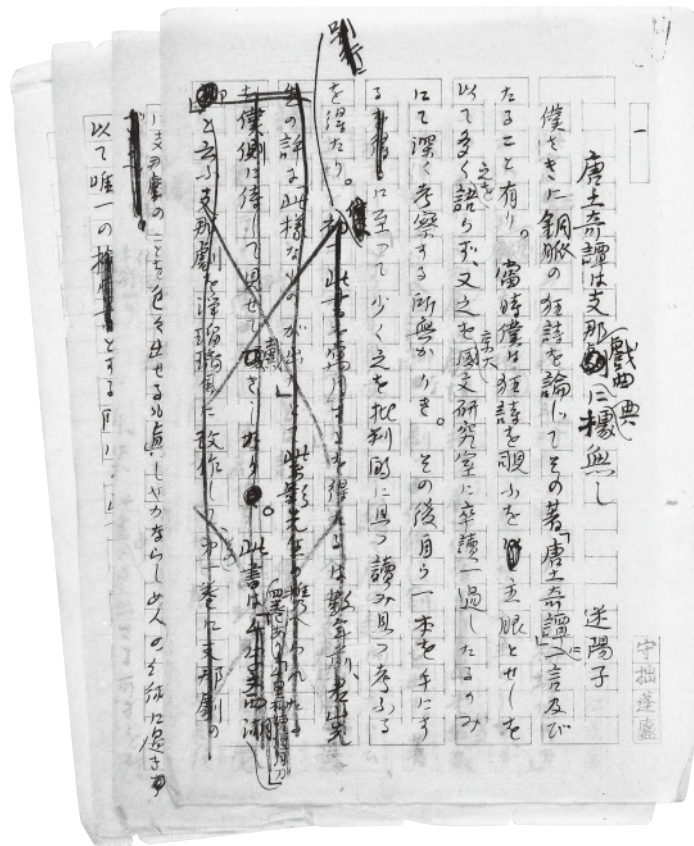
正式な題名は「臨江駅瀟湘秋夜雨」であり、元代の楊顯之の作である。他のオーソドックスな元曲と同じように四折であり、取り分け第三折が最高潮である。婚約者に裏切られ、沙門島へ流されることになった張翠鸞が自分の生涯を振り返って、「眼に見ゆ涙点兒、他の那の秋夜雨の如く更に多し」と悲しく歌う部分などは、まさしく読者の心を強烈に打つ。「瀟湘雨」は中国では古くから有名な元曲作品として伝誦して来たのだが、日本では青木が翻訳したことによって、はじめて世に問われるようになった。青木は大正10年(1921)頃、雑誌『支那学』に「瀟湘雨」の一部を発表したが、「全集にはおそらく未完のためであろう、収録されていない」(田中謙二氏「解説」『青木正児全集』第4巻)。よって青木の妙筆の始終を見ることはできない。しかし一部の内容からでも、青木の翻訳の才は思う存分楽しめる。中でも第一折の「翁の助けなかりせば、すでに大河に押し流され・・・」は、あたかも「他の那の秋夜雨の如く更に多し」と相呼応するかのような素晴らしい訳文である。

[55] 「夜裏香の花」

青木は、大正14年の春から翌夏まで北京に滞在した。この文章は、この頃の体験を学問的視点を織り交せて綴った「雑文」の一つである。偶然入手した「夜裏香」の花の香を好むようになったことを端緒に、自らの香への嗜好と、一方で嗅覚を失ってしまった悲しみを語り、「嗅覚」が文学や美術の鑑賞において重要であることを述べる。夜になると咲き芳香を発する黄色い花を想像させられるような、たおやかな筆の流れによる自筆原稿である。〔琴棋書画〕所収 『青木正児全集』第7巻

[56] 「唐土奇譚は支那戯曲に典拠無し」

太平観主人撰『唐土奇譚』（寛政2年・1790刊）。太平観主人とは、銅脈先生（畠中観齋1752-1801）の別号である。藤井乙男が狩野直喜のもとにこの書を持ち込んだ折、青木もその場に居合わせたことが本書との出会いであった。支那劇を浄瑠璃風に作ったものであろうと典拠を探ったが見当たらない、とある（「唐土奇譚は支那戯曲に典拠無し」）。「著者は名に負ふ狂詩家銅脈先生なり。妄作以て名を唐土に托し、人をたぶらかし蔭にて舌を出し居らんも料られず」との結論は、学生時代より狂詩を嗜好した青木らしい。狂詩は、東の寢惚先生（太田南畝1749-1823）・西の銅脈先生と称される。青木は、「寢惚は如何にするも銅脈の右に出づること能はざるなり」として、銅脈先生の詩興湧くに任せた狂詩をかねてより高く評価していた（「京都を中心として見たる狂詩」）。小川環樹は狂詩までも評し得る青木を「単に該博の二字をもってはおおいつくせない」（「自由不羈の精神」『青木正児全集』第2巻）と評する。



自由不羈の精神—自筆原稿

【蔵書】

[57] 『景宋爾雅音圖』

青木文庫所蔵の『景宋爾雅音圖』（外題）の封面には「嘉慶六年影宋繪圖本重摹刊 爾雅音圖 蕪學軒藏版」とある。巻上・巻中が第一冊、巻下前が第二冊、巻下後が第三冊の一帙三巻本（実質的には四巻本）である。外題も封面も「爾雅音圖」となっているが、「嘉慶六年太歳辛酉十月望日兩淮都轉鹽運使南城曾燠撰」とある曾燠の序では「爾雅圖重刊影宋本叙」となっており、「音」の字はない。しかし、本書は、『爾雅』本文と、郭璞注と、闕名音注と、各巻末の闕名図とから成っている。曾燠の序によれば、郭璞の叙に「別に音圖を爲す」とあるからには、郭璞には「注」とは別に「圖讀」と「音義」があったはずだが、『隋書』『經籍志』には「梁に爾雅圖二卷有り。郭氏撰。亡。」とあり、その全帙は夙に散佚してしまったという。実際、郭璞の叙には、「別に音圖を爲し、用つて未だ寤めざるを祛る。」とある。青木も「支那の繪本」（昭和四年七月『思想』初出）で「晉の陶淵明の詩に見ゆる『山海經圖』や、郭璞が圖讀を作つたと云ふ『爾雅圖』、乃至は今に存する顧愷史の『女史箴圖』の如き肉筆畫は別として、板畫としての繪本は宋代に始まるものやうである。」（『青木正兒全集』第7巻「江南春」所収）と言っている。郭璞「爾雅圖」は肉筆画なので、様々な人の手によって模写されていった。曾燠の序によれば、結局、清の嘉慶六年版の「音」も「圖」も最終的には誰の手になるものか特定できなくなっている。ただ、旧音や旧図がどのようであったかは、幸いにして宋本があれば、その梗概を存しているのだから、宋本を影印して世に出すのが良いということになる。本書は元人が写本し、「影宋鈔繪圖爾雅」と題したもので、図に関しては清朝の画家姚之麟（1764-1849）が上述の元人の写本を模写したものを付刊したという。『内閣文庫漢籍分類目録』によると、文政12年（1829）刊の官版はこの版本を複製したものである。姚之麟の図は精緻で大変よく描けている。私見であるが、青木が本書をその蔵書に加えたのは、『爾雅』そのものに興味があった訳ではなく、絵心があり、書画を好む青木にとって、姚之麟の図は垂涎ものであったからに違いない。

[58] 『柳河東集』

『唐柳河東集四十五卷』（外集五卷、遺文一卷、附録一卷、読柳集叙説一卷）。唐の柳宗元撰、明の蔣之翘集注。明刊本、十二冊。木箱入りで、四針眼訂法による原体裁を朝鮮綴（五針）に改装してある。

柳河東（柳宗元）は中唐期、韓愈とともに古文復興運動の旗手として活躍した。作文においては技巧よりも精神を主とし、周漢を模範としたと、青木の著作の中でも述べられている。

「封建論」「宋清伝」「誉謗」「与楊京兆憑書」等の文面には折々朱筆で読点が打たれ、印象に残った箇所には同色で印が付けられている。

[59] 『劉知遠諸宮調』

「劉知遠諸宮調」は、五代後漢の君主劉知遠の逸事を描く作品である。劉知遠が沙陀村の老者に雇われた時から、最後に離れ離れになっていた家族がことごとく団円する所まで描かれている。「諸宮調」と称される作品は、この「劉知遠諸宮調」以外は、董解元の「西廂記諸宮調」と王伯成の「天寶遺事諸宮調」の二種のみである。作品数が少ないがゆえに、文学史においてはきわめて珍しい存在であり、宋金時代の口語を研究する上での貴重な資料となっている。しかし「劉知遠諸宮調」は幾多の俗文学のごとく、模倣たる筆跡や脱字や篇章の逸失などの原因で、研究するには難しい条件にある。現存するのは、巻1～巻3（部分）と巻11（部分）～巻12のみである。青木は恩師の狩野直喜からその影片を複製させてもらい（今回、展示）、研究したのである。青木の「劉知遠諸宮調考」（『支那学』第6巻第2号、『青木正兒全集』第2巻）は、その研究成果である。それは「諸宮調」の音楽性を徹底的に分析したり、三種類の「諸宮調」について詳らかに比較したりしたものであり、宋金時代の口承文学を代表する「諸宮調」を知る上で欠かせないものである。「然し畫龍に點睛すべき一つの證據、打破る可からざる一つの證據は今に至って未だ見出し得ない」というのは、いかにも謙虚な青木の一贯した口吻である。レニングラード大学との協力による写真撮影が、青木文庫に残る。



「劉知遠諸宮調」—レニングラード学士院蔵

[60] 『元曲選』

『元曲選』、明・臧懋循編、万暦43年序雕虫館刊本。うち12本欠。元代の中国に盛行した雑劇のうち百種を選んで刊行した書物で、一名を「元人百種曲」という。その一部については青木正児・入矢義高・田中謙二・吉川幸次郎らが注釈を施した『元曲選釈』（第1-4集、12冊、1951-77、京都大学人文科学研究所）がある。その研究の様子は、吉川幸次郎「『元曲選釈』第一集の刊行によせて」（『吉川幸次郎全集』第26巻）にうかがえる。

青木による多数の書き入れが散見される。また、元刊本との比較のあとも見られる。第五冊「唐明皇秋夜梧桐雨雜劇」には、青木のメモがある（『元人雜劇』の項参照）。

[61] 『西廂記』

『西廂記』五劇五本、元・王徳信撰、元・関漢卿統、覆明凌濛初即空観原刊本、彙刻伝奇第二種所収、四冊。

『絵図新校注古本西廂記』六巻増『新校注古本西廂記考』一卷、元・王徳信撰、元・関漢卿統、明・王驥徳校注、民国十九年、北平富晋書社東来閣書荘用万暦四十一年山陰朱氏香雪居刊本景印、六冊。

『毛西河論定西廂記』五巻末一卷、元・王徳信撰、元・関漢卿統、清・毛奇齡論定、武進董氏誦芬室石印本、四冊。

『精刊陳眉公批西廂記原本』二巻、辛亥年九月初版民国五年十一月再版、中国図書公司石印本、一冊。

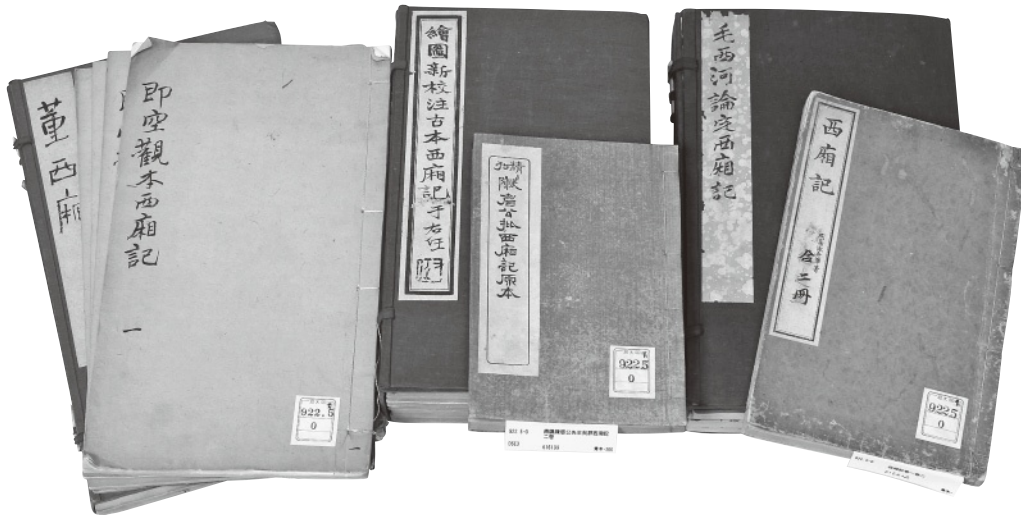
『西廂記』一卷・二巻合二冊、岡島猷太郎訳、明治27年、一冊。

『董解元西廂記』四巻、金・董解元撰、彙刻伝奇第一、二冊。

「私が始めて『西廂記』を知つたのは、高等學校に在學中、笹川臨風氏の「支那文學史」の作例に挙げられてゐた「驚夢」の一折である。面白さうだが讀めない。ただ支那にも戯曲の有ることを知つて無上にうれしく、私かに關心を寄せてゐたので、京都へ來ると早速古本屋をあさつて『西廂』の首四折だけを詳解した本などを見付け出して、其れをたよりにたど〜しい歩みを始めてゐたのであつた。」*1とあるように、『西廂記』は青木が特別な關心を持った作品であつた。それを裏付けるように、青木文庫にも四種の『西廂記』と青木が「首四折だけを詳解した本」と称する岡島猷太郎訳『西廂記』（実際には各巻四折を訳出し、その一卷・二巻を合巻しているので第八折までの訳が収められている）、および『董解元西廂記』一冊が所蔵されている。

凌濛初本、王驥徳本、毛西河本にはそれぞれ書き込みが見られるが、最も書き込みが多いのは凌本で、王本・毛本とのテキストの校訂なども書き込まれている。また、凌本の第三冊（3-4本に相当）、王本の第一〜三冊（1-3本に相当）、毛本の第三冊（3-4本に相当）はそれぞれ包装紙でカバーを作っており、博士の愛読の跡が偲ばれる。『董解元西廂記』には王徳信『西廂記』との対応関係が書き込まれている。

*1 「狩野君山先生と元曲と私」（『青木正児全集』第7巻）



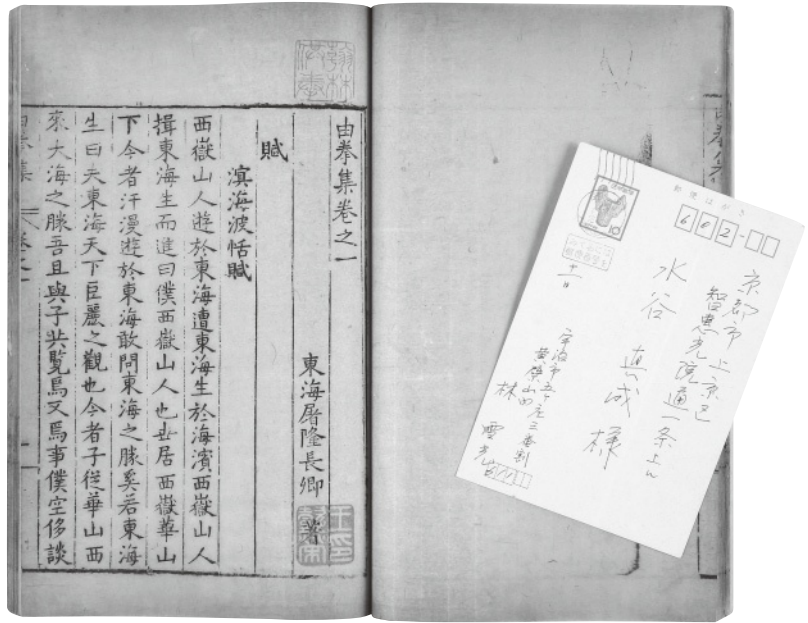
『西廂記』への愛着を示す各テキスト

[62] 『由拳集』

『由拳集』は、明・屠隆撰・万暦八年序刊本（14冊）。全巻にわたり青木自身の手による製本がなされている。水谷眞成宛のこのハガキは、宇治市黄檗山の林雪光氏からのもので、参観した後のこととして、「『由拳集』は黄檗山隠元の蔵書の中にございます」という貴重な情報が寄せられている。

屠隆（1542-1605）字は緯真、また長卿。浙江の鄞県人。万暦5年に進士となり、穎上（安徽省）の知県などに除せられた。時に名士を招いて飲酒・賦詩し、放縦な暮らしをした。官を辞めて後は、文を売って終わった。演劇にすこぶる自負するところが有った。

青木は屠隆の「彩毫記」（李白の逸話に関する話）、「曇花記」（仏僧の話）などについて言及している（『支那近世戯曲史』）。その「曇花記」は、徳川幕府の「御文庫目録」にも掲げられている（青木「御文庫目録」中の支那戯曲書『青木正兒全集』第7集）。また人に頼まれて、青木は屠隆の「考槃余事」の翻訳の校閲をしたこともある。

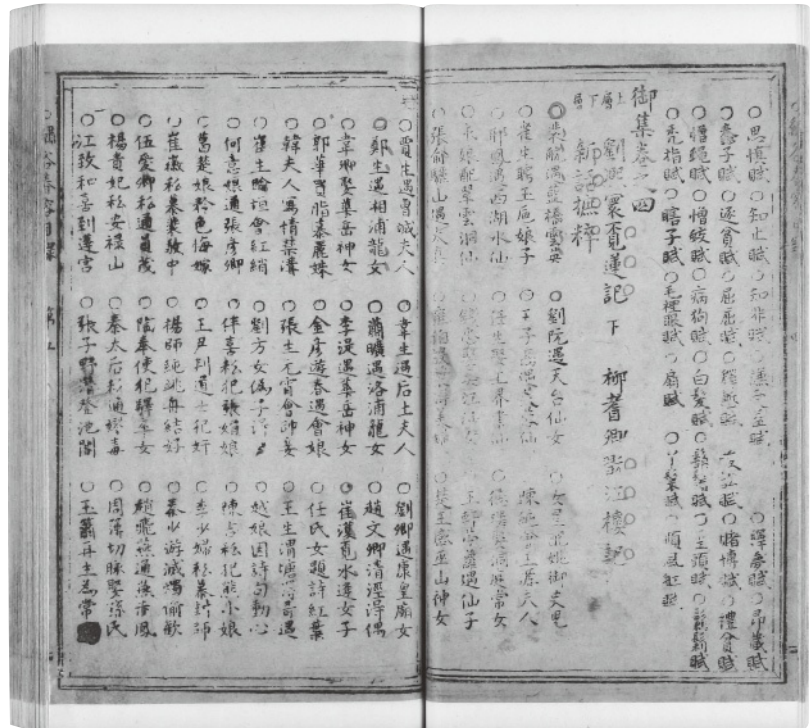


『由拳集』と水谷眞成宛ハガキ

[63] 『繡谷春容』

『繡谷春容』、明・起北齋輯、十二卷、十二冊。青木文庫では数少ない明刊本。

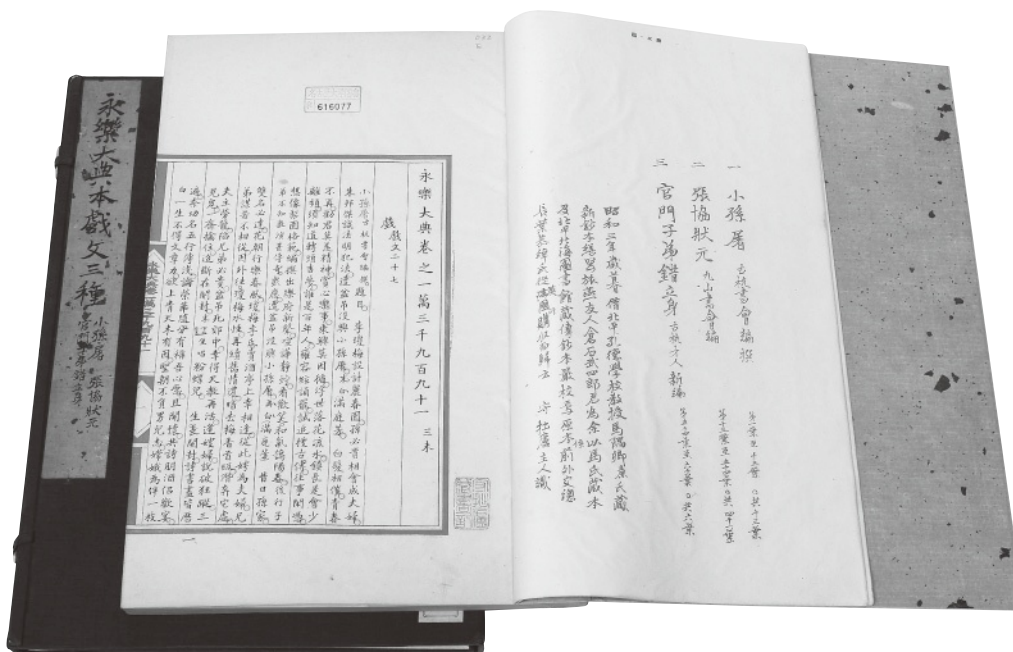
封面右行に「起北齋輯」、中央に「繡谷春容」、左行に「上層芸窓清玩 下層騷壇摭粹嚼麝譚苑」とある。「魯連居士題」と記す「繡谷春容序」と、「起北齋騷壇摭粹嚼麝譚苑總目」が附され、本文は上下二段に分けられ、上層は「芸窓清玩」、下層は「選鏤騷壇摭粹嚼麝譚苑 羊洛敕里 起北赤心子彙輯 建業大中 世徳徳堂主人校鏤」と題されている。管見の限りでは、諸書目に著録されていない。



『繡谷春容』

[64] 『永楽大典本戲文三種』(昭和3年、倉石武四郎による馬廉蔵写本)

戯文とは、南宋より中国南方一帯に行われた戯劇。南戯とも。永楽大典には三十三種の戯文が収められたが、散佚していた。1920年、葉恭綽がロンドンでその中の三種「小孫屠」「張協狀元」「宦門子弟錯立身」を発見し、本国に持ち帰る。北平康徳学校の馬廉が副本を所蔵しており、青木は昭和3年(1928)、倉石武四郎に託してそれより写本を作らせている。写本の見返しには、事の顛末と倉石への感謝の言葉が朱で記されている。青木はこれら三種の著作年代を元代と推定し、「文學的価値は甚だ低いものであるが資料として尊重すべきである」と述べている。(『支那文学概説』『青木正児全集』第1巻、『支那近世戯曲史』『同全集』第3巻)



倉石武四郎の友情の結晶—『永楽大典本戲文三種』青木博士識語

[65] 『玉茗堂全集』

文集十六卷、詩集十八卷、賦集六卷、尺牘六卷からなる。明・湯顯祖撰。康熙三十三年刊。十六冊。湯顯祖(1550~1616)は『牡丹亭還魂記』などの戯曲で知られる。玉茗堂というのは、彼が万曆26年(1598)に官職を辞してから郷里に構えた寓居の号。湯顯祖の詩文集としては明代に韓敬が編纂した『玉茗堂集』、沈際飛が編纂した『玉茗堂選集』などがあるが、清代にいたってこれらの入手が難しくなったため、阮陵雲・阮正嶽が韓敬編『玉茗堂集』を竹林堂から重梓した。それが本書である。

青木はその著書『支那近世戯曲史』第3篇第9章第3節において、湯顯祖の人となりや戯曲作品の内容を詳述しており、本書からの引用も散見される。また青木文庫には、湯の戯曲作品である『還魂記』『南柯記』も収められている。

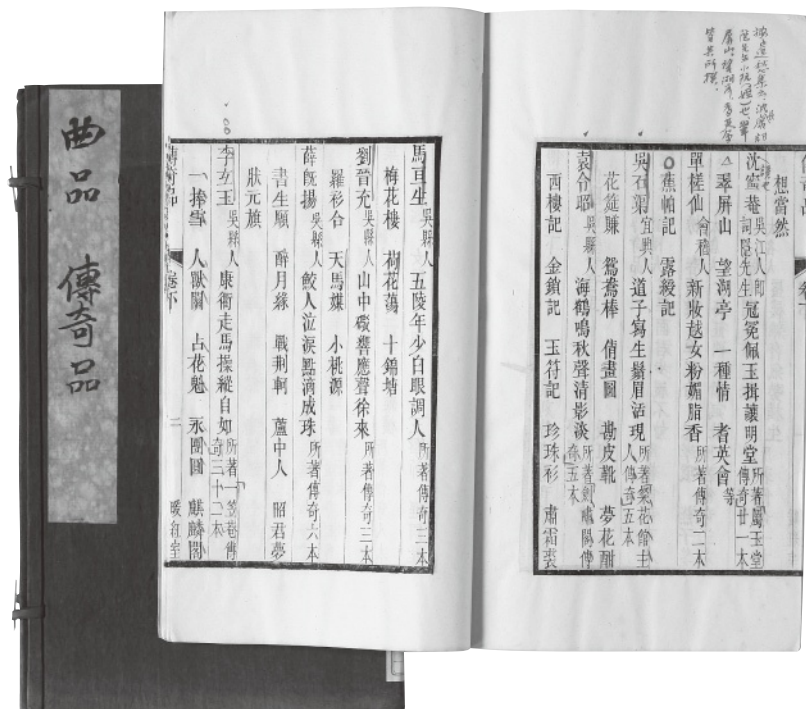
[66] 『曲律』

『曲律』四卷、明・王驥徳撰、二冊。青木は『曲律』について「南戯の作法を論ずること甚だ精審、其の中雜論一卷は古今の戯曲を評論し、往々作家の事蹟に言及して重要な資料を吾人に遺せり」と述べている。(『支那近世戯曲史』) 実際、青木文庫蔵本では全体に及ぶ圈点など書き入れの他、雜論部の話題ごとに見出しを書き入れ使いやすくするなど博士の愛用の跡が偲ばれる。

[67] 『曲品二卷 伝奇品二卷二冊』

曲品二卷。明・呂天成撰。彙刻伝奇附刊第二種。青木著『支那近世戯曲史』に『曲品』を論じて次のようにいう。「彼（*注：呂天成）を不朽に傳ふるものは其の「曲品」二卷に在り。「曲品」は元末より當時に至る古今の戯文を品評するものにして、其の著録する所甚だ廣く、明曲の大概を通覽し得可き書は之を置きて他に求むる可からず。惜むらくは論述空虚の文字多く、徵實に益少きことを。」青木文庫所蔵本には、作者情報の追記（字や代表作）を中心とした書き込みがなされている。

伝奇品二卷。清・高奕撰。彙刻伝奇附刊第三種。『曲品』よりも書き込みは少ないが、同じく作者情報の追記や訂正が中心。



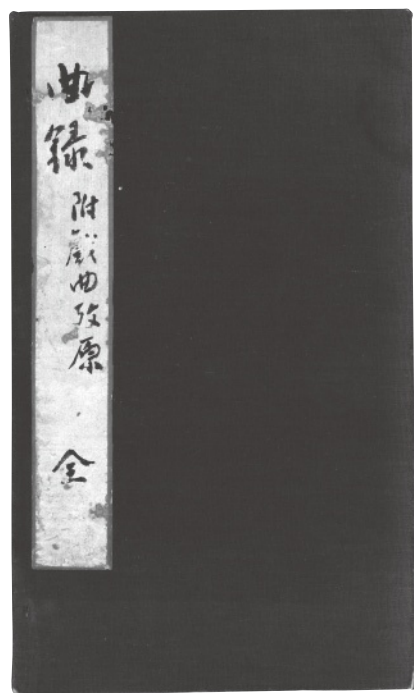
『曲品二卷 伝奇品二卷二冊』

[68] 『曲録六卷附戯曲攷源』 宣統元年序。

王国維著。「王静庵先生の追憶」に「『曲録』に『西廂記』を傳記部に列するの非を論じかけると、先生は矢庭に、あれは誤でした、と疾くに氣付いて居られた。そして二階から「曲録」「戯曲考源」の合刊本を一部取つて来て贈られた」とあるように、青木が明治45（1912）年2月に京都の王国維をはじめて訪れた際に直接贈られたもの。

全編非常に書き入れが多く、王氏の誤りの訂正や、各作品の所蔵・収録関係の追補がなされている。また、本来線装本であったのを青木によって洋装に改められており、加えて王氏の写真・「海寧王忠愨公傳」・王氏の自死を報じる順天時報（民国16（1927）年6月7日）の切り抜き、および遺書の写真が添付されている。巻末には「沈思堂主人 明治四十五年二月初旬王氏を訪れ元曲の事ども語らひけるに自著なる此著を贈らる□（※一文字不明）は曾て予が斯道の研究に大助力を得たる書なり 學校に一部ありて未だ手に入る、を得ざりしに今得たる喜ぶ」との識語があり、書き込みや添付ともども、この本および王国維が青木にとっていかに特別な存在であったかを物語っている。

参考文献：「王静庵先生の追憶」（『青木正兒全集』第7巻）



『曲録六卷附戯曲攷源』

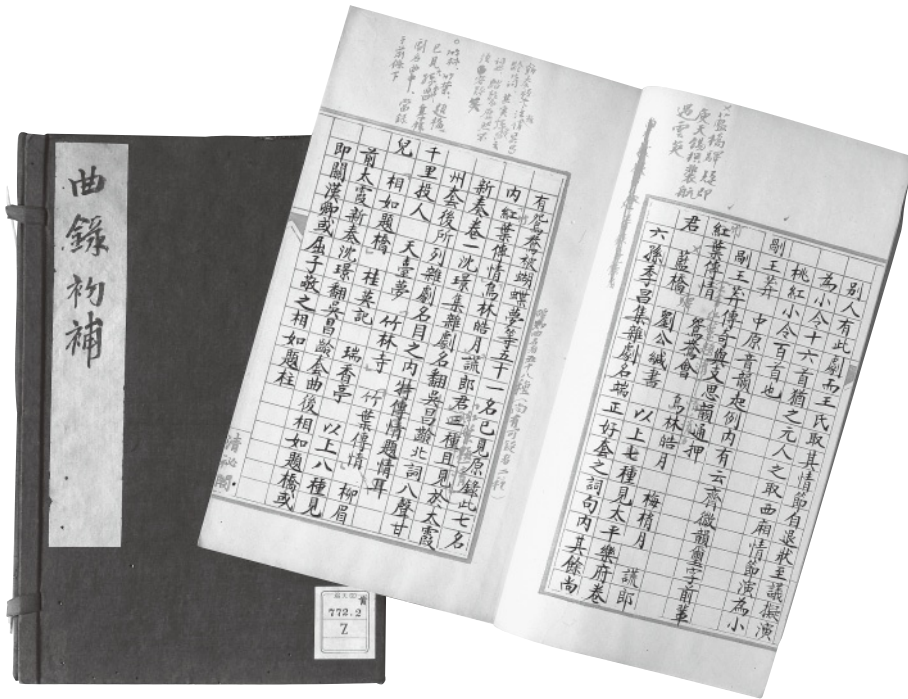
[69] 『曲苑』

陳乃乾輯、民国十年石印本、十冊。『江東白苧』（正・續）『劇說』『曲話』『曲品』『新伝奇品』『曲録』『南詞叙録』『衡曲塵譚』『曲律』『顧曲雜言』『雨村曲話』『曲目表』を収める。とくに『曲話』『顧曲雜言』『雨村曲話』に書き込みが多い。また、『曲品』『新伝奇品』は暖刻室刻本との比較が書き込まれている。

[70] 『曲録初補』

任訥撰。民国16（1927）年10月序。題名の通り王国維『曲録』の欠を補うべく企図されたもの。抄本。『倉石武四郎中国留学記』に「手紙を書いて迷陽先生に『曲録初補』が写し終わったことを伝える」とあり、倉石より贈られたものとわかる。書中で取り上げられている劇目の収録・所蔵情報などに関する書き込みが見られる。

参考文献：倉石武四郎著、柴新江・朱玉麒輯注『倉石武四郎中国留学記』（中華書局 2002）



『曲録初補』

[71] 『読曲叢刊』

民国六年、武進董氏誦芬室刊本、四冊。第一冊に『録鬼簿』『南詞叙録』、第二冊に『旧編九宮目録』『十三調南呂（*朱で「曲」と改める）音節譜』『衡曲塵譚』『曲律』『顧曲雜言』、第三・四冊に『劇說』（上・下）を収める。全編に圈点、傍線、書き込みがみられる。このうち『十三調南曲音節譜』には、『読曲叢刊』が同書及び『旧編九宮目録』を徐渭撰とするのに対して、実際には蔣孝の撰であることを論定する書き込みがなされている。これについては『支那近世戯曲史』所収の「沈璟の「南九宮十三調曲譜」と、蔣孝の「九宮」「十三調」二譜」にくわしい。また『録鬼簿』には所録劇目が、南曲のどの劇目に相当するかを示す書き込みが多い。青木文庫には、このほか『録鬼簿』の用長楽・鄭振鐸等景写、天一閣旧藏明藍格鈔本景印本を蔵するが、こちらは序の部分の読曲叢刊本との異同を示す書き込みがあるのみ。



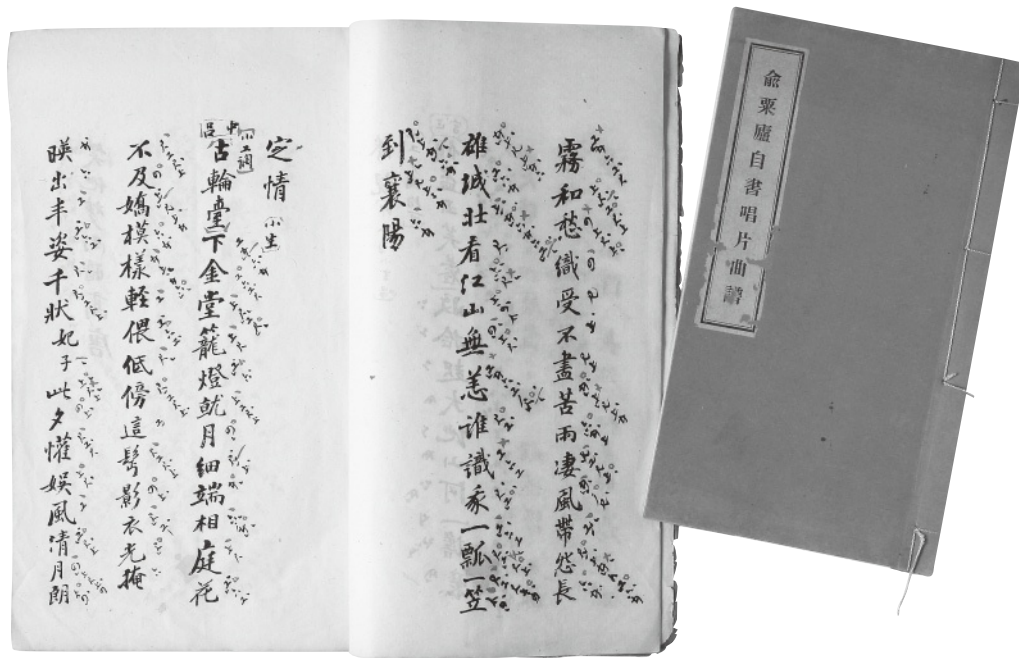
『読曲叢刊』

[72] 『度曲一隅』及び『兪粟廬自書唱片曲譜』

度曲一隅。1921年、兪宗海が百代公司から発売した崑曲のレコードの曲譜を自書したもの。兪宗海は崑曲役者。字は粟廬。1847（道光27）年生、1930（民国19）年卒。息子は著名な京劇役者の兪振飛。

兪粟廬自書唱片曲譜。1940（昭和15）年、瓜加研究所。青木所蔵の『度曲一隅』を影印したもの。それゆえ、限定百部の1番目のナンバーが振られている。青木はこのほかにも兪宗海のレコードそのものも所蔵していたらしい。また、百代公司のレコード目録も、青木文庫に所蔵されている。

この本の来歴については、傅芸子の跋に次のようにいう。「青木迷陽博士は吾が国の曲学を研究してすでに深い理解に達しており、崑曲や京劇の古いレコードの豊富なコレクションを有している。……ある日博士はその所蔵するレコードを出して私に見せてくれた。京劇は譚鑫培など、秦腔は元元紅など、極めて富んでいる。なかでも私を最も驚かせたのは兪粟廬翁が昔百代公司のために録音した諸片が一つ一つみな揃っていたことである。……翁の哲嗣の振飛君は私と戯曲仲間であり、長らく北京に滞在していたが、この夏故郷に帰った。私が彼を訪ねると、彼は先君の伝を私に見せ、あわせてかつて刊行した『度曲一隅』一冊を贈ってくれた。これは粟廬翁が自ら自分の諸レコードの曲譜を書いたものである。私は迷陽博士が既にそのレコードを珍重しており、物というものは常にそれを好む人の下に聚まるものであるから、この本を博士に贈ってレコードと曲譜との両方が揃うことを望んだ。博士の門下の奥村伊九良君はこの曲譜が流伝することを望み、ここに影印して世に広めた。私は、吾が国の南北曲が日に日に衰えていくときに、今東瀛の人士がかえってこのように保存しようとすることに深い感慨を覚える。迷陽博士が所蔵する兪翁のレコードの豊富さは、恐らく世に並ぶものはないだろう。」（原文は中国語）



『度曲一隅』二種

[73] 『中州音韻一卷司馬温公切韻一卷』

『中州音韻』の巻頭の目録には、『詞林韻釋』『中原音韻』と韻目の比較が書き込んである。また、各左頁の左上にはその頁の韻目を見出しとして書き込み使い易くしている。博士は狩野直喜の元曲講読講義について「『北曲譜』『中原音韻』に照らして曲文を正確に句讀し、一言一句を忽諸にせずして意義を解釋」する「正式なる元曲讀法」と評しており*1、「韻を見るには元の周德清の『中原音韻』に據らねばならぬ」*2とも述べているから『中原音韻』を主として用いたのだろうが、おそらく『中州音韻』も読曲のたすけとしたのであろう。一方『切韻』にも圈点・傍線などの書き込みが見られる。

*1 「狩野君山先生と元曲と私」『青木正兎全集』第7巻

*2 「元人雜劇序説」『同全集』第4巻

[74] 『二十四史』

史学会社石印本二十四史。上下函入。青木が京都帝国大学に入学後、研究室を通じて上海より取寄せたもの。青木は「蓋に刻した書名に塗り込まれた緑青や朱の異國情緒がうれしくてたまらず、生きた中國との接近を感じた」と述べている。（「明治大正間京都の漢籍店」『青木正児全集』第7巻）

各所に書き込みがある。たとえば『漢書』以下、各史の芸文志・経籍志では『楚辞』類への、『宋史』芸文志では「茶経」以下茶書への書き込みが見られ、『新訳 楚辞』や『中華茶書』などに繋がる青木の興味をうかがうことができる。また「山海経」「穆天子伝」「漢武帝内伝」などの書名に傍線が引かれているが、青木には「漢武帝内伝」に材を取った原稿が存在する。（「漢の武帝と西王母」今回、展示）



青木愛用の『二十四史』

●コラム (11) : 「青木文庫所蔵珍本紹介

— 『新撰 古今雑歌 附歌詞』

『新撰 古今雑歌 附歌詞』。この不思議な書名と、朝鮮楽器の図像満載の不思議な表紙（口絵〔7〕参照）を見た途端、筆者はこの小さな書物に魅せられてしまった。一体、これはどんな内容の如何なる書物なのか。なぜ、この書物が青木文庫にあるのか。青木文庫の蔵書傾向からは妙にピントのずれたように見えるこの書物は、一体どのような氏素性の書物なのか。本当に青木先生の蔵書だったのか。もしそうだと、どういう経緯で入手したのか——人から寄贈されたのか、偶然入手したのか、自ら求めて入手したのか、もし自ら求めたのならどのような興味によって求めたのか——そして青木先生はどのような興味を持ってこの書物を所蔵し続けたのか、疑問が次々と湧いてきた。以上の筆者の極めて個人的な興味を発端として、現在わかる範囲のこと、そして、筆者の興味に引きつけて青木先生の興味関心を付度しつつ、推理も交えながら、本書の特徴について述べてみたいと思う。

まず、本書の内容の紹介に入る前に書誌的なことを述べておこう。本書は、大正5年に京城・大昌書院より初版本が発行されているが、その翌年には再版本が京城府・徳興書林より刊行されている。なぜ、初版の書肆が「大昌書院」だったのか、翌年には「徳興書林」なる書肆から再版されているのか、この二つの書肆はどういう関係にあるのか、これが第一の疑問である。しかし、この点については明らかにすることが出来なかった。

本書の入手経緯については、青木先生の年譜を見ると、文部省の在外研究員として大正15年に北京に留学した際、下関から日本を発って、釜山に渡り、その後、京城、平壤、奉天を経覧して北京入りしている。その折りに京城の書店に立ち寄ったか、古書店で偶然見つけたかしたのではないかと想像される。少なくとも青木先生の著作を見る限り、本書に言及したもの、あるいは、本書の内容（朝鮮の「雑歌」という文学形式）に関連する記述は見あたらないので、「偶然」青木先生の興味の琴線に触れて購入したと考えるのが自然であろう。

では、その興味の琴線とは何処にあったのか。青木文庫には実に様々な資料があるが、中でも著作に繋がるような自筆メモから、ちょっとアイデアが浮かんだので書き留めておいた程度のメモ書きまで、実に多種多様である。その中でも筆者の胸を踊らせたのは、とても不思議で珍奇なメモである。（『歌謡』の項目も参照。）三枚の小振りな薄手のメモ用紙に書きつけられているのは、日本の鈴鹿馬子唄、佐渡おけさ、江差追分、伊勢音頭、ソーラン節、蜜柑の歌、といった俗謡である。青木先生は、これら「調子よき謡ひもの」に関心を抱いていたようなのである。また、青木先生の著作には、中国の詩歌や戯曲を論ずるとき、しばしば日本の義太夫や地唄、追分、馬子唄、子守歌、都々逸などになぞらえることがある。中国の“文藝”を考えると、青木先生の頭の中では常に「音（楽）」が切り離すことのできない要素として存在していた。

『歌謡』を手元に置いたのも、その発刊の目的に賛同しただけでなく、口承で謡われる調子よきものに引かれたからではないかと筆者は考える。当時、中国では民俗学の研究は未開拓の学問領域で方法論も確立していなかったが、歌謡（民謡・童謡）を民俗学上の重要な資料とみなし、まず手始めに歌謡を蒐集しようとした。また、歌謡を卑俗で価値のないものとしてではなく、国民の心の声が反映された文学作品とみなし、民族の詩の発展に寄与する資料として、広く興味関心を喚起しようとも企図した。そのような大きな新文学運動の流れの中で掲げられた大義名分を横目で見ながら、こっそりと別の興味をもって『歌謡』に目を付ける感性を持ち合わせていた青木先生が、北京に行く途上で『古今雑歌』という書名と、けばけばしいほどの、しかし、非常に蠱惑的な表紙を見たとき、どのような思いが胸に去来したのだろうか。

今回、“俗謡”というのがひとつのキーワードになるのではないかと思います、『古今雑歌』について調査をしてみた。

富山大学附属図書館（中央図書館）ホームページ（資料案内→特殊資料→特殊コレクション・大型コレクション）によると同図書館所蔵の〈朝鮮開化期大衆小説原本コレクション〉について、次のような紹介がある。

朝鮮開化期大衆小説原本コレクション（韓国） （平成12年度採択）

1900年前後の朝鮮において出版された大衆娯楽小説の原本。本文はハングルによる縦書きで、使用される文字は5ミリ角ほどの大きいもの、表紙は極彩色の絵入りで、100頁前後で一つの物語がまとめられていて一冊の形態をとっている。1900年前後に朝鮮半島の都市部で一般庶民の読み物として流行したものである。朝鮮語では総称してタクチ本と呼ばれ、文学史的には日本の江戸期の絵草紙に相当する。

表紙が極彩色の絵入りであること（口絵〔7〕参照）、ハングルによる縦書きであること（ただし『古今雑歌』にはハングルの右側に小さく漢字も書かれている）、文字は5ミリ角ほどの大きさであること、100頁前後で一冊の形態になっていること（『古今雑歌』は全94頁）、いずれもあてはまる。

では、「タクチ本」とはどのようなものか。和田とも美氏によると、

朝鮮は古くから印刷技術の優れていることで知られており、活版印刷の始まりは確認される限り世界で最も早いと云われている。王朝時代を通じて特権階級により独占されていたその技術の享受は、20世紀に入り一挙に大衆の娯楽として拡散した。それまでのような韓紙と糸によって一冊毎に丁寧に仕上げられた上等な書物とは違い、糊付け製本で粗末な紙に極彩色の絵で装飾された表紙を持つそれらの大衆娯楽小説は、30銭前後の比較的安価な値段で市場に流布することとなる。表紙のけばけばしさが、幼童の遊ぶメンコの色彩のようだといふことで、朝鮮語でメンコを意味する‘タクチ’を付して俗に‘タクチ本’と呼ばれる。

確かに『古今雑歌』は粗末な紙でできており、製本も粗雑で、価格も丁度30銭である。どうやら本書は、間違いなく所謂「タクチ本」と呼ばれるもののようである。更に、和田氏によれば、タクチ本には題名に宣伝用の角書きが添えられるのが常だそうだが、『古今雑歌』にも角書きがあり「新撰」と添えられている。

富山大学図書館所蔵の「朝鮮開化期大衆小説コレクション」にはこのタクチ本の原本が264冊蒐集されている。現在大韓民国で写真版でリプリントされているものはわずか40タイトルにすぎないという。そこからこの264冊という分量がいかに膨大なものであるか推し量られる。蒐集された資料の年代は1907年から1978年に及び、ジャンルは創作・歌集・古典的作品の簡略版・説話・翻案・笑い話集・文章見本集・談話集・布教書など多岐に渡るといふ。このジャンルの中に「歌集」というのがあるのに注目しよう。『古今雑歌』もジャンルで言えば「歌集」に分類されるはずだ。

更に、朝鮮初の本格的長篇小説とされる李光洙の『無情』が単行本として出版されたのが1917年。1907年以前の“古小説”と“近代小説”『無情』が登場する1917年までの間の10年間の文学的空白を埋めるものとして、大衆娯楽小説（タクチ本）は“新小説”と呼ばれ、大量に生産され消費された。和田氏によれば、実際にはタクチ本はこの10年間でその使命を終えたわけではなく、1970年代に至るまで安上がりな娯楽として人々の生活に生きていたといふ。しかし、当面、筆者の関心は1907年から1917年の10年間にある。『古今雑歌』の初版が1916年（大正5）、青木が手にした再版本は1917年（大正6）のものだ。これは、タクチ本最盛期の時に出版されたものである。

さて、ここまでくれば、『古今雑歌』はタクチ本の一冊だと断定してほぼよかろう。

ところで、富山大学のコレクションを検索してみても『古今雑歌』はヒットしない。少なくとも蒐集された264冊の原本の中にはないようだ。大韓民国ソウル大学奎章閣には『古今雑歌』が2種所蔵されている。その一は、京城・大昌書院刊、1916年（大正5）の初版本。その二は、京城・徳興書林刊、1928年（昭和3）の第7版本。どちらも原本である。だとすれば、青木文庫所蔵の『古今雑歌』再版本（ただし、徳興書林という書肆から出版された版本としては最初のもの）は、もしかすると世界に一冊しか残っていない版本かも知れない。

ここで、徳興書林について一言触れておくと、この書肆は少なくとも大正六年の時点では、必ずしも大衆娯楽小説を中心に出版活動をしていたわけではないようだ。青木文庫所蔵『古今雑歌』の裏表紙を見ると、徳興書林の主人は金東縉という人で、「本書館発行及び専売書は左の如し」（原文は漢字ハングル混じ

り文)とあり、そこには、四書集註や經書、辞書類、尺牘、日韓会話辞典、精選八大家、地図、銀行簿記、算術教科書など、硬派の書籍が並んでいる。勿論、「小説 劉忠烈伝」、「小説 洪吉童伝」など、「小説」という角書きを持ったものも14点あり、先に和田氏が述べていたように、価格も15銭、20銭、25銭、30銭で他の書籍に比べて安価である。この14点の小説群のリストの間に挟まれるようにして『古今雑歌』も挙げられている。これら15冊は恐らくタクチ本なのであろう。

ここからは、タクチ本のジャンルの中でも「歌集」に分類されるであろう『新撰 古今雑歌 附歌詞』とは如何なるものかについて述べよう。

まず、「雑歌」である。それから「歌詞」である。「雑歌」、「歌詞」（「歌辞」とも言う）とは何か。一説に「雑歌」とは、日本の「俗曲」に相当するもので、民衆の間で歌われてはいるが、その起源はクワンデ（広大）と呼ばれる仮面劇や人形劇の旅芸人の歌に起源をもつもので、主に官妓や妓女たちによって歌われていた歌である、という。（関鼎氏による。）しかし、筆者は当面、張師助の著書『韓国の伝統音楽』に従って理解しようと思う。その理由は、張氏による「雑歌」と「歌詞」の違いの説明が、格調（韻律のようなもの）や詩の内容といった文学的な区分に依らず、音楽的な面から区分しており、その特徴の挙げ方と分け方が、恰も、「梅郎と崑曲」に見られるような青木先生による中国戯曲における北曲と南曲の違いの説明と相似しているからである。これは偶然の一致である。しかし、青木先生と張氏がよく似た説明原理を用いていることに、筆者は強く興味を感ずる。張氏によれば、雑歌も歌詞も音楽として唱うものであるから、文学的な面より音楽的な面から区分されるべきであると言ひ、歌詞とソウル地方の雑歌（十二雑歌）との音楽的な相違点を以下のように述べている。

- ①歌詞の唱法は雅楽（正楽）スタイルを維持しながら、主として西道の歌の唱法（中心音の4度上の音を適当に揺声する）を帯びている。
- ②歌詞は大部分が流暢な緩い速度で、洗練された発声法を使い、仮声（*裏声、ファルセット）を多く用いる。
- ③雑歌の唱法は雅楽の唱法とは距離があり、西道の歌の唱法の特徴を強く持つ。
- ④十二雑歌は十二歌詞に比べて軽快な速度に激しい揺声を使う。その揺声の場合は中心音の4度または5度上の音に出てくる。執杖歌など仮声を用いる曲調もあるが、大部分の曲調は肉声（*地声）で唱う。

この区分では分けられないものもあるようだが、以上が張氏の説である。雑歌と歌詞については以上である。

最後に残った問題は、本書は本当に青木先生の蔵書だったか、という点だが、これについては確証がある。目次の頁に青木先生の号「沈思洞」の篆刻蔵書印があるからだ。

惜しむらくは、青木先生が恐らくは朝鮮語を解しなかったことである。ハンゲルの構造については或いは承知していたかもしれない。しかし、このような興味深い書を折角手に入れながら、それを研究上活用することはなかったようだ。“俗謡”は俗謡であって、仮に研究上のヒントを得ることはあったとしても、そのものを研究対象にするには、後生を待たねばならなかったのだろう。『支那文学概説』を著した時、その章立ての第一章に「語学大要」を置いたほど言葉の仕組みを重視した青木先生である。以下、第二章「文学序説」、第三章「詩学」、第四章「文章学」、第五章「戯曲小説学」、第六章「評論学」となっている。文学概説書の首章に「語学」を置き、その内容は中国言語学上伝統的な「小学（六書、訓詁、音韻）」である。このような構成はこの類の書には稀に見るものであった。文学を研究する上でこれほど「言葉」、或いは「言語（の構造）」、そして「音声」というものを大事にした青木先生だが、「遊心」を嘯き「趣味人」を装いながらも、やはり、青木先生はあくまでも文学者であった。曰く、

「文学は須らく味はふ可きである、陶醉すべきである。然し食へども其の味ひを知らず、酔へば則ち足ると云ふやうな牛飲馬食の徒であつてはならぬ。一寸した鹽加減、微妙な風味にも靈感する味覺を養はねばならぬ。味覺とは何ぞ、鑑賞力である。鑑賞力は何によつて養はれるか、経験と批判とに因るであらう。経験は讀書によつて増進し、批判は熟慮によつて正當を得る。つまり讀んで考へると云ふ平凡な結論に達する。但だ其の讀み方と考へ方が問題である。」

「朱子は讀書の法を説ひて謂ふ。讀書は本文を熟讀し、字々咀嚼玩味することが必要で、分からぬ處は深思し、尚ほも分からぬ時に註釋を見てこそ益がある。それは宛も人が饑ゑて食ひ、渴いて飲んでこそ始めて味の有るやうなもので、饑ゑず渴かずして強ひて飲食するも何の旨いことが有らうかと。洵に至言である。それは獨り讀書の要訣たるのみならず、文學の鑑賞等に於ても、凡て此の心がけを以て邁進するならば、心眼は漸く開けて、獨創の天地が之を待つであらう。」(『支那文學概説』「序」昭和十年四月、著者識)

蓋し名言なるかな。

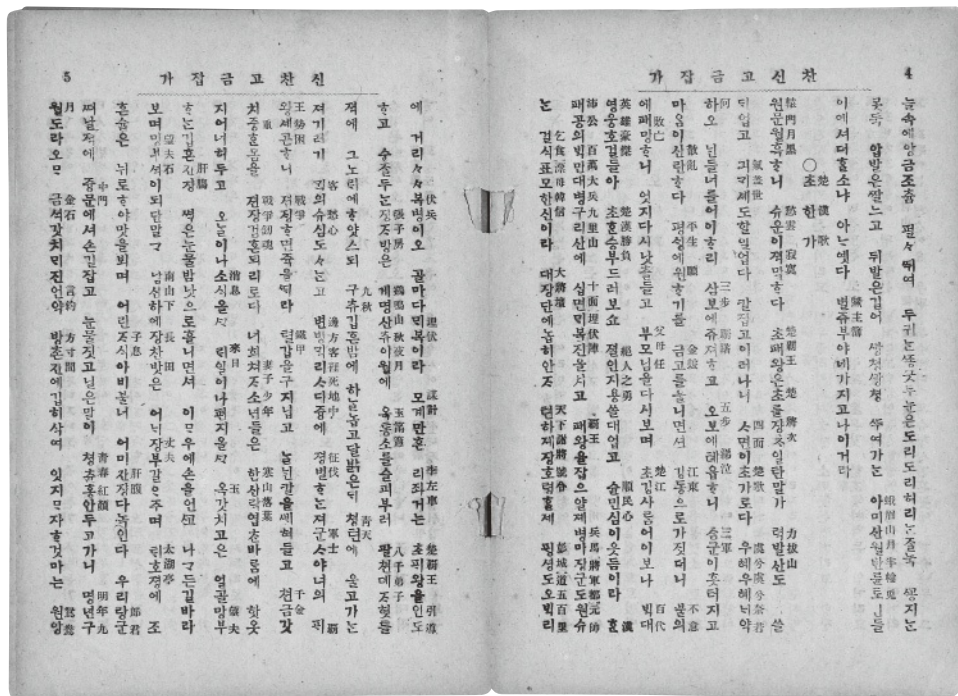
参考文献：和田とも美「〈朝鮮開化期大衆小説原本コレクション〉について」(富山大学附属図書館報『書香』No37所収 2001年3月27日発行)

張師勛著、金忠鉉譯『韓國の傳統音樂』(韓國文化叢書9)(成甲書房 1984年5月10日初版)

関鼎『アジア諸民族の民謡』(音楽之友社 1978年12月10日初版)

水谷眞成「青木正児」(江上波夫編著『東洋学の系譜』所収 大修館書店 1992年初版)

『青木正児全集』第1巻 春秋社 1969年12月



雜歌

青木正児博士年譜

元号	西暦	年齢		
明治20	1887	—	2月14日、山口県下関市の漢方医青木坦平の次男として生まれる（二男二女）。坦平は白石照山に漢学を学んだほか、南画家をうちに招いたり、妻や娘に中国の音楽をさせたりと支那趣味があったようである。	
	38	1905	19	9月、第五高等学校第一部入学。英語教師に厨川白村がいたが青木とは合わなかった模様。
	41	1908	22	9月、京都帝国大学文科大学支那文学科入学。狩野直喜・鈴木虎雄・内藤虎次郎に師事。当時一年ほど教鞭を執った幸田露伴に小説の指導を受けるも、露伴が去ると創作は断念（後任は藤井乙男）。
	44	1911	25	狩野直喜の指導を受け「元曲の研究」をテーマとして卒業論文を提出。卒業後は一旦下関に帰郷するが、再び京都に戻り9月大日本武徳会武術専門学校教授となる。
	45	1912	26	2月、京都の王国維を訪ねる。
大正2	1913	27	4月、紀藤艶子と結婚。	
	5	1916	30	10月、彙文堂が『冊府』創刊。年6回発行。青木もたびたび寄稿する。
	7	1918	32	8月、武術専門学校を辞し、9月同志社大学英文科講師及び平安中学校講師を兼任。
	8	1919	33	8月、同志社大学英文科講師及び平安中学校講師を辞し、9月同志社大学文学部教授となり同文学予科を兼任。梅蘭芳来日公演、『品梅記』に「梅郎と崑曲」寄稿。
	9	1920	34	9月、小島祐馬・本田成之らと『支那学』創刊、「胡適を中心に渦いてゐる文学革命」を寄稿。胡適・周作人・魯迅らと知り合い、手紙の往来がはじまる。同月はじめての著作『金冬心之芸術』（彙文堂）出版。
	10	1921	35	4月30日、はじめて富岡鉄斎を訪ねる。
	11	1922	36	3月25日神戸港より出港し、第一回中国遊学の途に就く。上海から入り、杭州・蘇州・南京・揚州・鎮江・廬山など上海を中心に江南各地を遊歴。四月八日、王国維を訪ねる。5月26日帰国。その様子を「江南春」として『支那学』に寄稿（6-8月）。
	12	1923	37	4月、龍谷大学講師を兼任。12月同志社大学文学部教授を辞し、東北帝国大学助教授となる。
	14	1925	39	3月26日下関より出港し、文部省在外研究員として中国留学。釜山に上陸、京城・平壤・奉天を経て北京に至る。北京をベースに鄭州・開封・洛陽・大同・雲岡などに遊ぶ。辻聴花を訪ねる。4月王国維を訪ねる。8月21日北京大学諸氏の招宴上、胡適・周作人らと会う。
大正15	1926	40	3月18日一時帰国。4月6日再び中国へ。上海に上陸。寧波・鎮海・舟山・沈家門・普陀山・曹娥・紹興・錢塘・嘉興・湖州・蘇州・常熟・廬山を巡り上海に帰る。再び出て、鎮江・南京・蕪湖・安慶・九江・漢口・洞庭湖・湘水を歴遊して長沙に至る。7月5日帰国。8月東北帝国大学支那学第二講座（中国文学）初代教授となる。	
昭和2	1927	41	4月、『支那文芸論叢』出版。	
	3	1928	42	韓世昌来日公演、「崑曲劇と韓世昌」を大阪毎日新聞に寄稿。
	5	1930	44	『支那近世戯曲史』出版。同書で京都帝国大学より博士号を授与される。
	6	1931	45	2月、『通俗古今奇観』出版。
	7	1932	46	4月、「劉知遠諸宮調考」を『支那学』に寄稿。
	10	1935	49	12月、『支那文学概説』出版。
	12	1937	51	9月、『元人雜劇序説』出版。
	13	1938	52	3月22日、京都帝国大学文学部教授となる。東北帝国大学教授と兼任。
	16	1941	55	11月、『江南春』出版。
	17	1942	56	8月、『支那文学芸術考』出版。
	18	1943	57	4月、『支那文学思想史』出版。
	19	1944	58	9月、「夜裏香の花」、『学海』に寄稿。
	22	1947	61	6月、京都帝国大学教授を退職。関西学院大学及び立命館大学講師となる。8月『支那学』終刊。
	23	1948	62	2月、『抱樽酒話』出版。
	24	1949	63	2月、『中華文人画談』出版。6月『華国風味』出版。12月関西学院大学及び立命館大学講師を辞し、山口大学文理学部教授となる。
	25	1950	64	1月、『清代文学評論史』出版。10月『酒の肴』出版。
	28	1953	67	9月、九州大学文学部講師を兼ねる。10月日本学士院会員となる。
	32	1957	71	2月、『元人雜劇』（訳注）出版。3月山口大学退職。4月立命館大学文学部講師となる。9月『楚辞』（訳注）出版。12月『「嘯」の歴史と字義の変遷』を『立命館文学』に寄稿。
	33	1958	72	3月、『琴棋書画』出版。8月『随園食单』（訳注）出版。
	34	1959	73	6月、『中華名物考』出版。

元 号	西 曆	年 齢	
36	1961	75	4 月、『中華飲酒詩選』出版。
37	1962	76	1 月、『中華茶書』出版。6 月『酒中趣』出版。
39	1964	78	7・11月、内田道夫解説『北京風俗図譜』1・2 出版。12月2日卒す。
40	1965	—	5 月、『李白』（訳注）出版。

※年齢は数え年。

※本年譜は『青木正児全集』第10巻・年譜をもとに、本展覧会の内容に沿って改めた。

編集部より

青木正児先生は自著の出版の際は、すべて正字・旧かなで通されましたが、メモや書簡などは通行の字体も多く使用しておられます。また『青木正児全集』も、大正・昭和前期に刊行された旧著を踏襲して、1969-75年にかけて出版されたもので、現在の状況とはだいぶ異なっております。青木先生ご自身、中国古典文化の啓蒙と普及にはかなり腐心されておられました。このような事情を勘案し、本図録では、『青木正児全集』の引用文については正字・旧かなとし、その正字もユニコードの拡張A・B及び特殊なソフトを用いない範囲でと致しました。書名・作品名・人名などの字体は、様々な事情はありますが、特別な場合をのぞき常用漢字で表記しております。どうかご了承のほどお願い申し上げます。

執筆者一覧

- 伊藤義人 「2007年秋季特別展開催にあたって」
- 杉山寛行 「名古屋大学附属図書館秋季特別展によせて」
- 加藤国安
「終わりなき『江南春』の旅—その原資料が語るもの」
コラム（8）（9）
文献解題… [11] [15] ～ [18] [20] [24] ～ [29] [31] [32] [42] ～ [44] [47] ～ [51] [62]
- 田村加代子
コラム（3）（4）（5）（7）（10）（11）
文献解題… [33] [57]
- 中井政喜
コラム（2）
文献解題… [10]
- 張 小鋼
コラム（6）
文献解題… [34] ～ [38]
- 中塚 亮
I（全部）
コラム（1）
青木正児博士年譜
文献解題… [1] ～ [6] [13] [14] [28] [45] [46] [61] [66] ～ [73]
- 上手祐子 文献解題… [39] [53] [55]
- 竹内航治 文献解題… [19] [21] [52] [64] [74]
- 陳 洲 文献解題… [9] [54] [59]
- 花村昭紀 文献解題… [22] [23] [30] [65]
- 田中琴恵 文献解題… [7] [58]
- 金 靄彤 文献解題… [40] [41] [60]
- 白石真子 文献解題… [8] [56]
- 喜納祥子 文献解題… [12] [63]

実行委員

伊藤 義人 (委員長)	加藤 国安
田村加代子	齋藤 夏来
寺井 仁	川瀬 正幸
牧村 正史	中井えり子
渡邊 俊彦	蒲生 英博
伊藤 哲谷	次良丸 章
西尾 哲也	

調査協力

東北大学附属図書館	
上手 祐子	金 靄形
笠井 直美	塩村 耕
白石 真子	杉山 寛行
竹内 航治	田中 琴恵
張 小銅	陳 洲
中井 政喜	永澄 憲史
中塚 亮	花村 昭紀
喜納 祥子	

名古屋大学附属図書館 2007年秋季特別展

「遊心」の祝福

—中国文学者・青木正児の世界—

会期：2007年10月1日(月)～10月19日(金)

9：30～17：00 (土日・祝祭日も開館)

会場：名古屋大学中央図書館4階展示室

主催：名古屋大学附属図書館・同附属図書館研究開発室

共催：名古屋大学大学院文学研究科

後援：日本中国学会、愛知県、岐阜県、三重県、名古屋市の各教育委員会

〈講演会〉

日時：10月13日(土) 13：00～16：10

場所：名古屋大学中央図書館5階多目的室

講師：永澄憲史 (京都新聞・南丹支局長)

「陶然自楽として—ジャーナリストの目に映った青木正児」

井上 進 (名古屋大学大学院文学研究科教授)

「好むことと知ること—青木正児の学問」